の點に於て餘りに無頓着なり餘りに無能力なり。昔時の切支丹宗は早く日本人の此傾向を看取して何等か奇術を施ししならん。是れ當時比較的傳道の進捗せし一因にして三百年後まで魔法邪術と誤信せられし所以ならん。我神佛各派も幾分か此の臭味を帶びて其の宗運を維持せざる者なし。獨眞宗に至つて其の臭味なきが如し。而して其の繁榮却て他の御利益を凌ぐの觀あり。異とするに足れり。左すれば御利益を現金にせずとも信仰の仕方にては繁榮に至るべき道なきにあらざるべし。

以上は專ら基督敎と外部との關係を見たるなり。未だ悉せりとは云ふ能はざれども、大概此の位にて少しく內部を瞥見せんと存じます。

一、日本の傳道爰に五十年と申しますけれども、少しく傳道の結果が見えて一小敎會が橫濱に組織されましてからは僅かに三十七年四ヶ月（明治四十二年九月迄にて）でございます。此の間に八萬餘の新敎信徒新舊三大派合計では概數貳拾餘萬の帳面表でございませう。而して尤も傳道者の數多きは新敎派なれども、大小四拾計りに分れて居る事故到底統一も協同も出來る者でございません。是は我黨の敵たる魔軍の爲には尤都合善き備立で有りませう。併し是は歐米でも其の通りで有つて困つた事の樣ではあるけれども、どうかこうか各役に立つて居るやうでございます。日本では是からどうなりませうか分らぬけれども、此の弊害を成るたけ少くする樣にしなければならぬ事でございませう。不幸中の幸に日本に於て我黨の競爭者否靈界の優勢者なる佛敎は勿論神道にも隨分分派がある。日々に多くなると云ふ次第故我々の分派も餘り不思議でないやうに見えて居る事でございます。果してどうなれば善いのやら分らぬ事ながら、今の處では成べく其の中の大なる者が成るべく大きくなり、其の間の隔りを可成近くして應援が出來易き樣にするが緊要なるべし。稀には最も强大なる一派が大いに努力して他の大小派の占領地を併呑して仕まつたなら、立派に統一が出來るだらうと思ひ又は論ずる人もあるか知らんなれ共、是は所謂議論でありてどんな夢想家でも今の日本の基督敎社會に實行せらるべきことゝは見えぬであらう。萬一そんな風の事が向後興るとすれば餘り議論抔喧しくせぬ人物が出來て不知不識の間に其の勢を制する事もあらん乎と想像せらるゝ事でございます。併し左樣の夢を當てにしては大間違なれば、各敎派自分の立場を踏み締め大勢に鑑みて成るべく步調を整へる樣に致さば主の俄かに來り給はん時に、恐らく幾分か御咎めを寬やかにする事も出來よう乎と考へる事でございます。

二、狹き幼弱なる敎界に廣き歐米の寫眞を見る樣な矩合もございます。甚だ少數ではあれども舊神學もあれば新神學もあり時々惜しき新聞の數頁を論戰場と致します。勿論多數讀者は何を言うて居るやらサッパリ分り申さず、そんな處をば拔に致して新聞の讀み處少きをこぼします。敎會政治も大概歐米の見本が備つて居りまするが、こゝに一種の變り物は敎會を厭ふ連中でございます。其の中に眞面目に律義なる事にて献身的なる靈性的なる人々も割合にある事は大いに一時を諷するに足る事なれども

今の日本の大勢を觀ずれば出來る丈各教會を助けて堂固なる者となし、發展の實力を養はしむることに勘付いて然るべきであるのに、其の未だ發達せざるに（勿論弊害もあらんなれども大方は中より生じたるにあらずして外より持込みたる者多からん）、頻りに之を敲きたりとて所詮益を爲すことあるまじ。唯破壞に終りて一の憐の亡羊を生ずるのみなるべし。

基督教界内に於ける大小種々なる注意事件猶數多あるべしと雖も、今一々悉すこと能はず是より賴母しく思ふ事を一二述べて見ませう。

傳道界に立ち働く内外人を通じて傳道の困難なること（思うたよりは）、忍耐持久合同協力の必要を認められたるが如き趣きあり。是れ誠に喜ばしき事でございます。自分の立場の實相が分つて參りました事は幸でございます。明治廿三年國會の開くる頃までに日本の大勢が基督教に傾くならん抔妄想しても餘り馬鹿らしき事と思はれ無かつた時もあります（勿論我黨の我田引水論にて教外人からは嘲笑せられたに違ひない）。偖て其の時期も疾くの昔に過ぎて、日清戰爭も濟み日露戰爭も首尾よく了りて日米戰爭の噂とまでなりても、未だ基督教は今日の通りである。然れ共人々が餘り退屈しなくなつた。顧れば基督教が、今日に比すれば無宗教同樣なる羅馬帝國に勢力を得るまでには三百年計りかゝつて居る。佛教が日本に深く根蔕を下すには矢張り二三百年もかゝり、今日の樣に全國各戸に關係を得るに至つたのは切支丹事件が機會となつて政治的に出來たので、開教後千年計りの後である。我黨は其の眞中に世に並びなき惡歷史を持ちながらおめず臆せず這入り込むのである。面倒なること親み惡き事決して不思議の事でない。況んや何うしても西洋臭き事を免れざるに於てをやでございます。其れが急に親しき交際が出來ぬとて氣を落すのは、こつちが無理であると云ふ處に皆氣が付いて來たのは大いなる進歩である。又十五年前に此等の事に氣が付いたとて大いに意氣込み、頻りに外國人と分離することを急ぎたる仲間もありて一問題となり居りしが、是も亦大いに熟して矢張内外の力に協同するの必要を認め、平穩に其の道が開かれ來れるは亦これ一進歩なりと存じます。

餘り長くなりますから此の位に切上げますが、此の講演は傳道に任ずる姉妹方を主としてなすものなれば、婦人傳道に就いて一言申します。

婦人の事は分り惡きもの故に釋迦に說法の嫌あれ共、男子の眼で見る處では婦人方は感情が鋭敏で能く物事に氣が付くから、事によると男子よりも餘計に慷慨する樣に見ゆることがございます。教會の事に就いても色々慷慨する、不平が出來る。慷慨や不平は元來理想あつて出來るものであるから是あるは賴母しき事である（理想なくして出來るのはおこぼしとでも可申、慷慨抔云ふ文字を嵌めるは勿體ない事でございます）。さりながら是が餘り過ぎると、聞く人をも思ふ吾をも失望させ、いつも曇り勝ちにて本當の働が出來ぬ樣になります。神樣の御用を勤むるに朋輩や國體の事が痞癪にさはるとていつもまずい顏をして居る樣では忠勤は出來ません。人の怠慢を咎むるよりは其の人に勤勉を勸むる

事が用ゐられやすきものでございます。人の無慈悲なることを責むるよりは慈善の事業に誘ふこと餘程有効なるものでございます。姉妹方の引受けらるゝ婦人は特に議論よりは感情で動く人になり、實行上に其の心情を訴ふること尤も有効なり。神様は男子に腕力を與へ給ひて女子には涙を與へ給へり。涙の力は大いなる者でございます。願くは皆様の涙に強大なる力を與へ給はんことを切に祈る處でございます。

（明治四十二年九月聖經女學校創立廿五年記念講習會にて講演すべき筈なりしも、病氣のため出席叶はず、後學報に掲げしもの）

特種の民族

キリスト我等の爲に己の身を捨て給へり。是我等をすべての罪より贖ひ出し、且己の爲に一つの民を潔め之をして熱心に善事を行はしめん爲なり。（テトス書二〇十四）

御製

罪あらば朕を罪せよ天津神民は吾身の生みし子なれば

明治四拾五年の紀元節は幸にして我等の禮拜日に適逢せり。此の國民に尤貴重なる此の記念式を壯嚴にするに尤も貴重なる禮拜を以てするを得るは、是國運大進張の徴なり。我人禮拜する焉ぞ列祖並我等の祖先の祭れる天神にあらざらんや。又久しく西半球にのみ存在する此の天神教なるキリスト教は一種の特別なる國民の紀元記念式を聖別するに至れるは、是亦一發展にして天國擴張の一徴にあらずや。基督は我は破壞の爲めに來らずして、成就建設の爲めに來れりとは斯る事にあらずや。

神武已前の舊遺傳は一種或は數種の神話となり了する日もあらん。されど其の敬神の思想は彌々輝くの日あらん。然れども猶時に外教と呼ばるゝところの我基督教こそ眞正の天神を祭ることを國民に教へて、上古の敬神思想を全うする者にはあらざらんや。

神代の遺傳はいかになり行くとも、神武已來二千五百有余年の史實は實に大なる者にして、神武天皇即位即ち立國の紀元節は、實に此の國民生命の濫觴にして、世々忘るべからず。千代に八千代に國體論の會議を要せざるなり。

謹んで二千五百餘年の古を回顧すれば、列祖九州の南邊に數代の間力を養ひ、神武に至り、孤軍を提げて十五年の間征旅に服し、遂に中原の大和に至り、今日大帝國となるべき基礎を据ゑ給へること實に讃美感謝の至りなり。其の始は實に眇たる一團にして新に舊族の住居せる中に攻め入りたることなれば、其の苦辛危險言語に絶す。基督が身を以て新民を購へるに左も似たることなり。歴代の治亂は皆練磨なりき。神武の民はイスラエルの如く單に民にあらず、大國民となれり。是れ天の深く謀り給ふ所なるべし。

願くは此の國民には基督の犧牲精神を添へて、神祖の遺志を繼ぐに一層高尚ならしめ、善をなすに熱心なる者とならしめ、國家的に特種なるのみならず精神的道德的に天下に比類なき者とならしめんこ

とを。（明治四十五年紀元節）

『井上哲次郎氏の談話』を讀む

『教育時論』二百七十二號四頁に宗教と教育との關係に付、『井上哲次郎氏の談話』と云ふ題號ありき。井上氏が或人の問ひに答へたる筆記を掲載せり。井上博士は博識の聞え高き人なれば、何の問題によらず能く解説批評を下さるゝは、勿論適當の事なるべし。去りながら世には岡目と實踐（學理と實際とは申さず、眞正周到なる理論は、實際と合はねばならぬ故）とは大いに異なるものあり。故に井上博士の論を批評又は議論するにはあらざれども、博士には其の專門にあらぬ實踐の機會なしと見ゆる基督信徒の心得方を申列ぬるは、幾分か世間偏見の誤を防ぐに足るべしと思ひ左に略記仕り候。貴社の採りて紙面を塡むることあらば幸に存候。

一、耶蘇教の道德中、國家の區別を認定せずと云ふに付、井上氏は云ふ『新約全書を通覽して首より尾に至るも、一も耶蘇が國家の事を論じたるを見ず。唯一ヶ所「シーザー」の事を説きたる所あれども、是は唯「シーザー」に納むべき租税は、滯なく納めざるべからざることを説きしものにて、是を以て耶蘇が國家的の思想を有したることの證となすべからず』云々。

此の引例は、吾輩も國家的思想の證據とは思はざるなり。乍去租税を納むることよりは猶大事なるを思ふなり。新約全書を讀まぬ人にして、單に租税の事と聞きたらんにはつまらぬ事と思ふなるべし。今其の本文の一節を掲れば左の如し。

カイゼルの物はカイゼルに歸し、又神の物は神に歸すべし。

當時猶太國は、羅馬帝（カイザル又はシーザー）に征服せられて獨立を失ひたれ共、其の宗教制度は依然として存したれば、其の神殿に捧ぐる金は、羅馬帝國の貨幣を用ゐる事を許さず、必ず猶太國固有の金に限りたる事なり。然るに、此の時耶蘇に敵する人々が羅馬帝に租税を拂ひて、民の義務を盡すは如何にと問へり。其の意旨に兩坑を設けて陷れんとするなり。若し耶蘇答へて、羅馬は我を亡せり、是れ敵國なり、納むべからずと云はば、之を現政府に叛く者として、之を捕へん。若し唯從順を説かば、之を國を愛せざる者、神に不信なるものとして之を捕へん。耶蘇そこで羅馬の貨幣をば羅馬政府に納めよ、猶太の貨幣をば神殿に納めよと言へるなり。我等基督教信徒は是を以て教政各獨立して、其の本領を異にするの教を得る處とはなすなり。政教各獨立すべし。故に基督教を奉ずるものは、如何なる政體の下に立ちても差支なきなり。若し其の政體にして普通の道理に合ふものあらば況して撞着すべきの憂ひあることなし。故に其の國固有の善德美風は、變じて基督教と衝突せざるなり。成程耶蘇は現世國家の事に付、明言したることなし。是れ蓋し耶蘇の本意なるべし。何故に本意なりや。是れ長き文章を要することなれども、其の要旨を云へば、元來猶太國と云ふ國家は、

メシヤの神國の豫備をなす爲めに組織せられし國として、初めより幾變遷を經たり。最初には、其の國の生出すべき希望、茫として遼遠にあり。漸く形をなしてアブラハム家の大家族となり、一變してモーセの律法に治めらるゝ國民となり、是に於て上帝は其の國の君主にして、士師其の大宰相たり。一變してダビデの王國となり、天佑の下に此の民を統率して、將來のメシヤ（主救）又其の神國の豫表とは信ぜられたり。耶蘇はダビデ王正統の家に生れて、其の國獨立を失ふの時に際せり。ミルトン其の幼時の思想を形容して曰く（「基督の榮」の譯に由る）

羅馬の人に打勝ちて、イスラエル人を救ひなん、そのゝち天下を征服し、をごれる者の跡を絶ち、世を泰平に治むべし。

王統の家に生れて、英才を抱ける少年の心をばよく讀みたりと云ふべし。斯く基督の徒は、其の救主の在世に國家的思想なしとは思はざるなり。されば耶蘇は右の氣象を以て生長したりしなれば、長ずるに從つて其の天聲愈明らかになり、其のイスラエルの國家は、世界の救の爲めに超世間に打立てらるべき、靈の國神の國の階級なることも堅く悟られ、終には『我國は此の世の國にはあらず』といふに至れり。故に耶蘇の王冠は、鐵にもあらず、珠にもあらず、宗教の眞理なり。耶蘇の國家は人種の區別なく、其の版圖は山川田園にあらずして、宇内の億兆の心なり。其の國の律法は正義なり。斯くメシヤの國は順序ある進歩を以て、無形なる靈の國となれり。萬代世界萬國の標準たり又中心たる國家とはなれり。故に特に國家の教訓なきは却て萬國に通じて衝突せざる所以なり。耶蘇をして猶太國の特性に基きて、國家の教となさしめんか、變じて萬國と相容れざるものあらしめん。幸に此の事なし。如何なる國家も、正義を以て律法とするメシヤの國風と調和せざるものなかるべし。メシヤの國には廣漠なる餘地ありて、各國特種の國家を容るゝに足るものあるなり。況んや我皇國の如きは、一面には政事上に君民の關係を有し、又一面寧ろ中心には最古廣大の家族、太古より骨肉君臣の關係あること、百般の事物皇室の恩澤に出るもの甚だ多きは、メシヤの國の上帝を父とし萬人を子とし、萬物萬事皆父の德澤によるものに甚だ相類するものあるをや。是を以て、余輩は謂はんとす。基督は心ありて、特種なる國家の事を語られ、而して自己の國家は世間の國家より超越して、其の高さ廣さ共に、萬種の國家を容るゝに足るべき天國なりとす。何んぞ必ずしも絶えて國家の思想なしとせん。其の精なる、其の靈なる、世間のものと並列すべからざるによるなり。

一、現世は僅に未來の世界に入るの門戸たりとする事

基督は實に未來を重んずること博士の說の如し。此に博士に對しては無用かは知らざれども、一般世間人に對して、基督信徒の心得を言ひたき事は、博士の言に『現世を見ること甚だ輕く』云々に就てなり。斯く申したらば、世間人は現今の義務道德をも輕んずる樣に思ふならんが、左すれば大

なる誤りなり。未來を重んずるものは、現世の榮燿福利をば比較的に重んぜざるなり。是れ信仰の性質より然らざるを得ざることにて、眞の榮福は形骸を離れたる靈界にありとするが故なり。然れども、道務道德の事に至りては、未來を意とせざる心よりも一層重きを置かざるを得ざるなり。是も亦信仰の性質より來るものにて、現在の義務、現世の修德は、現世のみならず却つて將來靈界の榮福に大關係あるものなればなり。されば、萬事現世のみと思ふより、遠き慮りありて現世の務を重んずるは、理に於て、情に於て、然らざるを得ざるものなり。是れ亦勅語と趣を異にするかはしらざれども、抵觸はせざるなり。

一、博愛の事

勅語の博愛と耶蘇敎の博愛との間に差異ありや否やは論せず、耶蘇の主義は全く墨子か兼愛の說に同じく、『人の父母を愛するは猶己の父母を愛するが如く、人の國君を愛するは猶己の國君を愛するが如くにし』云々とは、基督敎の實際とは餘程隔れる考定なり。多くは喋々することを要せず。たゞ左の一句と人情とを考ふれば足れり。

寡婦に子或は孫あらば、彼等先づ己の家に孝を行ひ、其の親子に恩を報ゆることを學ぶべし。是れ神の意旨にかなふ事なり。（テモテ前書第四章）

これは使徒中の使徒なるパウロが、其の弟子テモテに、敎會を牧することを敎へたるものにして實際の心得なり。又是なくも、人情に於て兼愛の出來得べきものにあらず。曾て或る處に、博士が『耶蘇敎は情を以て立つ』と言はれしことを記憶せり。達見として感服せり。實は基督敎は、上帝を天父と稱し、基督を救主と呼び、心情の耕耘を以て第一の工夫とせるものなり。もし父子の倫には、兼愛を實行せよとあらば、到底首尾不揃にして、人情に戻り、迚ても斯樣に世界に廣まるものにはあらざるべし。

一、忠孝の敎の事

博士は『耶蘇敎の大に缺點とすべき點は、其の忠孝と云ふ二德を說かざるに在り』と說き出して、耶蘇が自らさへ孝行に冷淡なる一例として、マタイ傳八章二十一、二の兩節、英文を引き給へり。和譯にては左の如し。

また弟子の一人いひけるは、主よ先づゆきて父を葬むることを我に容せ。イエス曰けるは、我に從へ、死にたる者に、其の死せし者を葬らせよ。

此の文章は一見甚だ過激に見ゆれども、其の場合の通常なりや、非常なりやを考へざるべからず。抑イエス出世の時代は其の鄕國猶太は羅馬に併呑せられ、久しく羅馬帝の嬖臣なる異族の大ヘロデ王の暴逆無道に苦しめられ、之に次ぎてポンテオピラトの如き詭譎峻勵なる大守に虐せられ、民塗炭に苦しむが上に、心靈德義の方面を察すれば、暗黑の力人心を支配して、罪惡充滿人情氷のごと

し。此の時に當り、當國正統の王家なるダビデの家に生れたる耶蘇が、祖先の遺烈を敬慕し、蒼生救濟の思想を以て世に出でたり。其の時の急、其の業の大、豈に尋常を以て視るべけんや。勿論耶蘇は干戈を振うてダビデの王家を回復するに勉めずと雖も、此の王國の目的たる精靈的の王國回復寧ろ建設にして、此の憐むべきイスラエルを政治上よりは寧ろ先づ罪惡の暴威より救ひ、施いて世界萬國の生靈の惱苦を救はんとせり。而して其の基礎を置くの年限は僅かに三年有餘の間にありとす。此の必死の場合に當り、其の股肱たる門人即ち其臣僕に緩急を告げ、大義親を滅せしむるは又止むことを得ざることならずや。加之『之を葬むる』の語に就ては、註釋大いに說を異にするものさへあり。一は曰く、是れ實に死せるなり。他は曰く、東邦の習俗老親に待して孝養するをば葬ると云ふ。此の場合正に是なり。『先づ往きて』との數語は、實に此の語勢を成すなりと。ジョン・ウエスレは、頗る嚴愍に聖書の訓を踐む人なり。其の註に曰く、『此の時其の父未だ死せざりしならん、惟老いたるを以て先づ其の喪に逢ひて後、全く身を献ぜんと云ひしならん』といへり。死者をして、死者を葬らしむるの解釋色々あれども今贅せず。何の道、是は非常の場合にして常道にはあらず。國家危急の場合に於て、君命を受けて內外の要務に當るものは、特別の君命なしと雖も、家に歸らざるも不幸とは云はず。君命のあるとき誰も其の命を批議せざるなり。我輩本文を讀むには、是と類する心を以て讀み居るものにて、一方ならず、念を用ゐ居るものなり。一見素讀、無造作に解釋はなし居らざるなり。

又十誡の『汝の父と母とを敬ふべし』とあるをば、孔孟が忠孝を以て、道德の根本としたるが如くにはあらずと、博士は言へり。或は然らん、唯此の一點は味ふべし。十誡中の六誡は、人と人とに拘ることなるに、其の初誡に於て、父と母を敬ふべしと言ひし外は、兄弟の家もなく、妻子の家もなし。是れ甚だ怪しむべき事ならずや。立法者豈に之を無視せんや。されば我輩實際の考には、父母は人の本なり、父母ありてこそ五體始めて生ずるなれ、餘の四篇は皆此の父母の中に含蓄するなれ、孝は實に德の本、德の初なれと、蓋し遠からざるなり。博士は新約全書ルカ傳第二章に、『耶蘇の兩親が十二歲になる耶蘇を、エルサレムの群集の中に見失ひて、三日の後殿堂の中にて、多くの博士と講習討論し居るを見たり。依つて母は、非常に案じたることを語りて、少しく戒めらしく問懸けたるに、耶蘇は冷淡にも

何故われを尋ぬるや、我は我が父の事を務むべきを知らざるか。

と云へるは、孔子の遠遊を戒むる敎に比すれば其の善惡如何ぞや』と批評せり。我輩は博士の如く、十二歲と云ふことを記憶せざるべからず。又此の子は奇異なる夢相等ありて生れしことをも記せざるべからず。又兩親が平素骨を折りて、天父に仕ふべきことを敎へたらんと思ふも、無理にはあるまじ。斯く要點を占めて考ふれば、英才非凡にはあるべけれ共、十二歲の少年か、恩愛深き兩親に

對して、さまで四角張て、丞しく應答することは、望むべきことにはあらざるべし。況んや孔子が老成の經驗、殊には教訓として、考を要したる言と比較するはいかゞならん。又父母は、此の子の奇異なる誕生を常に回想して、天父に仕ふべきを教へ込みたれば、少年の心にては、兩親の教を一途に思ひ、前後の事情も考ふるに遑なく、慣れぬ都に留りて、教の眞理を講習しつゝあるに、日頃の教育に打替りて、戒言とは、はて心得ぬと眞率に答へたりと見れば、強ち咎むる所なきのみならず、成人の後まで推圖られて慕はしさには非ずや。ストウカル氏は、耶蘇が直に兩親に從つてナザレに歸りしことを從順なりと感嘆せり。同一事の前段は、井上博士に詰られ、其末はストウカル博士に感稱せられたり。人の世に處するも亦難いかな。耶蘇が十二歳の時より三十歳頃に至るの間は得て知るべからざるものなけれど、其の三年間の傳道中の事は四福音に見ゆるなり。其中には耶蘇の家族の事情を考へざる人には、母に對して冷淡なるがごとく、又禮を失せん如く讀まん者もあるべし。されど此の一事即ち母たる人は、誰も同じ事にて、耶蘇を救主として愛するよりは己が子として愛する事切なりければ、屢耶蘇の天職を忘れて、其の危險なる傳道を妨げたること少からざるが如し。其の兄弟の如き、嫉妬の情に滿ちて妨げをなせしことあり。斯の如き家族中に、其の妨げを離れ、且つ同時に之を教へて、靈性の眼を開かしめんこと、平易の手段のみにてはなすべきにあらず。時に嚴格なる對遇も要すべく、又警醒せしむべき言葉も要せらるゝなり。骨肉はなれ易くして教へ難きものなれば、多少の變格あるも止むを得ざる事ならずや。然れ共、耶蘇が深く其の母を愛せしことは、十字架上より其の門徒中、最も忠實にして沈深なるヨハネを呼び其の母を託せしことにて知るべし。（ヨハネ傳十九第三十九節）誰れか無辜の刑辟に逢ひ、憤慨悲愁の雲胸に充ち、將に死せんとするの痛苦の時に當り、母の後事を思ふ者ぞ。愛敬心の充つるにあらずんば、焉ぞ此の事あらんや。井上博士は佛教猶ほ恕すべきものありとして、心地觀經の四恩を引用せられたり。斯の如く搜索せば、基督教の經文にも君上に事ふべきことを教へざらんや。（但基督教の經文は佛教の如く、學問らしく組織をなし、順序を立つることなく、其の大半は傳記にして、他の一半は書簡なれば、文書として、さまで見事なるものにはあらず）。羅馬書十三章に『上に在りて權を掌れる者に從ふべし（中略）、怒によりてのみならず良心によりて從ふべし』。ペテロ前書に『神を畏れ、王を尊ぶべし。僕なる者よ、畏懼を以て主人に服ふべし、只善き者、柔和なる者にのみならず、苛酷者にも服ふべし』。コロサイ書三章二十節に『子たる者よ、汝凡て兩親に從ふべし、是れ主の悅び給ふ所なり』、二十二節『僕なる者よ、凡てのこと肉體につける主人に從ふべし。人を悅ばする者の如く、たゞ眼前の事を務むることなく、誠心をもて神を畏れ從へ』此の外諸所散見する所少しとせず。今代外交上の文書に用ふる天佑を蒙りて某國に君たる云々の語は、元是基督教の信仰より湧き出でたる口調にはあらずや。此の思想にして、誠意に人の心にありたらんには、君上を崇敬するに於て、如何計の勢力あるもの

なりやは、多言を要せざるべし。

終にキリストの愛國の思想は、文字にこそなけれ、其の言行にてしらるゝなり。ルカ傳の十三章十節以下を見れば、惘然なる一婦人の病を醫すの理由として、ヘブル人の遠祖なるアブラハムの娘なりと言ひて、輿論に反し、安息の規程を破り、一般宗教家の忿怒を來すも顧みざりき。又耶蘇エルサレムの滅亡を預知して、屢是れが爲に哭せしことあり。ルカ傳の十九章四十一節に『既に近づけるとき城中を見て、之が爲に哭き言ひけるは、もし汝だにも今この汝の日に於て、汝の平安に關れることを知らば幸ひなるに、今汝の目に隱れたり』云々。又同二十三章二十七節以下、耶蘇が刑場に引かるゝ途上、『衆の民及女等も從ふ、女等は彼を哭きかなしめり。イエス彼等を顧みいひけるは、エルサレムの女子よ、我が爲に哭くなかれ、惟おのれと己が子の爲に哭け』と見えたり。此の精神を受けたる使徒中のパウロは、羅馬書十章に於て斯くいへり。『若しわが兄弟、わが骨肉（共にイスエラエル人種を指す）の爲ならんには、或はキリストより離れ、沈淪に至らんも亦わが願なり』と。基督教信徒、右の如き處より眞正愛國心を養ひ、如何なる國體の中にも生息して良民たることを得べしと信ずるなり。要するに、學問として基督教の書籍を讀むと、己が信仰として之を實際に應用するとには、其の深淺死活の差甚しきものあり。何の宗教も然らんが、別して基督教は實驗的のものにして文字のみにて世に行はるべきものにあらざれば、江湖の君子にして基督教の批評を試み給はん方は、熟練せる基督教徒の腹中に立ち入りて、其の運用を知ることを勉め給はゞ、始めて稍周到なる批評を得らるゝならんと信ずるなり。

此の稿は基督教の辯護又は擴張の目的にて草せるものにあらず、唯基督教の文字が、信徒の實際に應用せらるゝと如何の一端を揭げて、世人の注意を請はんと欲するものなり。若し千中一人の疑を解くことあらば、幸甚の至りなり。（二十六年五月）

德性の成長

人類は禽獸の如く羽毛角蹄を殘して終るべきものにあらず、必ずや別に實を結びて初の目的を達する也。人にして德性の成長を爲さざれば、角になるべき木材が丸太にて終りたるが如し。

德なきの人は稻の藁を殘して一粒の米なきが如し。

身體なる藁は段々枯れんとすれども、靈魂の德は却つて全からんとす、是れ眞の人なり。

德性の進歩も必ず自然の順序を踐む。唯この順序間隔が短き事あり。然れども順序は必ず踐み居る也。

神を畏れ、罪を知り、救主を求め、悔改めて救を信ずるは、是れ穗出でゝ穀將に實らんとするが如し。

然れども全く熟することは此の後にあらんとす。熟したる穀は永遠神の倉に蓄へられて朽つることなかるべし。

第四編　時の變化及時局

故を謝して新を祈る

祈を聽き給ふ者よ、諸人こぞりて汝に來らん。(詩篇六十五〇二)

學問は云ふ、故きを溫ねて新きを知る

信仰は云ふ、故きを謝して新きを祈る

本文の眞義は或祈を聽き入れ給へる、又は聽き給ふべき等の事にあらず。神の德性を表せるものにして、其の存在の狀態をも明かにする者なり。人の祈を聽きて之に答ふる者は、生活・知覺・自由・仁愛等を具ふる者なること明かなり。斯の如く神には矢張同じ樣なる存在の狀態を有して、祈りの必要ある者共の服歸すべきは當然のことなりとす。

吾人は此の神の大護の下に、昨年中如何に經過せしや、吾人は實に祈りつゝ經過せり。多くの點に於て聽かれつゝ經過せり。誠に感謝に堪へざるなり。

昨年は日本國にとりては開闢以來未曾有の年なりき。世界にとりても、其の歷史に新しき長篇一章を加へられたる者にして今尙其の行文を繼續しつゝある者なり。是は謂ふまでもなく、日露の大戰爭に

して、此の新年に於て過去を送り、未來を迎へんとして、前後を通觀するに當りて、如何なる方面のことにても、日本社會に於ては此の影響を蒙らざるものあらざるべし。故に今本年第一回の敎壇に於て、此の交戰一年中の感謝すべき事項を擧げ、又祈るべき事項をも列ねてともに感謝し共に祈ることは尤も大切なる事と思はる。而して今其の感謝と祈禱との事項に立入る前に、日露交戰國と是に關係ある諸國又は事物に就きて、先づ他の戰史と趣きを異にせる著明なる數點を揭げ、注意を促すことは趣味ある事ならんと思考せり。

一、日露兩國の領土人口の大小餘りに懸隔せること。然るにも拘はらず、攻守の勢其の地を替へたる事。同時に眞の大小は物質形體の分量のみを以て量るべからず。須く精神と其の實質如何にあることを學び得べき事。

日本の領土面積十六萬一千百六十二方英里、人口四千五百萬人なるに、露國の面積は八百六十萬〇三百九十五英里、人口一億二千九百萬人なりとは如何に甚しき相違にあらずや。而して大なる者攻めて小なる者守るは普通の事なるに、小なる日本攻勢を取り大なる露國概して守勢を取る、稀れに戰略上攻勢に始まるが如きことありても、果は矢張其の守勢に終る。是に於て疑問なきを得ず。日露兩國は果して何の方面より見ても、露は大にして日は小なりやと、然り其の物質的數字よりすれば日は露の敵にあらざること明かなれば、其の土地如何に利用せられ居るや、其の人口が人民、國民軍人として如何に敎育せられ、其の人心の統一が如何せられ居るや。少くも東洋に於ての陸海軍の設備比較上如何なる權衡なるやを精算すれば、形而上一瞥の差異は大に減じて、互角或は多少反對の差異を生ずるをも計るべからざるなり。

一、戰爭の理由明白なること。

古來交戰國が各其の名分を正して內外の同情を得んと勉むることに怠らずと雖も、多くは相方事情錯雜、理否糾紛容易に其の眞相を知りがたき者あるは普通なり。然るに日露戰爭の起因は、露の滿洲を併呑せんとするにより日本國『安危ノ繫ル所』なる『韓ノ保全ハ支持スルニ由ナク極東ノ平和素ヨリ望ムベカラザル』に至るを防止せんが爲めにして、帝國自衞は第一の大目的なること炳として火を見るがごとし。是れ列國の皆首肯する所なり。

一、人種並政體の全く異なれる事。

戰爭の因は利害の異なれるによる。而して之は疎遠なる者に少なくして、親近なるものに多し。故に交戰國は大概土地相接人種相ひ近き者に多し。然らざれば決して大戰を交ふること能はず。然るに今回は數千里外の兩人種によりて、未曾有の大戰を現出せしむるに至れり。且つ其の政體も亦全く異にして、一方は最新の君民同治國なるに、他は飛切の君主專政國なり。是れ既に甚だ奇なるに此の兩國の位地を見れば、前者は數千年來專制政治淵叢たる極東の一島帝國にして後者は自由權利

憲法政治の本場なる歐洲の一部に國の本部を置く者なること天下の奇觀と云べし。

一、宗教の相違。

露國々教は基督正教派にして國民概して宗教に忠なりと聞ゆ。日本は現に國教なる者なしと雖も、佛教の此の國民に浸潤せること千有餘年なり。由來兩教の思想道德に一致し難き點ある明かなれども、其の戰時に發表せる行動に就ては、其の相異を見難き者あり。或ひは彼れ却て此にして、此れ却て彼に屬せずやと見ゆる場合さへなきにあらず。而して其の負傷者又は捕虜等の戰鬪の域を脫して個人の人情獨り存する場合に至りては、スラブと大和の間はエツウとヤコブに優ること數等なるを見ることあり。大奇却て奇ならずとも謂ふべき乎。

其の實行は却て彼此處を異にするが如きもの往々あり。或ひは何れを其れと分ちがたき例も多ければ何れが果して眞の基督教國なる乎、『我を呼びて主よ〳〵と呼ぶ者必らずしも天國に入るにあらず。唯天に在す父の旨を行ふ者のみ之に入ることを得べし』との基督の聖言を偲ばしむ。

一、其の友國の相違。

日露兩國の實力互ひに相如く者とする。其の友邦の聲援を度外すること能はざるなり。今兩國の最も親しき關係あるものを尋ぬれば、露には佛獨の兩國あり、遼東還附の干涉以來極東に於て常に聲息を通じ、陰に陽に相聲援すること隱れなきことなり。然るに此の兩國間は新なる仇怨の存するあり。宗教も歷史も言文も甚だ異りて、相通ずるところの利害も亦一時的なり。且つ其の位地は共に歐洲大陸競爭の渦中にある者なり。日本の英米に於けるや、前者とは大いに異にして、より多く安全なる性質を含むに似たり。何となれば、英米兩國間は曾て一度相悖戾せしと雖も、元來人種、宗教、風俗、言文を同じうし、政體も亦甚だ近くして大陸の競爭に遠ざかり、獨立獨行をなして、所謂アングロ・サクソンの自由進步を世界に流布せんとす。極東に於ける利益に至つては、三國並進各大洲の一方を代表して相樂しむの餘地乏からざる者あるなり。

以上の如き特殊の事情を記憶しつゝ舊年中に蒙りし好結果を揚げて感謝をなさんと欲すれば、無數の箇條續出し來るべしと雖も、大いに省略して左に數項を述べんと欲す。

一、日本の立場の武士的理想に合したる事。

古來日本武士は大小兩刀を帶びて、之を士の精神と名づけ護身の具となせり。是れ亦名譽記號なりき。然れども之を拔くことは容易にはすべからず、故ありて之を拔くの前には十分忍耐をなし、飽く迄平和の解決を求め、萬止むを得ずして始めて之を拔く。既に止むを得ずして拔く。是戲にあらず、必ず其の目的を果さゞるべからず。

日露の五十年間の關係甚だ異なり。最近十年間の事態彌非常なり。開戰前半年間の關係甚だ切迫せり。然れども帝國の當局者は能く忍べり、有らゆる平和の方法を講せり、緩慢なる高慢なる待遇を重

ねられたり（露國人の外）。列國人も內國人も其の忍耐に驚きたり。露國人の外餘り陰忍に過ぐると忍びし人もなきにあらざりき。然れども時は遂ひに來れり。止むを得ず劍を拔けり。されども之を振りかざして見せることをなさず。電光火石と切付けたり。慥かに打ち留めたり。此の忍耐の理由を簡明に公けにせり。外人は皆な其の事前の態度と處置の壯快なると理由の明白なるに首肯せり。內人は感應せり、氣勢敵を呑むの觀をなせり、勝利の氣運既に成れり。聖詩人と共に歌はん、曰く『神よ我心既に定まれり。我謠ひまつらん、讃へまつらん』と。

一、國民の眞價を天下に認められたり。

維新以來三十年上下擧つて多大の犧牲をなして改革をなし、廣く天下の知識を求めたり。刻苦經營至らざる處なく、夜を以て日に次ぎ、國勢の擴張を圖れり。然れども天下の人皆曰く、極東島猿能く西人の眞似をなすと。日清戰爭起るに及び、天下少しく驚きたれども猶云ふ、是れ黃色人の私鬪のみ、天下の相場に與り難し。北淸役起り、我は列國共同の戰場に殊勳を顯はせり。彼等は云ふ、地遼遠にして列國は精英を送るの便に乏し、日本は其の總體より精悍を送ることを得しならん。日露開戰後に仁川に旅順に捷を得れば、天下は猶ほ是れ奇捷なり、其の終りの如何未だ知るべからず。且つ陸戰にあらざれば決勝を得がたし、果して如何と。鴨綠江を涉り、南山を拔けば曰く是れ皆本隊の主戰にあらずして、局部の事なり。然れども遼陽は早く陷れり。沙河の逆襲は擊破せられたり、旅順は見事に開放せり。天下誰か日本の實力を疑ふことを得んや。大和民族は模倣に巧なるに止まらず、創意同化の力をも有せり。尙武の氣風に至つては獨得にして他族の學び易からざる者ありて存することを明かにせり。此の功や間接に一般黃色人の敎ふべく、爲すあるに足る者なるをも明かにして、彼等自身をして自家の自信を生せしむると同時に、天下をして其の眞價を知らしむるに至れり。

一、國民の心境を廣くせり。

一國の生存の爲めに擧國一擧して立上りければ、地は遠く人種風俗のいたく異れる友邦が、深き同情を示して、喜憂榮辱を共にするの眞狀を見たる島民族が眞に四海兄弟の實驗をなして滿足すると共に、我も他民族を思ふことが出來る樣になれり。久しく人爲に養はれたる島國根情を幾分は打破したるの効あるを信じて疑はざるなり。

一、謹嚴質實の氣風を鼓吹せり。

西半球の物質的文明早くも東漸して已來便利と愉快とは一般の欲望となれり。之に伴れて浮華輕調人心宛も浮油の水上に漂ふが如きの傾きあり。十年前臥薪嘗膽抔は、火星中に言ひはやされし言にもあるかの如くなり來りしが、一朝戰端開け、四千四百萬の安危存亡此の一擧に懸ると云ふに至りて、人心大いに引締れり。眞面目なる談話も耳に入る樣になれり。隨而傳道も比較的出來ることゝ

なれり。

一、皇室の尊榮大いに揚り、擧國一致の精神甚だ振へり。

千萬年後はいざ知らず、現代に於て日本國の社團を集結統一する中心力は、唯一の　皇室のみ。今般の大戰に當り、或族籍或階級中何れか尤も多く軍人を陸海軍に送れりやと問はゞ、瞬時の躊躇もなく、皇族なりと答へん。皇族の家をなす者僅かに十家、而して親しく戰場に臨まれたるは、將官二、佐官二、尉官三、嗚呼何んぞ壯んなるや。況んや、兩陛下の日夕大御心を勞せらるゝに於てをや。是に於て　皇室の尊榮大に揚り人心の歸一實に鞏固にして、國家の根基甚だ確實なるに至れり。

皇帝陛下の國軍の爲め、御心を勞せらるゝの一端は左の御詠歌にても伺ひ得らるゝなり。

夢さめて先づこそ思へいくさ人むかひし方のたよりいかにと

子らはみないくさの庭に出ではてゝ翁やひとり山田もるらん

明治二十二年憲法發布已來軍を亞細亞大陸に送りしこと三回、尤も國民の感焦せる所にして、何れの地方にも出征軍人のあらざるなく、何人も多少の力を盡さゞるものなし。日本人心の一致團結して、喜憂を與にせることは、建國已來未曾有の事なりとす。

一、開戰の間際に於て尤も憂ひたるは軍費の供給と一般經濟の受くべき惡影響なりしが、意外に好況を呈せり。

議會の軍費に協贊せしは申すまでもなく、內外の募債毎回數倍に上り、外國貿易は前年度にして非常の增加なり。

千九百〇三年は　五千百五十萬圓

千九百〇四年は　六千九百萬圓

而して農業に於ては幾拾萬の壯丁（最良の兵士は農民より出づ）未耜を棄てゝ銃劍を取りしにも拘はらず、百年此方知らるゝ豐作なり。（五千萬石以上）

一、日露戰爭の爲め求めずして、改革の氣運を促されたる者あり。

清韓兩國の改革を要するは、天下の公認するところなり、自家の希望する所なり。唯彼等には改革の力なきを如何せん。宛も病者の自ら治療すること能はざるがごとし。今や韓は戰爭の問題となりて、日本の監督に歸せり。清は奇怪なる中立國として覺醒を促されたり。西藏の仙窟は既に發堀せられ、再び閉づることなかるべし。最後に世界の大怪國なる露國にも、猶憲法論が起り、改革の詔勅が發せらるゝに至るとは、實に是世界の大奇變にして、現代進歩の大時期と云ふべきなり。此の戰爭が機會となり、露國に立憲政治が確立せらるゝに至らば、日露戰爭は望外の大成功をなす者にして、感謝に堪へざる處なり。

觀じ來れば日本は長風を帶びて、順潮に航する者なり。其の天命を受け、攝理の下に在ること疑ふべ

からず。されば深厚なる感謝を懷きつゝ、猶左の大願を奉らんと欲す。

一、昨年中の形勢を繼續して其の目的を達せしむる事。

吾人は勝利の必要を感ずると共に亦之を信じたり。されど斯くまでに陸海連勝ならんとは期せざりき。吾人は敵國の内輪に困難の起るべきを期せり。されど斯程に早く、斯程に大ならんとは思はざりき。殊に將帥中の反目の如きは實に意想外の不體裁なり。吾人他人の不幸を樂しむまじき筈なれども、此の不幸が改良の途上に於て必要避くべからざるとすれば、此等の狀態が益々增進して全く我勝利に歸し、永久平和の基を開かんことを懇禱する所なり。

一、歐米列國をして東洋侵略策を施すの有害無益なるを知らしむる事。

東洋の振はざるや久しと雖も先天的に振ふ能はざるものにあらざるは、往古の歷史に鑑み今世紀の日本に鑑みて明かなり。商工業に知識に宗教に平和の競爭をなすこと進步の道なりと雖も、人口稠密なる極東に於て千萬里の外より土地を略せんとするは無謀の至りなり。特に傳道上に及ぼす所の弊害甚だ大なるを見る。極東の基督教傳道は既に半世紀を過ぎたり。然も猶今日の如きは其の病根は宗教其の物よりは、寧ろ政治的侵略に在りとす。列國の教會は早く此に著眼して、此の弊害を除かざれば傳道の成功容易に望むべからず。

西人動もすれば黃禍を說く。是れ詭辯にあらざれば寧ろ杞憂なり。試みに思へ、日本が歐西に侵略を加へんと欲すれば、必ず先づ支那の四億を開導して活動し得べき大勢力となさゝるべからず。嗚呼是れ難事なり。決して日本の獨力を以て成し得べきにあらざるなり。假令望ありとするも百年の後ならざるを得ず。之に反して西方の東に迫るは、現在の事にして日露戰爭即ち實際なり。吾人は之を白禍と稱せんと欲す。黃禍は將來に屬し、白禍は現在に屬するなり。若し之を禁ぜずんば、何れの日か果して確實なる平和を極東に見ることを得んや。

一、東洋の文明をして基督教的ならしめん事。

東洋の文明は古し、故に西洋文明の侵入を受くるの素は充分に備はれり。一度覺醒すれば必ず之を採用するは視易き事なりとす。然れども單に其の皮相に倣ひ、社會的又は人道的と云ふまでにては決して有効なる結果を擧ぐること能はず。必ずや一步を進めて宗教的勢力を加へ、根蔕を深くせざれば其の繁榮も唯一時の者ならんとす。

一、右の如き目的に對して運動すべき基督教徒に靈の賜を下し給はらん事。

極東の傳道に要することは、他の地方に要する者と大差あるべからずと雖も、尤も着眼すべき點は宣教師並傳道者等は政治的便利を恃まずして、眞に自家の德力を以て立ち、且つ可成一致結合して大勢をなすべきなり。

之を要するに吾人が最先最後の祈願は、知らずして神の器械となり居る日本をして、神を知らしめ、

意識的に神の御用を勤むるに至らしめんことなり。（明治三十八年一月十五日、青山學院にて）

年首所感

特に銀座教會に告ぐ

（明治四十二年）

エホバよ、かくていくその時なへたまふや。自己（みづから）なとこしへに隱し給ふや、怒怒（いかり）は火のもゆるごとくなるべき乎。願くばわが時のいかに短きかを思ひまへ。汝いたづらにすべての人の子を造りたまへるや。（詩篇八十九〇四十六、七）

詩篇の八十九篇は猶太人がバビロンに捕虜となりて、難苦と悔辱とを嘗めたる時の詩にして、一方祖先已來蒙りたる神の恩惠と誠實とを思ふと共に、今の有樣の餘りに不幸なるを感じ、神のダビデに爲し給へる御約束の無効ならんかを疑ひ、大いに愁訴し、遂に信仰を以て其の恩惠誠を讃謝して其の局を結びたる者なり。我が帝國は猶太と國運を異にし、頗る隆盛を究むと雖も、窃に我靈界道德界の有樣を通觀し、我教會の重荷を思へば、大いに旻天に哀訴せざるを得ざる者なり。

傳道開始已來五十年、横濱に第一プロテスタント教會組織せられしより三十七年、文教の事實は成功せり、人智は進めり。唯人心の歸向するところ其の道德の實力果して如何。國家の富力は增殖せり。然れども神に就て富める者果して幾干かある。

國家には新古の大小の宗教充滿せり。然れども形而下の利益を與ふべく擬する者にあらざれば繁昌せず。運輸交通は便利になれり。東洋の美なる自然を觀て無盡藏の賜を樂むこと自由になれり。然れども人は一層物質的の快樂を貪りて竭まず。狂奔苦境に入り、生れながら地獄に陷るの愚をなすに似たり。憫然極りなし。神の教會は此の最たゞ中に在り。小さき砦に籠れるが如く四面罪惡の火焔に圍まるゝがごとし。砦の内隅にも宿根苦き苗を生ぜしめて内外を驚かすことあり。吾人も詩人の言葉を一層靈的の意味を以て、天の神に哀訴せんと欲する也。而して此の訴を奉りて、謹んで天の答に心の耳を澄せば、左の如き御考の聞ふる心地すなり。

汝等選ばれたる者かくていくその時を經んとするや。汝等立てたる誓を破りて、長く砦の中に潜み、我恩に報ふるに不忠を以てせんとする乎。われは何日まで此の不義の世と汝等とを忍び得べしと思ふや。われ豈に徒らに我獨子を世に與へて無益の犧牲となさんや。

圖らざりき、此の御答は實に鸚鵡返しに來れり。然り我が愁訴は實に上より來るべき筈の者なりしなり。嗚呼々々恐懼々々。

現社會を警醒して禍より救ふべきは誰の責任ぞ。忠義眞實を輕視し蕩々たる奢侈の風を警むべきは誰ぞ。飲食男子の慾に耽れる世に撙節を說くべき者は誰ぞ。人生の終局に付きて魔醉を破りて亡滅の危きを知らしむる者は誰ぞ。天父と耶蘇基督の愛を傳へ、救を述べて、死せる世界に生命を與ふる者は誰ぞ。

日本の傳道の野に旗鼓を張りたる四箇軍團あり。日基、組合、日美、日聖なり。各特色を帶びたる軍團にして其の勝敗、利不利は全軍に關係する者なり。我日美軍は編制成りて已來十有七ヶ月、此に第三年の首の聖日に當れり。此の軍の足並果して如何。而して其の中堅たる者實に多からず、銀座教會は優中の優なり。其の光榮其責任實に重しと云ふべし。此の年首に於て深く神恩に沐浴して兄弟姉妹心を一にして內部を堅固にし、信仰に於て、品行に於て、活動に於て、全軍の標幟となり得る事を期せざるべからず。戰場は全國に廣がれり。然れども中陣の勝敗は尤も大切なり。願くば大教會の資格を保持せられんことを。米國の母教會は其の愛情に慈々たらず。勇士の母のごとく着々として吾人の獨立精神を鼓吹す。吾人も宜しく驕兒恩愛に狎るの痴體を演ずることなく勇ましく慈母の鼓吹に感奮すべし。（明治四十二年一月三日、銀座教會にて）

年頭の覺悟

此稿曾て青山學院教會に於て演ぜる者に基きて淨書せり。故に青年者を主として考へたる者なり。讀者幸ひに之を了せられんことを冀ふ。

此の演題を掲けて說者自身のみの覺悟を廣告せんとにはあらず、相共に研究して適當なる覺悟を定め一年を有益に送り度願望を遂げんが爲なり。故に先づ吾人の立脚地を見定めんが爲めに數節の經文を朗讀すべし。

汝の若き日に汝が造主を憶えよ。即ち惡しき日の來り年のよりて、我は早や何事をも樂しむところなしと言ふに至らざる先また日や光明や月や星や暗くならざる先、雨の後の雲の返らざる中に汝然せよ。（傳道の書十二〇一、二）

汝等先づ神の國と其の義しきとを求めよ、然らば此等の物は皆汝等に加へらるべし。是の故に明日の事を思ひ煩ふなかれ。明日は明日の事を思ひわづらへ。一日の苦勞は一日にて足れり。（マタイ傳六〇三三、三四）

古人曰く『朝に道を聞いて夕に死すとも可なり』と。是れ止を得ざる時の話なり。且つ如是覺悟は夙に造主を認めて之に事へ、始めて其の終を全うすべきなれば、傳道者の言の如く若き日より道を聞きて神人交感し經驗を久しうすること最も幸福なるべし。後段の勞苦を思ふの時間に就ての聖訓は一見して無益なる取越苦勞を警めたるまでに見ゆれ共、要は現在を重んじて其の本分を盡すに勵み、其の日限の覺悟を以て其の務めに盡瘁すべきことを敎へられたるなり。

明日ありと思ふ心の仇櫻夜半に嵐の吹かぬものかは

『勿謂今日不學而有來日』云々等の心も籠れる者と思はるるなり。

右の本文を玩味しつゝ諸君に謹告せんと欲する事は、先づ本年の忽せにすべからざることを心に銘刻して、左の諸項を考へんことなり。

有爲の志氣即ちアムビションを興すべき事にして、是には少くも二つの意義あり。（一）功名富貴を得んとの熱望。（二）善良正義の生活に成功せんとの熱望。

前者は必ずしも絶對に邪惡にあらず、惟動もすれば狂奔常規を逸するの弊あれば宜しく轡を按じて警戒をなすべく、願ふ所は後者の願望常に前者を服從せしめて、前驅もなせば後殿をもなし、有害なる誘惑に陷らざらん事にこそ。然れど一概に有爲活潑なる氣象の危害をのみ見て、撿束を加へんとするは、自然に反する者として寧ろ有害の結果を見るの虞あるを免れず。

青年男女にして一もアムビッション無き者は、如何に怜悧の資を具へても數ふるに足らざるなり。但し其の理想と目的とを選ぶ事甚だ大切なりとす。蓋し青年は主として準備の生活をなす者なり。特に中等以上の教育を受る者に於て然りとす。此の時期に於て政論に耽り、或ひは夙く商工業の福利を貪らんとするが如きは害ありて益なし。況や成人の實務勉勵に伴ふべき快樂等を早くも獲得せんと欲するが如きは甚だ不相當の事にして、未だ雲あらざるに雨を戀ひ、未だ花咲かざるに果を慕ふの類、却て將來永久に損害を蒙むるの因となるべし。さらば青年の修學時代に於ては全く此の有爲の志氣を實施するところなく、唯將來の理想として手帳と共に筐底に藏むべき者なりや、否々然らず。

青年は現社會の實務に奔走するの便利なきも、此の社會の生活は複雜なる者なり。社會には幅もあれば層もあり、青年なりとて一切此の有爲の志氣を洩らすべき所なきにあらず。寧ろ我修學準備時代の性質に適合する堺に於て、我勇志を走らすべき者あるべし。即ち政事界や事業界を超越して社會に土臺を打固め、陰然指導保護し、任務を帶ぶる所の宗教・道德・慈善・矯風等精神界に縱横馳驅して、修業且つ實務に當るの自由ある者なり。

精神界の事業も事業なり。左れど之を政事界幷所謂實業界の事業に比すれば、利害の關係薄く其の性質遠大なるを以て、其の品性を害する事無く幾分實務の鍛煉をもなし得べし。諸君はアムビションを精神界に立てよ。主イエス・ギリストも高尚なる靈界のアムビションを禁じ給はざりき。惟其の目的と手段とを愼むべきことを敎へ給へり。曾て其の門徒等が、其の將來の地位を爭ふことあるを洞見して曰ひ給ひけるは、『若し首たらんと欲ふ者は凡ての人の後となり、且つ凡ての人の使役とならん』云々。（マコ傳九章三三より三六までを見られよ）

青年の兄弟姉妹よ、當年のアムビションと競爭をば、僅かに遊技の上に又試驗の點數の上に留ずして願くは勇往濶步して心性の向上發達、同人友誼の進捗、天國擴張の事業上に實施せられんことを。

右高尚なるアムビションを確立したりとせよ。次には實行の工夫として吾人の尤も注意修業すべき信操上の事なり。吾人の信仰は出來る丈け深く、成るべく高く且つ溫きを欲するなり。決して皮相の形式論議等に止まりて滿足すべからざるなり。主曰く『生命を與ふる者は靈なり、肉は益なし。我が汝等にいひし言は靈なり生命なり』（ヨハネ傳六〇六十三）。草木に皮あり身あり又見るべからざる生命あり。禽獸虫魚皆然らざるなし。人類亦其の例を脫せざる者なり。然るに吾人の植物動物を觀る、多くは皆皮肉に留り其の生命を知らず。吾人の奉ずべき宗敎にも亦皮肉あり、血あり、骨あり、生命あり。然

るに吾人は兎角此の外面の物のみを見て其の内に潜在する生命を知らず。右の本文の前に主は肉と血の事を語り給ひしに、人々の觀念皆血肉に滯りて其の奥に進入すること能はざるのみ乎、却て之に跌きて既に懷きたる信仰さへも動搖し懷疑勃々たる有樣となりければ、主は猶ほ言葉を加へて右の本文を宣べ『我言は靈なり、生命なり』と警告し給へり。されど一旦興れる動搖は容易に鎭まらず、『多數の弟子たち主を離れ去れり』とありて、是非なき次第なり。

天下の廣き多數の人には、宗教上に於ても皮肉血骨に滿足して其以上を求めず、强て與へんとすれば所謂犬に聖なる物、豕に眞珠と反抗敵對の態度に出づ。然らざれば疎外遯逃して之を避くるに至る。東西古今の別なく、世人は未だ全く靈なる者あらず。然れども其の靈の質に於て遠近差等あるは個人としても社會としても實驗せらるゝこと多し。概して云へば古代の宗教は多く實物教育の必要を證明せり。是は東西の別なき所にして、洗ひ、祓ひ、犧牲、偶像、皆其の例なり。現に靈なり生命なりと警戒し給へる基督の宗教を奉ずる者にさへ、實物の感化甚大にして、其の一例を擧ぐれば十字架の精神よりは其の形象が重んぜられ、其の極端に至つては主の磔せられし十字架と同じ程なる大さの實物を負ひ、喘ぎ〳〵して聖靈を呼吸しつゝ巡禮をなせし者さへありきとは信じ難き程なり。又左程までの痴狀に陷らずとも、主耶蘇基督の功德を思へば、專ら流血淋漓、悲哀慘酷なる繪畫を幻想するのみにして、其の仁慈の情に富み義烈の念に充ちたる心的十字架を崇敬服膺することを勉めざるが如き、皆是れ主の眞意を遠ざかれる者なるを證するに足る。又主耶蘇基督の痛苦は天下の爲めと斗りにて、吾が爲めに、個人各自の爲めにと近く深く考ふることなきは、又一種の血肉に留れる者にして靈と生命とは與らざる者ならん乎。又は神の慈惠を一切萬事宗教の壁内にのみ顯現する者のごとくに說き擴めて、天理教的現實利益に心醉する者なきを保せず。

實に危きは人心なりけり。されば教育ある信徒殊に學校内の信徒は、形式に於ては既に理想的に宗教家と見做すべき者なれ共、眞に其生命に觸るゝの程度に於ては獨り神と共に定むべき事なり。此の新年に於て一層歩を進めて主基督の心體に接近し、我心を以て主の其に比べ見るべし。其の眞相果して如何。主の御心を窺ふに注意すべき諸點多からん。今一二の端緒を引き出さん。

完全無缺聖德充滿の人格が、罪惡不德に汚れ缺陷疵傷多き世人の爲めに其の仲間となることを厭はずとは如何なる海大の量ぞや。義に反き道を棄て神に敵する濁世の爲めに、永遠の光榮を一時たりとも離れて、卑下の社會に時機の至るを待ち給ふとは何たる忍耐ぞや。

父が愛し給ふといふより外に取るべき所なき程に墮落せる不孝不悌の人類の爲めに、其の身を犧牲となすことを甘んじ、却つて其の敵手の爲めに祈り給ふとは何たる仁慈の御心ぞや。

さはれ主は善惡一切無差別なる老婆的慈善者にはあらず。曾て曰く、『凡そ女を見て色情を起す者は中心既に姦淫したる也。若し右の目汝を罪に陷さば拔出して之を棄てよ、そは五體の一を失ふは全身を

地獄に投げ入らるゝよりは勝れり』。何ぞ峻嚴劇烈なるや。嗚呼此の仁にして義なる靈光を以て我體を隈なく照らし見よ。爭かで偶然として醉生夢死の生涯を苟することを得んや。

神を疑ふ人々よ、如此大精神の存在を實現せる宇宙に神なしとは、甘橘を食ひながら果樹を拒み、澤々たる長江に棹しながら源泉の存在を疑ふの類にあらずや。

異論疑議の世に多きは事實なり。之に惑ふ諸君よ、暫く其の論塵を脱して吾に歸り心を裸體にして吾を見また人を見よ、又心を勵まして基督の心體を仰ぎ見よ。又轉て吾を見よ、又人を見よ。諸君啞然として自失する者あらん。嗚呼人と我と何ぞ似たるの甚しきや。基督と吾と似る所、古くして少く、異なる所新らしく且多きや。此の瞬間に恥と懼と吾に迫り爲す所を知らざらしむることあらん。而して救ひの必要を感じ來らん。而して或ひは强く救を遠きに求むることもあらん。然れ共大概は直ちに基督に救を求むるに至らん。一旦此の聖地に足を入るれば忽ち主の大和合力に融解せられて、豁然として論議の上に出で、恍惚として主と一心同氣の人となることを得べく、實に聖靈の去來を知らざれ共其の聲を聽く者とならん。是れ宗教の皮相血肉を通過して其の生命の靈域に觸るゝ者なり。

皮相血肉の宗教に充ちたる日本帝國にありて、その基礎たるべく柱たるべき諸君よ、自ら基督の靈に接して其の生命を得、帝國の迷霧を拂ひて生命を充滿せしむるの事業に盡力せられよ。是れ諸君の業務を妨げずして、其のアムビションを滿足せしむることを得る者なり。

諸君が後日世に出で社會の實務に當るの日は一層活用的に人格品性の修養をなすの機會に接することを多かるべしと雖も、其の好機を利用して失はざる程の修養を豫め積み置かざれば、其の期に臨みて不覺を取ること多かるべく、適當なる修養をなさゞるに、早く失敗又失敗となりて一生頭の翹らざる俗物と成り了せんも知るべからず。(假令世間の快樂榮耀を得るとするも)。世の專門の達人或ひは名聲高き政客實業家にして、其の人格に一文も價値なき者なきにあらざるは、要するに彼らは多く無宗教若しくは皮相血肉の宗教に滿足して、精神的の修養餘りに淺薄なるが故に日夕來る所の精練琢磨の好機を捕ふる事能はず、否寧ろ其の念なきが故に其の去來を見ることなきなり。實に憫然の至りと云ふべし。青年諸君よ、吾人は世人の思ふよりはモット貴く造られたる者なり。經に曰く、『世の人はいかなる者なれば之を御心に留め給ふや、人の子は如何なる者なれば之を顧みたまふや。たゞ少しく人を神よりも卑く造りて、榮と尊貴とをかうぶらせ、又之に御手のわざを治めしめ、萬物をその足下におき給へり』(詩篇八〇四、五、六)されば神の御前に謙遜なるべきは勿論なるも、また神を信じて己を辱めざる樣にし、神の賜はれる尊貴を恢復して義務を全うせざるべからるざなり。(明治四十四年一月、青山學院にて)

征露論

日露兩國の平和は遂ひに破れたり。戰爭は既に開始せられたり。兩國の主權者は宣戰の詔勅を發せら

れたり。有司は其の主張を天下に公けにして其の行動を辯護せり。最早冷淡なる理論を以て戰爭を論ずるの時機にあらざるなり。宜しく現在の戰爭に就て其の所信を定め其の所感を發表して、適當の行動を爲さゞるべからざるなり。

人民の歷史は國家と終始をなし、人民の身體は國家領域の内に在り、又國家權能の下に在りと雖も、人民の思想は個々獨立にして必ずしも國家の行動と一致し得るものにあらず。故に不幸にして我愛重する國家の行動と人民自家の思想と庭徑することあらば、其の不幸之より大なるものあらざるなり。然るに今回の戰爭は幾多の人命と莫大の資金と無數の慘狀とに充ちたる長年月豫期せる帝國の行動なるにも拘らず、余輩は些細の疑念なく之を贊成し、聊も忌憚なく之を提言する事は頗る痛快に堪へざるなり。(我同敎徒中には自家の獨立思想より何の理由にも拘らず戰爭を非認して憚らず公言する者なきにあらず。是れ余輩の尊敬する所なれとも、多數の同敎徒は余輩と所感を同じうして國家の行動を贊成し各盡力しつゝ在るは疑ふべからざる所なり)。今より所感を左に略陳せん。

一、正しき目的の爲めに避くべからざる爭鬪は敎祖も是認し給ふ處なり

余輩は今空理を談ぜざるべし。唯單純なる一基礎を据ゑて滿足すべし。基督宣はく『地に泰平を出ださん爲めに、我れ來れりとおもふなかれ。泰平を出ださんと非ず、刄を出ださんが爲めなり。(マタイ傳十〇三十四)　基督の最後最大の目的は眞正の平和を包含すること勿論のことなれども、時に是の如く說き給ふは必竟正しき目的の爲めに進行すべき途中に於て逃れがたき支障を除き、或ひは之を防禦せんが爲めに避くる能はざるの爭鬪あるは現世界の狀態なるを洞見し止むを得ず之を是認し給ふなり。而して其是認の冷淡ならざるや、之を以て一の目的の如く主眼の如く尤も明かなる强き言葉を用ゐて刄を出ださんが爲めに來れりとまで宣へり。されば戰爭は其の目的と其の場合とによりて是非すべき者となるなり。今回の征露事件も果して日本帝國の避くる能はざる者なりや、又其目的の何なりやに於て決する所なかるべからざるなり。之と共に考ふべき一點は基督敎は國家國民の成立を否認する者なりやにあり。之に就きては基督の聖書に『我國は此世の國にあらざるなり』とあるにて明瞭なりとす。既に此の世の國にあらざれば、世間の國家と衝突すべき者にあらず。されば世界國家の存立を妨げざるのみならず『カイザルの物をカイザルに返すべし』と國家主權者の權を認め給ふ。而して人類の性質と狀態とは國家の成立を要することを歷史上に證するとすれば、國家の存立は何の方面よりも是認せらるべきなり。然り而して數個の國家か存立すれば、今の世の文明の程度に於ては正邪利害を異にすること猶各個私人の間に於けるが如きことあるは止むを得ざることなりとす。其の結果として防禦攻戰の事起るは亦免れ難き數なりとす。

國家の存立は是認せられたり。而して日露兩國家の衝突はおこれり。日本は攻勢を取りて戰端を開けり。是れ果して避くべからざるの戰爭なりや、其の目的果して聖敎の倫理に背反するところあらざ

るや。

二、征露の第一目的は日本帝國の存立を鞏固にせんが爲めなり

露國が滿洲を併呑して清國本部と韓國に迫るは唇齒の關係ある日本帝國の存立を危險にする者なり。帝國福利の源を狹縮する者なり。而して此の事の有無は露國に取りては遠き未來と現今の勢力擴張を期する者にして、其の國家の存立に關する問題にあらざるなり。然るに帝國の遜讓忍耐をもて平和の協商をなすにも拘はらず、露國は徒らに時日を遷延して軍備を整ふ。其の野心のある所智者を待たずして明なり。

一千六百年の歷史を有し四千五百萬の人口を以て組織せる國家は皇天の特命すること疑ふべからず。此の國運を危うし此の國民を困苦恥辱危難に陷るゝの虞あらば、之が爲めに尤も有効なる方法を取るべきは天人共に要求する處なり。是れ即ち國家自衞の義務を執行する者なり。之を基督教の教訓に徵すれば所謂愛隣如己の根本に合當するものなり。即ち己を愛するの天性を發露するなり。國家の大行動中にある國民の個人より見れば、我が隣我が兄弟の爲めに己を捨つるものなり。

國家自衞の爲めに戰ふは戰の爲めに戰ふにあらざるなり。名譽の爲めにも利慾の爲めにもあらざるなり。帝國特種の天職を盡さんが爲めに其の存立を鞏固にし、其の民生を安んせんが爲めに戰ふなり。既に國家の存立を認むる以上は方に止むを得ざる處なり。

三、隣國友邦の安全と其の進歩發達を圖らんが爲めなり

滿州は朝鮮發祥の地にして韓國の西北を圍み、其の遼河の西は直隸に接し、東は旅順大連の要港を以て勃海黃海の兩海を制し得べく、洲內鑛山森林に富み田園亦廣濶なり。之に據りて清韓に迫るは高より卑に臨むが如し。露國の特長なる强大陸軍を以て之を占領す、數年ならずして清韓の運命を危くするは火を見るよりも瞭かなり。嗚呼唇齒輔車の兩國をして、漫に露國の侵略に委すること義に於て忍ふべきところならんや。滿韓兩地には我と文を同じうし、顏色を同じうし、歷世淺深の關係を有し又商工漁農の利益を共にするの人民數千萬あり。之を自由を重んぜす敎育を尊ばず、飽くまで黔首を愚にして收歛を行ひ擅制壓抑を以て特種の文明の如く思惟する露國勢力の下に委し亡滅を待つこと、新たに今世の文明に浴せる日本人の默視すべからざる所なり。而して平和なる國際に於て之を救はんとすれば詔勅の所謂之を旗鼓の間に求むるの外なきなり。日本國の存立を欲し日本人の進步を祈る日本人が滿韓の保全と進步とを希望するは、國民としても個人としても、己の如く隣右を愛するの道に適合する者なり。

右二ヶの理由又は動機を以て此の大戰役を興すに不足なし。日本は猥りに那翁の驕愚を學びて露都を突くの迷夢を夢みるの要なし。我本國の存立を安固にし滿韓の保全進步の道を鞏固にすれば足れり。然れども、窃かに我軍の勝利に伴隨すべき結果を憶想すれば、實に廣大無邊なる効果を生ずべきを信

せざる能はざるなり。請ふ之を左に略記せん。

一、韓國の「事大家」をして國民の大小を知るべき眞標準を知らしむることを得ん

韓國人の事大思想には每度ながら迷惑する處なり。之を拋棄せしめんとするも得べからざるなり。彼等は一度清國の大版圖大人口に誤られながら再び露國の大に迷へり。今回に於て日本の勝利に歸せば何事も三度なり。始めて國家の大は單に土地や人口にあらず、如何なる土地と如何なる人民と云ふ事にあるを知り得べきことを信ずべし。韓國人にして眞正の强大は國民の統一、精神、智識、陸海軍備の實力にあることを知り、將來方向を誤らずして日本の誘掖薫陶を受け、新文明の勢力を認むるに至るべし。

二、清露の二大老國をして頑冥の夢を醒ますしむることを得ん

清露兩國の國勢には少からざる差異あれ共、其の舊慣に泥みて驕傲なるに於ては甚だ相似たり。兩國共に大勢に通じ新文明を唱道する者なきにあらざるも、頑冥不靈なる守舊家多く飽くまで大勢に抗して朽廢多病なる舊組織を保持せんと欲すと雖も、此の役にして日本の勝利に歸せば始めて迷夢を醒ますに至るべし。或ひは然らざるも守舊者勢望を失して進步者勢力を得、露國が他邦侵畧の政策を變じ自ら版圖の開拓進步を圖るに至らば先づ救はるゝ者は學生にして、彼等は信仰思想の自由に對しては餓ゑたる者の飲食に於けるが如き者なり。彼等は歐州の隣國に旅行して同輩學生の種々なる平和の自由を享樂するを觀る。然るに彼等は歐州諸國の書籍新聞雜誌を自國にて讀むの自由なし。三人集まれば解散せらる故に、虛無黨起れば大概高等の教育を受けたる男女の學生なり。次には波蘭、芬蘭、アルメニア等の屬地が奪はれたる自由を回復して愁眉を開き怨嗟を忘るゝことを得べし。次には一億六百萬人の貧農民が其の子女を教育して人間らしきものとなすの幸福を得べし。現在の有樣は總人口一億四千即ち日本の人口四千五百萬の三倍余にして、其の小學生は、僅かに四百拾九萬三千餘人に過ぎず。我日本には五百七十二萬人を有す。總人口に於て三分一に足らざる者が、學齡兒童の教育に於て五拾貳萬七千人の過剩ありとは驚くに堪へたるにあらずや。

露國は侵略を廢するとも、誰も露國を侵略する者はあらずして歐亞の警戒大半消散すべし。日英同盟も不用なり、獨墺伊の同盟も不用とならん。

清國が迷夢を醒まして滿漢の分爭を止め人材を全國に索めて文武の諸政を張るに至らば始めて統一の實を擧ぐるを得べし。從來の有樣を見るに八百萬の滿人が四億の漢人の上に特權を有して累代坐食し樞要の官職は皆滿漢各一人を置きて凡て二頭梁組織となし、小數の滿人は常に優勝の地を占めて其の威福を失はざらん事をのみ企圖し、四百餘州全體之禍福を思ふに遑あらざるなり。故に上下の心離乖反目其の齬屈を發露する處なし。僅かに自由の制度を寬ひたる在東京の學生と堂々たる在外欽差大臣と衝突して日本の警察を煩はすが如きは、皆是れ上級種族が時に通ぜざるの致す處なり。されば張之

洞も袁世凱も如何んともする事能はざるなり。屬次城下の盟をなして覺らざる鈍象も、日本が數拾萬の大軍を大陸に動かして强大無比と呼ばれたる露國の武力を屈するに文明の師を以てするに至らば少くとも自家の危險を今一層明瞭に覺知するに至り、革新の氣運を促すことを得んか。或ひは不幸にして堂上の妖氣は遂ひに拂ふこと能はずとするも、四億人中自ら覺る者數ふるに遑あらざるに至らん。而して終ひには二三又は四五の富强なる國民を勃興せしむるに至らんも知るべからす。何れにしても日本勝利は支邦國民の救拯たることを失はざるべし。

不幸なるヴールも亦保守頑驕なる貴族の手より救はるべし。聞說ニコラス第二世陛下は善良の君主にして、當世の文明を愛し平和開進を好尙して己の民をも歐米諸國民の如く自由を得せしめ、列國の交際愈平和の實を擧げ全世界と共に太平を樂しまんと欲すと。故に即位久からずして平和會議の主動者となりしも、其有司臣僚其旨を冀賛せざるが故に空しく天下の笑草となりて其の威稜を墜すこと幾千なるを知らず。滿韓事件に於て日本を輕侮せる臣僚が其の與し易きを說きて其の聰明を蔽ひ、一旦開戰するに及びては兒戲の如き詔勅を下すべく余儀なくせられ、又々天下の笑柄となれり。陛下は神經過敏にして健康甚强壯ならず、保守黨よりは輕侮せられ進取黨よりは怨まれ、其の安全を求むるの處なき似たり。實に憫然たるの地に立ち給ふ由なり。陛下の皇子たりし時氣の毒なる皇室の事情より東洋漫遊せられしが、圖らざりき我が大津に於て狂漢の爲に傷けられ給へり。吾人日本人たる者誰か之を傷まざる者あらんや。隨而此の方面を記憶して露國に對する時は、國家は我敵なれどもニコラス第二世は我友たる感なき能はず。如何にしてか此の錦衣冠冕之奴隷を救はざれば武夫の氣が濟まぬ心地せらるゝなり。而して之を救ふの術他なし。彼自ら敗れて保守驕慢の徒が其の勢を失ひ、自由を學び治平を重んずるの徒陛下の聰明を輔くる時至るを待つより外なきなり。傳へ云ふ露國上下甚隔絕して帝の身邊に近き者は皆帝と其の好尙を異にし、誠に其の善良なる意思に賛成し、其の精神と其の身體と共に之を愛重し身を以て保護する者は獨り皇后あるのみなりと。全世界を三分して其の一を保ち一億四千萬の生靈に君臨するの專制君主も亦實に憐むべき哉。然るに此の同情を懷きて此の有名無實の幸福者を救はんには、一度大いに之を泣かしめざるを得ざるなり。亦奇怪の至りにあらずや。然り然れ共事實は之より詮方なし。露國を敗るは、露國を救ひ露國を救ふの要術なりとすれば、振うて之を敗るは之れ即ち仁の道なることを知るべし。

征露と傳道

義は國を高くし、罪は民を辱かしむ。（箴言十四〇三、四）

天下義戰なる者ありや。春秋に義戰なしといへり。是れ徒らに自國の强大を欲望するの戰なるを云ふなり。復讎を以て高義となせる時代には、容易く義戰を開くことを得たり。而して此の名義の下に幾

多の罪惡を犯せしなり。今の代に於て、義戰と稱すべき者は如何なる者ぞや。

（一）自國の存立の爲に戰ふ者

（二）友國の保全の爲めに戰ふ者

（三）一時の戰亂を以て、永遠の平和を期し、少數の死を以て多數の生命を救ひ、進歩幸福の道を開く者

右の如きは、實に義戰と稱するを得べき者にして、要するに其の動機は禍害を防がんが爲めに止むを得ずして應じたる者なり。

我が今回の征露は此三項に適合する者なり。況んや天下の强大國として誇る所に對して、新興の小國と見做さるゝ者起ちて之に當る。其の俠氣天下を動かす者あり。是れ我友邦なる英、米、獨、伊の大いに同情を表する所以にあらずや。

本文の前半は實に事實となれり。是に於て人或ひは之を以て國家の能事終れりとなす者あらん。隨つて傳道の必要を滅したる感を懷くものあらん。なれども是れ大いに誤れり。傳道の要寧ろ前に倍せりと云はざるべからず。

（一）正義の名あるものよろしく其の實あるを要す。

（二）正義の形式を具する者、其の精神を要す。

（三）對外の事に義を踐むもの、內治及び個人にも、正義を主義とせざるべからず。

（四）國家の犧牲となる國民をして、其の正當なる動機を知らしむるを要す。

前半の本文事實となると同時に幾多の罪惡横行するときは國として高くせらるゝも、民としては甚だ賤められ、永遠に禍に陷らん。是れ後半の本文事實となるなり。

故曰く吾人は國家主義の態度を採るにあたりて、傳道の要は一層其の重要を加ふるなり。不完全なる人間の義は決して滿足なる能はざるなり。博士メドアルスト曰く『人はいかにして己の義に信賴するを得んや。是れ宛も己の蔭を以て掩はんと欲するがごとし。身を屈して地に伏するも、猶我が蔭は猶我身の下に在るを見ん』。人もし大いなる嚴の蔭に又は繁茂せる大樹の蔭に身を投ずるときは、日中の日光といへども猶之れを避くることを得べし。斯の如く人間の功德は無益なり。唯基督は能く其の名により神に來る者を全く救濟することを得べし。『我を呼びて主よ〳〵と曰ふ者、悉く天國に入るにあらず。唯之に入る者は、天に在す父の旨に遵ふ者のみなり』（マタイ傳七の二十一）露國はたゞ主よ〳〵と曰ふ者に類す。我は寧ろ天父の旨に合ふの形式を有するなり。然れど其の精神は未だ天父を認めず、其の天國の主義を理解せず。宜しく先づ天父を傳へ亦其の旨を敎ふべし。始めて眞誠の義を有して、國家の高きを千歲に傳ふることを得べし。（明治三十七年二月）

知彼知己（日露戰役中遊歐所感）

演題は一種の看板なり。唯漫遊中の所感を述べんと欲するのみ。横濱より「ネーブル」に達するまでの事は拔とすべきも、概して所感を述ぶれば、明治廿九年に米國に來りし時と明治三十三年に印度洋を往復せし時とに比し今回は一層國勢を擴張せるを感ぜり。日本に對する列國の同情は略左の如し。

一、羅馬の同情、社會主義より來る。皇太后は非常に我邦に同情を有せらる。此は國民が皇室に忠義なるに深く感じたるによる。

一、佛國は先入の惑ひ正に解けて利害より打算するも早く結着を要し、公平に考ふれば日本の優勝點を見るに至る。

一、ベルヂュムは資本家には心配あれども、商賣にては利得あり。露國が負ければ商賣多きことあらん。

一、蘭國も惡感情とてはなけれども、經濟の打算と蘭領印度に付心配あるが故に萬歲の聲高からず。

一、瑞西は眞の傍觀者として同情を寄せたり。

一、日耳曼は政府權變利害の爲め一笑一顰計り難けれども、人民は一般に同情あり。殊に軍事敎育と學術上との關係を知る者は然り。

一、墺國も人民は日耳曼と同じく政府は大いに警戒して、双方にさはらぬ樣に勉め居るが如し。

一、ハンガリは同盟よりも一層深く同情を寄す。其の原因は人種、復讐、自家之地位にあり。

一、スカンデナヴィアハ一般同情あれども、那威は特に然りとす。

一、英國は同盟國なれば云ふまでもなし。

日露戰爭の影響は印度の人氣と歐洲の時事とに及べり。

歐洲決して競爭すべからざるに非ず、宜しく適當に用心し其の弊害（保守自得と快樂追求）を避けて、其の進步、謙遜、克己を尊ぶべし。

歐洲は基督敎を要す。歐洲の文明必ずしも基督敎にあらず。現在の實況は寧ろ基督敎と惡戰をなしつゝあり。

歐洲の文明駸々として日本に進入す。之を檢束し又は奬勵するの宗敎は果して何ぞや。

過去及び將來に於ける宣教師の事業

國民的障壁に妨げられざることを勉むべし。

出來る丈け日人の各方面に交際すべし。

無言の親交は千百の繰言に愈ること多し。

日本人をして己の外國人たるを忘れしむるに勉むべし。萬國主義實行教育を施すことは大事業なり。

自國民を代表して平和の使となるは光榮あることなり。

日本人も外國人をして日本人たるの感想を懐かしむるに勉むべし。是れ主義上よりも然るべきも場合を思へば殊に然り。

資本家を歓迎し得る日本人は、持辨當の宣教師を歓迎し得ざらんや。

教會の政事は干渉するよりは寧ろ精神的好模範を與ふるに勉むべし。但し政事の世話全く不必要なりとは云はず。

日本人の最も要する者は深厚眞實なる畏敬、感恩、靈交の實驗等に在り。

第五編　教育及社會事業

基督主義教育の必要

附　歐米視察所感

一、日本の教育は其の普及に於て歐米諸國に伯仲することは最早隠れなき事實なり。尤も其の深高なる程度に於ては、未だ大いに及ばざるは一刻も忘るべからざる事なり。是れ年を經るの少きが故にて不得止處なり。但し歐洲の中央なる白耳義抔は日本に及ばざる事（其普及に於て）遠しと云ふは奇怪なれども事實にして其の源因も亦明瞭なり。

一、右之如くなるに基督主義教育など云ふ一種特別の流儀を張り其の必要を説くの要何處にありや。水は科に盈ちて進み氣は眞空を求めて突入す。論より證據と其の物が現在に存するは其の要ある所以の第一理由なり。されど其の基督主義教育とて、數學が違ふとか地理が違ふとか云ふ者にあらず古代の僧侶ならびに實驗を貴ばざりし學者どもが世界の地圖を造るに、古話想像を基としたり、又は聖書を種として考へ出したりせし事もありしならん。今は斯くのごときことを教育の主義とすること能はず。又單純なる教授法に於て諸家色々の流儀もあるべしといへども、是も亦予が所謂主義

にあらず。

予の謂ふ所は學ぶべき萬有に對する思想、並教育せらるべき人に對する思想、教育を受けて社會に實行すべき德の中心となるべき思想を謂ふなり。

他教の主義を尋ねて論究する之遑はなし。直裁に我所謂基督主義を概述して日本の必要に及ばん。

基督教主義と云はざるは微意あるなり。所謂基督教と稱する者には種々なる派もあり、儀式もあり、教儀もあり、相互ひに容れざるものあればなり。

基督は一輪の花を見ても一羽の雀を見ても、萬物の主宰を認識し、天父に對する愛情を動かして玩味せらる。故に同じく天文、地理、理化、博物之學科を研究するにも此の萬有之上に後ろに其の中に大主宰の在り給ふ事を認識し、宇宙萬物を觀ると共に大能力大意識に接觸するの感を有する事を務むるは基督の萬有觀に從ふ事なるを信ず。

基督は如何なる人にも唱へらるべく『主之祈』を與へられたり。而して『天に在します我等の父』より始まれり。吾人も如何なる人（自家を始とし）に對しても、吾人は皆天父の子にして兄弟なることを直覺し得る樣に修養すべし。是れ基督人類觀の要素なるを信ず。君臣、父子、夫婦、長幼、兄弟等の關係を天父の前に認むるなり。基督は積極に消極に高貴なる教訓を施されしも、歸する處は力を盡して天父の意思を行ひ、己の如く憐人を愛するを以て中心とす。縮言すれば克己献身他の爲に生死する事なり。此の献身を德の理想として倫理道德を立つるは、基督の倫理、主義なるを信ず。

以上は或人の意に合ふも合はざるも吾人が基督主義と信ずる所なり。此の思想を造次も顚沛忘るゝことなくして教育を實行するは、予の基督主義教育と稱する者なり。然るに是は果して我日本人に必要なりや、否や。

一、日本人は無神論に滿足するものにあらざることは日露大戰爭にても明かなり。然れども思想甚だ錯雜にして存滅常なし。隨つて其の情も亦深からず。是れ明白堅固なる基督主義を要する所以なり。然らざれば人性の要求する信神の心を等閑に附し、一時々々の發露に任せ置くは人心の深重を害し風教の弊害を生ずる基なり。

二、日本人は漠然として四海兄弟を稱すと雖も、動もすれば强食弱肉の傾向を等閑に附す。天性の優情によりて識らず知らず敵をさへ愛するの美談少からずといへども、本來天父を認めて天下を兄弟とするの情操を耕さず。是れ美花に蔕なきの恨を免れず。

三、日本人義勇奉公の念甚だ普くして且つ深し。天下の驚くところなり。

歐人曰く『基督主義なくして公共心の深きを得る謂れなし。日本人は基督信徒にあらず、如何にして此の事ありや』。

予曰く『貴問其の理あり。日本人は所謂方式に於て基督信徒にあらざるも、基督主義の中心なる

者を所有して之を公共の事に發露せり。此の一點に於ては日本人皆基督主義者なり』と（殺身成仁は武士道の中心なり）。

されば日本人の献身的精神が未だ圓滿を缺く者多し。假令へば國防の爲めに身を献ずること天下に優れたりとするも、一家の主人が國の本たる國家を治め、子女を敎へ、偕老の契を神聖に全うせんが爲めに幾千の献身をなしつゝありや。社會の改良を圖らんが爲めに、國士たる者が快樂の種類を撰擇するに幾千の献身をなしつゝありや。青年學生が身を神聖なる國家社會の中堅となさんが爲めにいかなる覺悟を以て修養しつゝありや。其の最大の希望は果して那邊にありや、究むれば悚然として肌膚粟を生ずる者あるべし。加之現世の所謂文明が（即現金快樂主義が）猛然として世界を風靡して、東西の人心を腐蝕せんとする有樣を見れば實に戰慄せざるを得ず。

歐米は富の增加と此の欲望（主義の僞冠を頂きて人心を侵略しつゝある魔王）の爲めに公私に對する献身を失はんとしつゝあり。特に政界商界に猖獗なり。羅馬昔時の隆盛を觀じて其の當時基督主義の補道なしと察すれば、其の顚覆の速なる事怪むに足らず。

現今歐米の基督主義は傳道と慈善とを以て必死に戰ひつゝあるに相違なしといへども、未だ俄かに全勝を期すべからず。騎虎の勢に乘せる歐米は遂ひに一度頽れて後に救はるべき乎。但しは狂瀾を既に倒るゝに旋らして完美の域に急進すべき乎。是れ實に攝理のある處吾人の祈りて熄むべからざる所なり。蓋し吾人は歐米の覆轍を踏まざらんことを勉むべしと雖も東西の交通甚だ近接せり。歐米の傾倒は必ず其の余波を東洋に及ぼすべし。否彼の劇戰之火花は既に〳〵我東洋に移り、文明々々の聲と共に毒焰彌蔓しつゝあるなり。基督主義を保持せりと思ふ者三省すべし。其の主義の必要を認めざりし人は考へ見よ。何を以て所謂文明の大勢に抗して其の弊を矯め、我國の長所を保持し發達し、國家と個人と共に永遠の幸福に入らんとするや。

日本の不思議なる天祐のに下に二千六百年を經過せるに相違なし。然れども日本も人類の組織せる社會なり。盛衰榮枯の天則に洩るゝものにあらざれば、警省して計圖をなさゞれば否運忽ち襲來せんこと疑ふべからざるなり。

教育の二大目的

一、善き人間を作ること

二、善き國民を作ること

此の第二の目的は直接に國體國政に關するを以て政府が普通の敎育に任ずることゝなり、其の國柄により政體の模樣によりて色々異るところあるなり。

善き國民は國力の大原素なり。

歐米各國は普通教育には授業料なし。私立學校と雖も同じく政府の補助金あり。

善き國民は善き人間たるを要す。故に德育最も必要なり。而して德育は宗教を要す。

佛國は休日を增して家庭の選みに任せ、獨逸は宗派に由りて學校を別立す。英米は、公立は皆單純なる聖書を用ゐ特別の宗派を用ゐず。

校舍は凡て立派なり。町村中に二等と下らざるものあり。殊に米國には數里の原野中に教會と學校と相對して國旗を飜し居るなり。

佛國の小學生は工人の如く獨逸は兵士のごとし（女子にも背囊を負ふものあり）。英米は平服なり、但し高等學校生はガウンと云ふ黑衣を纏ふこと男女同一なり。オックスフォードの男生は甚だ短く古きものを恥ともせず。

日本國は其の存立に於て教育を要すること他國に增るものあり。土地狹くして人多きが故に、人の實價を貴くして色々なる不足を補はざるべからず。原料として賣らず、精製して賣らざるべからず。海外に彌漫せんとするには色々の障礙を除かざるべからず。横文字を以て名を書することを知らざるべからず。健康ならざるべからず（眼病、梅毒等）。品行善良、必要の資金……。

最後に勤儉貯蓄の教育甚だ必要なり。然し見識のなき節儉は將來の發展を害す。英佛の差異是に在り。

佛國の殖民地開けず、人口他國の如く增加せず。

眞正の勤儉は人の生命に就きて考ふるにあり。現世の貯蓄は我子孫のためなり。或は他人の爲めなり宜しく自家の存在に伴うて離れざる貯蓄をなすべし。精神的、宗教的、人類的貯蓄なり。

日曜學校の使命

諺に曰く、一年の計には禾を植ゑ、十年の計には樹を植うると。日曜學校は百年の計、否千年の計なり。雜草の繁茂せる荒蕪の地に種子を蒔くは、勞多くして功少なし。雜草の種未だ蒔かれざるに、或は甚だ少なき良地に種を下す事は、自然に應ひ、又最も事宜に適せる事なり。

日曜學校は兒童の精神中にある宗教道德の力を助長培養するを以て目的とす。耕耘の譬喩よりは一層高くして且つ深きものなり。何となれば種は既に蒔かれたる者なり。農圃が外部より播き散らすの勞を要せざる者なり。唯其の自然天賦の性を發露生長せしむる爲に雜草の害を防ぎ、出來得る丈け義の太陽の光線に照らさるゝ如く成す事は肝要なりとす。

日本帝國には古き宗教普及せる事千三百餘年なれども、兒童の新たなる心田を保護して之を誘掖する事を勉めざるのみか、却て之に雜草の種子を蒔き付け、天賦抱藏の種子を蔽塞して日光にも雨露にも觸れしめざるの憂あり。日本人は祖先崇拜者なれども偶像信者にはあらず。又無靈無神の論者にあらず。人格の不朽を信じて祖先と英傑とを崇拜するものなり。此の心更に進まば宇宙の大靈を仰ぐに至

らん事自然の順序なり。而して之をなすに最も順當にして最も容易なるは、兒童の宗教心を涵養するにありとす。六百萬の兒童は概ね皆文字を有する者にして、毎日曜には休學して自由を有する者なり是れ實に日曜學校の爲に特に準備せられたる國民と謂て可なり。國民の多數未だ基督教を奉ぜずして日曜學校の爲に準備の整ひたる、斯の如き者恐らくは宇宙其の比を見ざるべし。されば便利の大なる所には基督信徒の責任も亦重大なるを免れざるなり。日本の諸教會の責任の大なるは無論の事ながら我等の力此の全體を任ずるに足らずとすれば、先進國（基督教の立場より曰ふ）諸教會の責任又彌大なるを拒む能はず。願くは皇天の啓誘洽く内外の諸教會に及び、此の好事情に背かず、速かに大擧進擊大いに凱歌を謠ふの好機到達せむ事を。

監獄改良及禁酒運動

それ地は自から實を結ぶものにして、初めには苗つぎに穗出で、穗の中に熟したる穀を結ぶ。（マタイ傳五〇廿）

新しき布を舊き衣に縫ひつくる者あらじ。（同上二〇廿一）

新しき酒は新しき革囊に盛るべきものなり。（同上二十二）

學者とパリサイの人の義よりも汝等の義しきこと勝れずば、必ず天國に入ること能はじ。（マタイ傳五〇廿）

凡ての事考へて其の善きものを守り、もろ〳〵の惡しき事の類に遠ざかるべし。（テサロニケ前書五〇廿一、二）

兄弟よ我れみづから之れを取れりと思はず、惟この一事を勉む、即ち後ろに在るものを忘れ、前にある者を望む。（ピリピ書三〇十三）

是等の本文は各其の意義あり、適用の目的も定まれる者なるべしといへども、概ね實際と時勢とに徴して、適切實効あることを勉むるの意を含まざるはなし。基督教は猶太教より出でたりと雖も、其の倫理道德の大いに異なるところあり。舊教と新教と其の主張又大いに異なり、十七世紀の新教と十九世紀のそれと、或は同世紀に於ても歐州大陸と英國と北米と稍異なる處あるは、蓋し此の教趣の活用多少動くものあればなり。

本日は監獄會の監獄日曜に當り、日本禁酒會同盟日曜にも相當し、双方より各教會の講壇に主義擴張の注意を與へられたる事、偶然なりと雖も又大いに意味することあるが如し。斯の如き問題の基督教徒によりて熱心に唱道せられ、世界の輿論とならんとするは、畢竟基督教の、空理に沈吟し、黄金時代を過去に置き、歴史を過重して實驗を輕んずる宗教にあらず、寧ろ實驗上主義の應用を貴び、舊套に泥まず、新法を立つるの趨勢潮流より來る者なりと謂ふべし。

前掲の本文を總括すべき高貴なる大思想は、『天にましますわれらの父よ、願はくば御名を崇めさせたまへ、御國を來らせ給へ、御意の天になる如く地にもなさせ給へ』（マタイ傳六〇九）との『主の祈り』にして即ち神國の建設にありとす。抑も東西古今國家の興起又は回復を圖りしものゝ如何に辛苦艱難を厭はずして縱横計畫せしや、波蘭に於けるコッスートの如き、源家を起せし賴朝主從、漢室を再興せる玄德、諸葛亮の君臣の如き、其の苦辛慘憺千載の下、汗を握らしむる者あり。而して主の祈を繰り返す

者も、正しく此の大事業を企圖する者なり。況んや其の國は廣大なる神國なるをや。其の企圖其の覺悟、非常に堅固にして、時に應じ處に應じて、よく有効適當なる進歩改良を圖らざるべからざるものあり。

就中監獄改良と、禁酒運動の如きは實に是現社會の弱點に對し尤も有効なる施設にして、又甚だ緊要なる問題なり。若し夫れ往時の思想より之れを見れば、今日の監獄施設は甚だ贅澤に過ぎたるの觀あり。飲酒は吉兒共に用ふるものにして、全く是認せらるゝ者なり。然れども其の舊衣は綻びぬ、新しき革囊にいれざるべからず。新時代の要求は、更に神國の發展を促すなり。

監獄改良に就きて多く語ること能はずと雖も、其の重要なる點は監獄に對する社會の思想を進化せしむることなりとす。即ち之を以て罪惡と復讐をなすの處となさずして、寧ろ懲治敎誨の學校と見做すの思想傾向を馴致せざるべからず。此の思想朝野に普ねく、加ふるに罪囚の境遇を憐愍するの同情發達し、彼の戰場の傷病兵をいたはるが如くならば、是れ監獄改良の根本成り大勢定まる者と謂ふを得べし。然らざれば獄則如何に整頓するも、監房如何に安全なるも、他の機關如何に具備するも、恐らくは徒らに虛飾、所謂畫餅の憾を免れざるべし。

要するに監獄を改良すると共に、監獄外の思想を改良せざるべからず。監獄に人を驅入るゝ社會の腐敗を正さゞるべからず。約言すれば現今の監獄は犯罪の練習所たるの觀あり。犯罪專門家の寄宿舍たるに似たり。毎年六百萬圓宛の國費を拂ひて、一萬五百餘人の司獄官を置き、六萬餘人の犯罪專門家の番をせしむること、決して輕々視すべきにあらざるなり。其の官吏と其の囚人とを合せて七萬餘人優に一軍を組成すべし。若し之に關係ある警察裁判所等の人員を加ふるときは拾萬人以上となるなり況んや此の六萬人は、皆之れ人の子女たり、母たり、夫たり、婦たるものなりとすれば、實に嘆ずべきことにあらずや。六萬の犯罪者を敵と見れば、甚だ恐るべきも、一方より考ふれば是れ我社會戰爭の傷病兵なり。之を癒せば戰鬪力增加し、否らざれば徒らに病院の費用を拂ふのみ。戰鬪力の減退を免れざるは勿論、却つて累となるべきなり。

更らに他の一問題たる禁酒事業を見ん乎。其の關係する處甚だ多岐に亘ると雖も、犯罪の原因として或は幇助として重大なる者なり。英國醫學博士クラザルス氏は、凡そ百犯罪の七割五分より九割に至るまでは飲酒之が媒介をなすと言へり。今日本の統計を擧ぐる能はずと雖も、有馬典獄の說によれば明治三十五年に四千三百人の囚徒に就き飲酒者不飲酒者を調査せるに、百に付き四十五の飲酒者を得たりと。然れども氏の考へにては寧ろ五十五を正確なりとす。惟ふに飲酒家と稱する程にあらざる者も、飲酒のために助けられたることなしとせず。且つ百人に四十五人の外、下戸なりとは實際に合はざるが如しと。兎にも角にも禁酒論も又監獄改良の一術にして、密接の關係ありと謂ふを得べし。若し夫れ禁酒の道德に衞生に關係あるが如きは言を費やすに及ばず。玆に唯經濟の一點より言ふべし

全國酒造額平均四百萬石にして此の價格二億八千萬圓内外なりと云ふ。此れ實に日本帝國一ヶ年の歳入に相當し、日露戰爭三十七年費の半額以上なり。豈に驚かざるを得んや。財政に於て餘裕ありと謂ふ能はず、人民は租稅に堪へずといふ。然るに猶此の浪費あり、由々しき大事と云ふべし。

往古社會の事甚だ單純、飲料の製造巧みならざりし時は、飲酒の弊害も少かりしならん。されども今世に至り衞生の必要甚だ多く德義の標準高くなり、經濟界の生存競爭も亦大いに其の度進みたるは、皆禁酒の理由を强大ならしむるにあらざるはなし。是れ古に重からずして今に急なるが故に、古の信條にこれなくして今新たに之を立つるの要を生じたるなり。之を要するに、何事も事實の改良は人心改良に於て初めて實効を奏す。世人は更に少しく自己と社會との利害關係の緊密なることを知り、社會を救ふは自己をも救ふ所以なるを覺ゆることを要す。而して單純なる智識は實行の能力に乏しきものなり。宜しく之を動かすの同情を養はざるべからず。究竟するところ萬事皆『凡て人にせられんと欲ふことは、汝等また人にも其の如くせよ』（タマイ傳七〇十二）との聖訓を服膺して同情を養はざるべからざる也同情を養ふはキリストの同情に觸れて同化を勉むるより善きものはあらじ。キリストに同化せられて身之を實驗し、以て社會文明の進歩の要素たらざるべからざるなり。

歐米の慈善事業と其の根本必要

曾て兩廣總督たりし陶橫氏は歐州を堯舜の國なりと奏上せしことあり。吾人が歐州の慈善事業を觀るとき此の感を興さざるを得ず。病院、孤兒院、癲狂院、養老院、訓盲啞院、毎日小兒を預る處、小兒の虐使を防ぐ協會、醜業婦を救ふ處、無宿無業の者を救ふ處、此等は郡に州に、有志に由つて敎會に依つて設立せらる。是れ實に基督主義の花なり實なり。ロンドンは最も慈善事業の多きところなり。

バアナード氏の無宿幼年救濟會は、總兒數八千五百人、年數四十年。バアキングサイドの女子部には敎會堂、病院、作業場等の外に六十の宿舍あり。毎戸廿五人を容るべし。總數約千五百人なり。全體之費用は八百五十萬圓。中には既に傳道士となれる者ありて祝會に臨場せり。

救世軍の無宿婦人宿泊所　（ロンドン）東部一九〇三）

百三十二萬五千〇五一六八（男女）

安辨當、三、三八一、一〇五

軍の傳道費（一九〇三年）一七九、四四四磅。

ロンドン　ペッナル・グリンのオクスフォルド、ハウス

二成人クラブ（八百人）三幼年クラブ（五百人）

經費　通常九七一磅　特外　五九二磅　計一、五六三磅。

慈善の業は美なり善なり。然れども其の由りて來る所を救はざれば、如何に盡すといへども遂に救ひ

切れざるなり。而して其の源由は自由競爭と學術應用とより來る。

喉を壓して人を殺す者は罰せらる。人をしてパンを得ること能はざらしむる者は悖德の謗なし。

米國は歐洲と大いに異なり、寧ろ歐洲より溢れたる貧困者の爲めに慈善をなすものにして、眞に慈善の性質を有す。而して之を救ふこと尤も有効なり。

我が日本も追々慈善の必要增加せり。然れども慈善の事業は屢失敗に歸す。是れ一に慈善の精神足らざるが故なり。而して個人の慈善を奬勵すると共に、社會的救濟を要すること尤も大なり。要するに政治と宗旨と相待ちて始めて功を奏すべし。其にしても全體の思想が博愛主義に充たさるゝに非ざれば、決して此の要求を充たすこと能はざるなり。

歐米の慈善は人道の戰爭なり。博愛の及を以て自由競爭の弊害と戰ふなり。强露には一年半にして勝つことを得べきも、平和の戰爭は悠久絕えず奮發せざるべからざるなり。（明治三十八年十二月）

第六編　傳道

傳道論

是の故に汝等往きて萬國の民にバプテスマを施し、之を父と子と聖靈の名に入れて第子とし、且我が凡て汝らに命ぜし言を守れと彼等に敎へよ。夫れわれは世の末まで常に汝らと偕に在るなり。（マタイ傳二十八〇十九）

斯くてパウロ夜に於て幻を見たり。一人のマケドニア人立ちて、彼に請ひ言ひけるは、マケドニアに渉りて我等を助けよと。（使徒行傳十六〇九）

右は傳道心警醒の二大聲言なり。前者はガリラア人と呼ばれし理想的大人物により神權を以て命令として發せられ、後者は希臘の强大部なるマケドニアの代表者より慇懃なる請願として發せられたり。命令は嚴明に正式に煥發せられたり。請願は夢幻に於て寧略式に演述せられたり。命令は畏敬服膺せざるべからず。請願は同情を以て接受せざるべからず。命令は直ちに萬國を目的として發せられたり請願は一地方の爲其の急を訴へたり。命令者の大志は滿天下と萬世を蔽ひ社會と個人とを貫通せり。請願者は他を顧みるに遑あらざる如く先づ我に來れよと熱望せり。

抑此の命令と請願とを聽く者は別人にあらずして、同人また は同社團なり。既に天父の恩に感じ主の保護を蒙る者なり。苟も天父の子女たり、主耶蘇基督の僕婢たるの信操ある者は必ず之を體して其の

分を盡さゞるべからず。傳道の動機如斯天主の詔命を奉じて兄弟の急に赴くなり。嚴肅潔清にして亦仁愛の事なり。尊重せざるべけんや、奮勵せざるべけんや。

二十世紀の現世に於て最も多く傳道に從事しつゝある教會は何れぞ。アングロサクソンの血統其の勢力を得たる英米兩國の基督教會が其の魁たる者にあらずや。蓋し是れ當然の事とす。其の人口の繁殖其の貨財の增進、天下並ぶものなし。其の知識、其の技術の發達、亦實に列國に冠たり。若し精神界に於て比較的不振の狀態にありとすれば、實に不幸の極みと云ふべし。幸にして宗教の形勢も亦日新の趣きあり、感謝せざるべからざるなり。

就中米洲に國をなす者は神の惠福を蒙れるなり。百年前の歷史を顧み五十年以降の發達を見れば、實に一世を驚倒するに足る者あるなり。吾人は神の寵兒なる米州の人を尊敬するなり。而して神の寵榮を擔ひ人の尊敬を受くる者は、其の責任も亦大なることは贅言を要せざる所にして、是れ亦吾人に愛敬せらるゝ兄姉の大いに感ずるところ、又勉むるところなるを信ずるなり。我等東洋の極邊に在り、其の啓導を蒙り、其の後に從ひて福音戰場の端に加はれるもの大いに主と益友との知遇に感じて奮勵せんと欲する者なり。されば今本文なる二大聲即ち上よりと下よりの警醒に覺めて、其の概念を玩味すれば、此の命令を奉じ彼の請願を聽くは即ち神と本願の人の至情を合して神人融和天地致一を圖るものと云ふべし。神は詔命の實効を擧げんが爲めには、其の獨子を惜しみ給はざりし程に世をば愛し給へり。人の良心は己が子の爲めには身を殺して仁を成さんと勇み立つなり。傳道の業は此の間に介して神と人とを滿足せしめんとの要件を遂行するなり。實に貴重有益の業と云ふべし。試みに瞑目一番して永遠の神子を罪人と伍せしめ、遂には死の苦と恥とを嘗めしめたる天父の大御心を察せよ。又此の大御心に感動せる獨尊の子は、天の榮をも打棄てゝ世に降り、罪を知らぬ身にして罪人の立場に立ち、あらゆる無情殘酷を味ひて後其の血汐を以て印を捺し、此の命令を發せる子たる神の心を察せよ。又飜つてマケドニアの狀態即ち滿天下皆マケドニア的なる獄中に在り、罪惡充溢君父を賣り朋友を渡すの亂臣賊子、不貞不信なる男女宮殿より巷閭に充滿するを觀よ。此の間慘酷悲哀の狀態數ふるに遑あらず。是れ必ずしも蒙昧迂愚の俗人又は社會に止まらず。開明の度高くして神を知らず基督を知らざる社會には、猶ほ深く恐るべき罪惡あり。其の亡びしさまの如何に殘酷なるべきを偲ばしむる者多し。而して是れ皆彼等永遠の運命に關する者なり。苟も基督の心を心とせる者にして憐憫惻隱の情を起さゞらんや。而して我等の爲に死を嘗め血を流し給へる主は彼等の爲めにもなし給へるにて主の死と血とを値ひする兄弟姉妹の慘狀を見聞しつゝ雲烟に付して忍ぶは、主に對するの道にあらざること論を待たざるなり。我マケドニア人は立ちて叫ぶことをさへ知らざる程に墮落せるものあり。又比較的品性の善き人にても、神なき人には眞の平安なし、進歩なし。平安の狀態或ひはあるがごとき も進歩の微なきは死水の如し。或ひは吾人の知らざる未來に於て此の睡眠的靈が覺醒せざることもあ

らざるべし。然れど或ひは萎憊起つこと能はざるの痼疾に陷りをり、永く憤怨の中に留らざるを保すべからず。慈愛憐憫の涙に鋭敏なる主は、彼等の醜慘なる狀態に心を傷むるは勿論なるが、彼等に對して冷淡なる其の臣民の態度の爲めにも如何に多く其の涙を流し給ふらん。思へば實に吾人も猶ほ未だ罪深き者なることを感ぜざるを得ざるなり。願くは先進後進共に勵みて福音の宣傳を勉め吾人の責任を重んじ主の前に平安を懷かんことを。

前掲の本文の要求は其の大意を領得せりとして、本文中に傳道の心得に付指示する所ありやと問はゞ多々あることを疑はず。固より短文なれども言々句々考究の題とならざる者なきに似たり。今僅かに數語を抜萃し、三黨の要を得て傳道の方法に資せんと欲す。曰く

一、萬國の民

二、彼等に敎へよ

三、我等を助けよ

一、萬國の民　マコ傳十六章十五節(『イエス彼等に曰ひけるは偏く世界を廻りて凡ての人に福音を宣べ傳へよ』)を閲すれば、我本文に似寄りたる敎訓を爲し給ひて（恐くは一日前のことならん。尤もマコの此の本文は後代附加挿入との批評ある處なり)、偏く世界を廻りて凡ての人に福音を宣傳せよと宣へり。然れど最後の訓令には國民なる語を用ゐて一層用意の周到なるを以てせり。

紀元以來初期の人は如何なる思想にて國民なる語を讀みたるやは明かならざれとも、近代は實に世界は國民進歩の舞臺として作られしかの如く見ゆるなり。國民ならずして人類の進歩も幸福も望むこと能はざるが如し。少くも基督紀元以來は國民發達の時代なり。主は玆に之を認め給ふが如し。而して之には二つの意味あるべし。

甲、基督の道は如何なる國民にも適應すべし。

基督の道は一地方人種一時代の產物にあらず、所謂大道邦國を限らず、至理中外に通ずべき者なり基督は宗敎道德の原理を與へ給へり。其の形式其の組織の如きは、其の地方と時代との宜しきに委したる者なるを信ぜざるを得ず。故に能く各國に其の根蔕を深うして繁榮し美果を結ぶことを得るなり。曾て宣へり、『我國は此の世の國にあらざるなり』。蓋し此の世の國家と肩を並べて牴牾衝突すべき者にあらざるなり。其の靈質と境域とに於て、此の世の國民の上に在りて之を指導すへき者なり。故に同時に存在して相戾ることなき者なり。

乙、基督の徒は國民精神を承認して傳道をなすべし。

水草群をなすの蠻民も猶史を重んじ習慣を貴ぶは天下至る處として其の徵なき者なし。以て其の團隊の秩序安寧をなすなり。況んや數萬以上數千萬の人口を統一して特種の歷史習慣を有する國民に至りては、特種の發達之に伴ひ、其の國民の過去現在未來を制する者なり。其の細胞たる民人に一

種の道を傳へんと欲する者、必ずや此の國民精神を敬重し其の發達の程度種類を考へて布教の方法を講せざるべからず。苟くも斯道の爲めたる口實をもて其の國民的性格に支吾を試むるが如きことあるべからざるなり。大道の原理に關するにあらずして、猥りに其の習慣の變革を企つべからざるなり。假令我が眞理と相容れざる習慣ありとするも、之に對して宣しく禮あるべし。吾人は己の自由を重んずるが如く他人の自由を敬せざるべからざるなり。若し然らずして善き目的の爲めに我れ彼を侵すの權ありとすれば、彼にも其の信ずる所に從ひて我を侵すの自由あり。而して禮義茲に滅し爪牙相傷るの獸爭を顯すのみ。嗚呼是れ列國民の上に立つべき天國民の態度ならんや。四方の傳道地に於て動もすれば紛擾を生じて、必要なくして殉教者を製造するの禍を見る事あるは、多くは國民精神を敬重するの足らざるより來る者ならん。廿世紀は有史以來最盛なる國民時代なり。天國の境域を擴張するに於て深く注意せざるべからざる所なり。

嗚呼國民精神、自ら愛すべき國民なきものはいざしらず、苟くも一國の民族中にありて隣朋と共に共通の利害榮辱を有する者には、此の國民精神てふ不可思議なる感情が胸底に存するなり。而して若し是に不安不滿を生ずるが如き故障を國民の上に生ずるときは、其の苦痛云ふべからざるものなるなり。

天國の思想如何に大なるにもせよ、此の國民精神と支吾衝突するの不幸を見るときは容易に擴張する能はざるなり。必ずや天國をして國民の上に位して之を導かしむるの方針を取るべし。徒らに水平を同じうして衝突するの愚を避けざるべからず。

現在の父母より推して天父の愛情を學ぶが如く、國民精神の鏡を通じて天國を覗ひ、漸く其の眞を觀るに至るべし。國民精神は、能く之を導けば天國の門とこそなれ、仇となるべき者にはあらざるなり。

封建時代君臣の關係を知る者には、基督と信徒との關係を知るに於て、其の全く自由自主なる世界生活をなさゞる者よりは容易に其の秘密を見出すべし。國民精神と天國思想も亦此の類ならざるを得んや。

廿世紀に於て世界を福音化せんが爲めに、苟くも國民精神ある民族には可成速かに國民統一の便利を以て教會を組織せしめ、天國の一部なる教會の基礎を鞏固にして、一人にても多くの靈魂を救はんこそ尤も願ふ處なれ。蓋し現世界に歴史を有せる傳道地に於ては、印度にまれ、支那にまれ、日本にまれ、國民精神に注意して傳道せざれば決して有力有識にして品性ある人民の心を攬ること能はず。隨て基督の精華も顯はれずして、多くの生靈を主に來らしむること能ざるのみならず、却つて屢々混雜を起して發達を妨害するの實例多きことなり。或は偶ま無識の階級中多數の信徒を得るとしても、基督教を以て一種の迷信多き陋宗教と墮落せしめ、群羊は得たれども牧者を得るの道な

く、滿野皆蠢爾たる迷群と化し去るの憂あらんとす。訓練の足らざる大軍に士官の乏しきほど手持無沙汰に弊害多きものはあらざるべし。其の敗軍を待つの外又何をか期せんや。故に曰く、國民精神を尊重して自重自治の教會を作ることは傳道の第一要義なりと。

二、彼等を教へよ

創世紀を繙けば上帝人祖を祝福し給ひしとき

生めよ、殖えよ、地に充てよ、之を從はせよ、又凡ての生物を治めよ。

と命じ給ひしが、今基督即ち神の獨子が天國の開設を創始せんとするに當りては、『服從せしめよ、支配せよ』とは宣はずして、『教へよ』と宣へば、人は又自ら責任を負うて立つことを期して、『我等を助けよ』と祈れり。是れ實に新約の新生面福音宣傳の秘訣なり。

傳道地は如何に貧弱蒙昧なるにもせよ、傳道の目的は征服にあらざるなり、統治にあらざるなり。征服必ずしも銃砲劍彈の暴力のみによらざるなり。或ひは思想を以て才識を以て又は財力を以て異族を征制すること全くなきあらざるなり。弱き者は屈し强き者は反抗すべし。紛紜繼續すべし。神の榮も人の幸福も興るべきの余地なかるべし。從來支那に於ける教案は種々なる方面より征服的態度を以て臨みたるに起因する者多し。

『教へよ』とは之を啓し、之を發し、之を奬勵し、之を導き、以て天性を發達せしむるなり。斯くして幼稚者は速かに生長し長ずるに從ひて適當の設備をなし、時の必要に應じて服裝を定め合理の發達を遂ぐべし。

三、我等を助けよ　是れ決して懶惰地に依る者の言にあらず。自立獨立の氣象ある者の言なり。教養其道を得れば此の請願早く發すべし。上より壓するを願ふにあらず、悉皆萬事代用をなして拱手安逸せしめよと求むるにあらず、己のあらん限りを盡して我が足らざるを補ひ給へよとなり。教育思想なき親は動もすれば余りに親切にして子女をして何事をもなさしめず、皆自ら代りて之を調へ、一から十まで注入的に吹込みて我子女幼弱なり何事をなさしむるも危く、余りに思考勉學せしむれば恐くは疾を得んと何時までも子供の待遇をなして之を寵愛すれば、恩は即ち恩なるべきも是れ子を傷くるの恩なり。又時に嚴冷なる父母あり。その兒を咤叱し呵嘖して絶えて慰撫奬勵せず。此の青年畏縮萎憊せざれば偏屈執拗の人となる。奮勵事に當り勇んで困難を陵ぐこと能はざるなり。人誰か奮發自立の心なからん、唯屢逆境に當りて其の志を挫折するの患多しとす。挫折必ずしも敵より來るにあらず、屢々其の愛親より其の恩人より來る事あり。實に悲むべき事とす。傳道をなす者は抑始より此の覺悟を定めざるべからず。其の數理に於ても政治に於ても能く教ふべし。即ち奬勵して學ばしむべし。唯に命令注文を以て束縛をなすべらず。宜しく自立の氣象を鼓勵して責任を負はしめ、適宜に之を助くべし。

自由を與へざれば遂ひに立たず、適宜に助力を與へざれば幼弱の身體俄かに獨立をなし中途にして屈するに至らん。故に曰くマケドニアに渉りて（來るを待たずして海を越えて往かんことを求むるなり）我等の爲すところを助けよ、是れ理論にあらずして眼前の事實なり。極東島帝國の諸教會は合同自立して國運の進歩に添ひ主の御勝利を明にせんと欲す。此の時に當り先進の母教會ありて曰く、汝等未だ力足らず自立尙早し、宜しく沈默して後見者のあるまで待つべしと言はゞ、青年教會は氣餒へ筋骨萎へ衰態に陷り又起つ能はざるに至るべし。若し又後見者が過激の判斷をなして島帝國の人氣甚盛にして百般の事長足の進歩をなせり。宗教の事も豈に夫れ後見者の看護を要せんや、今日より直ちに純然たる獨歩をなすべし。獅子は子を愛して之を谷底に投じ鷲は其の子を愛して喬木の顚頂に之を巢外に抛り出して其の飛揚を余儀なくせしむと。是れ一理なきにあらねど、是亦極端情を得ざるの誹を免れず。亞非利加の如き南洋諸島等の如きは知らず、東亞の舊國はは稍高度に發達せる宗教種々ありて久しく人心と社會の習慣に浸潤せり。故に我道大なり眞なりと雖も、俄かに此の强大なる敵を征服しがたし。此に外援を得て以て内外の勢を制せざるべからざるなり。若し些少の援助を吝まば恐くはゴルドン將軍のカルツウムに於けるの境遇を生じ、永く英國自由黨の歴史を傷くるの覆轍を踏むに至らん。是れ一簣を缺きて九仞の功を空しうするなり。天下如斯遺憾なる者あらんや。故に曰くマケドニアの懇願を容れて援助を與へよ、即ち其の立たんと欲するを立たしめて適宜の援助を與へよ。何處までも援助なり、分量の大小は時宜に任ずべしと雖も、其の行爲運動の性質は援助たるべきなり。

或は各國各傳道地をして各分立教會を作らしむれば、我が大教會は遂ひに宇内的性質を失ひ傳來の大目的を失ふに至らん。是れ教會に忠なる者にあらざるなり。

吾人が宗教にして三位一體の神の上に教會と云ふ神を置き宇内的境域を不易の理想となすべき者ならしめば、時勢の便否も傳道救世の緩急をも考ふるを須ゐずして、只管萬國畫一教會の維持に勉むべき筈なるべしと雖も、我本文に明顯せる主の御旨意は實に單純明白火を見るが如きなり。主は教會組織の統一又は分立等には絶えて顧慮し給はず、目的とするころは父と子と聖靈とを信じて仁愛の命令を守らしめんと欲し給ふなり。而して以上の條件の下に世の末までも常に信徒と偕に在し給ふとなり。是れ決して教會の系統を問ふ者にあらざるなり。假令幾百に分列するとも又は一つたりとも、是は皆基督の治め給ふ大教會なり。傳道會社は統一せざるべし、諸教會は國を異にして連合せざるざるべし。然れども主は之を其の足下に統一し給ふなり。世界の各地に教の種子を蒔き其の諸教會を扶植せる母教會と其の傳道機關は、皆其の働に從つて報を受くべきなり。

最後に予は感謝を以て諸君と共に記憶せんと欲するは、以上の陳述は今日に於ては予の論説にあらずして我々メソヂスト三派に實現せる事實の記述となれることなり。日本に在るメソヂスト三派は其の

母教會の全權委員に由て合同を決せられたり。明治四十年五月東京に於て總會を開設すれば合同一致の教會となるなり。而も猶三母教會は適當の關係を保ちてマケドニアを補助するなり。

日本にある二十余派の教會が漸次合同して四大教會を現出せんとす。組合、日本キリスト、日本聖公會、日本メソヂスト。以上の四教會の中には少くも十二派を含む。現代自由教會の一大短所なる分立の弊が減少して新利益を興すに至らば、獨り日本の利益のみならず、世界の各傳道は勿論舊き母教會にも餘勢を及ぼすべきなり。

故に我教會の合同獨立は母教會に對しては分立の如きも、其の結果は國家的合一となり、漸を逐うて世界的合同となるも知るべからざるなり。

天は日本をして種々なる試驗をなさしめつゝあり。豈に獨り天國の事業のみ物たらしめんや。此の譽多き立場に立たしめられたることを感激して奮勵せざるべからざるなり。

傳道本戰の時期

期滿てり、神の國は近づけり。（マコ傳一〇十五）

是は主基督傳道の最初に於て大聲喝破し給ひし言葉である。此の本文を唱へて『傳道本戰の時期』と題する。抑々戰爭は喜ぶべきものでない。併し神の御國を擴張する傳道は惡の勢力と戰はねばならぬ。傳道が戰爭狀態を備へて居ることは止むを得ないことである。平和を目的とする福音の中にも戰爭が重きを占めて居る。戰爭には主戰、客戰、防戰、進擊又は退却と色々のことがあるが、大別すれば豫備戰、本戰の二である。或る時は偵察戰といふ者がある。又一方を非常に攻擊して一方の注意を怠らす爲に牽制の戰鬪といふものもある。傳道戰も亦之と同じく戰鬪狀態にある。併し今日世界の十字架の戰はちらほら準備の戰にあらずして、全局の勝敗を決すべき本戰の時期である。

最近大戰爭をした日本の國民は、他國人よりは戰爭のことは能く分る便宜がある。今日は奉天の戰である。世界全體に亘つて斯く言はねばならぬ。而して其の戰線の右翼か左翼か將た又中堅か、何れかに我が傳道地は含まれて居るのである。

『期は滿てり』、神の定め給へる期は滿ちた、神の勝利を得る時期は來た、神の子が現はれた、十字架の旗が閃いてきた。此の宣言は千九百年前に應驗したに違ひないが、今日に於て亦然り。神の經綸は大なる者である。其の緩急廣狹がいろいろ複雜して居る。而して其の全體を容易に見る事は出來ぬ。事に由り時に由り人に由りて神の經綸を異にする。神の經綸の由つて定まれる時期は必しずも擅制無條件の者ではない。大智大能の先知によりて世界大小の形勢に符合する所あるべし。基督在世の時を見渡せば、羅馬帝國は西半球の大半を占め有形または無形文明が東西から接觸する位地にあつた。之を今日に比ぶれば甚だ不便なりといふ事ができるが、羅馬以前に比べたらば交通の便開け世界の文明を

一國に集中した時代であつた。當時は福音の宣傳の爲に最も都合好き時であつた。神の選民たるイスラエル民族は幾度か盛衰興亡の波瀾を通過し試錬に試錬を重ねて羅馬帝國の中に孤立し、時勢は切にメシヤの出現を望んでゐた。基督が『期は滿り、神の國は近づけり』といはれたるは正に其の時である。神の定め給へる時期は滿ちた。人心を掌に握り之を通觀し給ふ神の時期は滿ちた。『時は滿てり』との宣言は今日に於ても通用せられる。今日の有樣は羅馬時代に於て想像のできぬ時代である。此の圓球上到る處傳道地ならざるはない。神の國は既に出現して居る。今日は半世紀前には世界に知られなかつた東洋に新羅馬帝國ともいふべき日本帝國が興つた。

新敎と稱する傳道の有樣を見るに、最近の調査にては世界の國民社會に新敎の傳道する處は三十三ある。今日では世界民族に傳道してゐない所は殆ど無い。歐米宣敎師の數は一萬九千二百八十八ある。之は傳道隊の大隊長聯隊長又は旅團長に當る人である。傳道地で回心して傳道者となつたものが九萬八千三百八十八ある。そして敎會が一萬六千六百七十一。信者となりしもの三百萬六十三百七十三人ある。十五億の人口に比べては少數なるも、五十年前に眞の神を知らなかつた處にこれだけの信者の出來たことは感謝せなければならぬ。實に大勝利である。神の國の近づけるは疑はれない。

世界の傳道を觀るに、或る處は盛んで或る處は衰へて居るやうである。日本の傳道は困難である。奉天戰にて云へば何處の方面であらうか。萬國の傳道者は皆自分の處は困難だと言つて居る。併し乍ら日本は最も困難である。交通の便は敢て他に劣らないが、眞實神の愛を傳ふることは困難だ。罪を知らすことが困難だ。精神的の戰は困難である。奉天戰の鴨綠江軍にあらんか。當時乃木軍は十日乃至二十日間晝夜兼行して困難なりしも、其の結果は大いに顯はれた。然るに川村大將の軍は鴨綠江より山中を行軍して糧食彈藥續かず、其の困難は非常であつた。併し鴨綠江軍がなければ乃木軍が進まれぬ。クロパトキンの軍を牽制して乃木軍を平地に進入せしめた功は川村軍にある。我々は困難の衝に立つて居るが、本陣にて各處よりの情報を受取り大體を見れば勝つて居る。奉天の戰にても或る方面は敗戰と思はれた。成程負けて居た處もある。併し大山元帥兒玉大將は中央の本陣に居て各方面の狀報を受け、全局を通覽して大體の勝利我にありと手を拍つて居た。亞細亞大陸土耳古波斯の傳道は困難である。亞弗利加は何年經ても成功はないが、大體を見れば傳道は世界に及び聖書は三百の國語に飜譯せられて居る。我々は困難の位地に居るが、之を支へなければ勝利は得られない。奮鬪忍耐せなければならぬ。此の世界は南北兩極を探さなければ探す處がなくなつて來た。傳道は普及して居る。日本は思ふ樣に傳道はできない。が五十年間の變化を見れば確に時期到來と云はねばならぬ。『期は滿てり』敎育は一般に普及し到る處書物を讀めない人は尠ない。無筆の者は百人の中で數人に過ぎない樣になつた。五年乃至十年の後には文字を識らない人を搜索するに骨が折れるやうになるであらう。日本にて說敎演說又は著述は容易である。文字から製造する必要はない。他の傳道地では敎會が小學

校を經營して居るが日本は其の必要が無い。困難な說敎を解する能力がある。今や世界の波は駸々として打寄せ人心定まる所なき有樣にて、傳道は益々必要である。信敎の自由は憲法に定められ信仰の自由の安全なる國は英米に亞いで日本なりと云はれて居る。獨逸にてはメソヂスト敎會の傳道は非常に困難で祈禱會すら開かれない處がある。日本で敎育界の困難迫害は何でもない。それから又日本の裁判警察も公平である。我々は不平を唱ふべき場合でない。『期は滿てり』、神の國は近づけり。只自分の勉强又は信仰如何を顧る外はない。

諸君、今日の傳道界の困難なる事を考へないで世界に比して日本程安全なる處なきを思ひ、足らざるを自己に顧み奮發一番せなければならぬ。今日は早や本戰に從事し勝敗を決すべき時期である。今日は孤軍を以て大軍に當つて居る。困難はもとより覺悟である。併し楠軍が足利と湊川で戰うた樣な不利の戰爭ではない。決して敗北して居らぬ。寧ろ織田が今川の軍を一夜の間に桶狹間で擊つた樣な戰である。もしくは德川三萬の軍が豐太閤十三萬の大軍に對して少しも引けを取らなかつた小牧山の戰陣に似て居る。腹を切る時ではない。しかし樂觀はできぬ。勝軍でも死傷の多い事があるものだ。一番鎗の功名は稀である。多くは討死するが常である。我々は一番鎗の働きをするものである。討死の覺悟でやらなければならぬ。鴨綠江軍の積にてやつて行かねばならぬ。奉天の戰は日本軍の勝利に相違なけれども死傷は却て日本軍に多かつたのである。今日の場合世界全體の十字架軍の形勢を腹に入れ天國近しの信仰と希望とを以て萬難を排して成功を期すべきである。

或時私は朝鮮の若い傳道者に、信者の多いのを羨むといつたら其の傳道者は『私は日本の敎會を羨やみます。朝鮮の信者は多く出來ました。併し日本信者の一人は朝鮮の十人前に當ります』と答へたのである。之はお世辭なるやも知れねど少くも半分の眞理はある。元來日本人は事理の分つた人間、一人が十人前をする人民である。基督信者も迷信を離れた譯る分つた信者でなければならぬ。今後我が國民は膨脹しなければならぬ天命を有して居る。世界の神國進步の實狀を見て大いに骨を折らねばならぬ。先日或る派の宣敎師は私に手紙を送り次の二問題に對し回答を求めた。

（一）　現今傳道者の爲に必要なる品性は何ぞや。

（二）　現今日本の社會の狀態個人の狀態に對して傳道するに如何なる主意が大切なるや。

多忙早卒に答へたので下書もなければ、記憶のまゝ其の要點を此處に述べよう。

傳道者の品性の重なるは第一に敬虔(Godliness)、次には克己犧牲の精神——出來るだけ己れに薄くして公けの爲にすること。第三は質朴(Simplicity)、虛飾のない奢らないこと——學問も生活もハイカラといふ今日、質朴にして實のあるが必要である。第四は同情で、人を思ひやり己れを後にして人を先にする。己れ達せんと欲すれば先づ人を達す。傳道者には同情が要る。疑のある人や未だ信仰のできぬ人や心の動搖する人には殊に同情が要る。人が過失をすると呆れてしまふが、同情を以て之を憫まなければ

ならぬ。すべての點に同情は大切である。之について大切なるは男らしいこと(Manliness)である。常陸山の如くなれと云ふのではない。信ずる所を表白して自分の可しとするところを行ひ、良心に反しては何事もしないのが眞の男らしいのである。男らしい所があらば、或は之が爲に正直親切も生じて來る。殊に武士道を唱ふる日本の傳道者は潔白廉直なる所が必要である。世界の風潮に侵され自分の事のみを考へ樂をしたいといふ心がありては男らしいことは行へない。屹然として立つ事は困難であるが、それに比して必要も亦强大である。傲慢粗暴は愼むべきも所信を斷行するは男らしいことである。學問の必要は言はない。之は無論である。今日は學問に常識を加へなければならぬ。も一つ寛厚(Broad mind)廣い心が要る。或る人は男らしくあり克己心同情心もあるが心が狹い。自分と異なる所は容れない。我に同情あるものには同情は深いが、異分子に對しては非常に狹い。何うしても廣くならなければならぬ。諸君、忍耐して廣くなるべし。

さて又如何なる點に注意して傳道せねばならぬか。日本に於て必要なることは先づ第一に人格ある眞の神を敎ふることである。唯一の眞乎に人格ある父なる神を敎へねばならぬ。學者社會には全くの無神論者は多くない。併し唯一の人格ある神を信ずるものは稀である。學者は有形物質の世界に滿足せず靈的世界の存在を考へて居るが、多くは汎神論である。近頃は精錬した西洋の汎神論が入つて來た此の時に當り天の父なる神を敎ふるは大切である。之れが立たなければ日本道德の根底が定まらない天父なる活ける大智大能の獨りの神がなければ、道德の訓戒に權威がない、又制裁がない。宛然基礎なき家と同じである。

それから日本國民は極端に愛國心は强いが、世界同胞の主義をも鼓吹せねばならぬ。たとへ世界に發展する使命を持つてゐると感じて居ても、世界を愛する心がなければ世界に發展は不可能である。四海同胞の精神なくば二十世紀の今日世界の發展はできぬ。世界を己が家とし世界の人を己が兄弟とする精神が日本人に足らない。米國に於てさへ發展できぬは之が爲めである。天父を信ずれば兄弟主義を生ず。父なき兄弟はなき筈である。神を信ずると共に兄弟の精神を養ふべし。之に次で傳道者信者が社會に生活し、日本を通して世界に利益を與へんとするには、日本帝國は何を中心として立つて居るかを說かねばならぬ。それは外でもない、皇室中心である。日本メソヂスト敎會の宗敎箇條第十六條には

我等は聖書の敎ふる所により、凡て有る所の權は皆神の立て給ふ所なるを信じ、日本帝國に君臨し給ふ萬世一系の天皇を奉戴し、國憲を重んじ、國法に遵ふ。

との明文がある。之を忘れてはならぬ。精神界混亂して極端なる說の行はれて居る時に當り國の中心を安全にするの義務を擔ふは我々の光榮である。日本の皇室を宗敎的の議論の爭點とする事は好ましくない。併し此の國家の歷史、現狀及び必要から如何なる中心があるか。五十萬の海軍は東鄕の爲に

戰はない。百萬の陸軍は大山の爲に戰はない。六百萬の生徒は學校に居るが皆萬世一系の　天皇の下に皇室中心の國家的教育を受けて居る。之を措いて日本の中心はない。我々は此の皇室中心を尊重し、國家の事を考へ、帝國の利害を教壇より述ぶる必要がある。

家庭の清潔も大に言ふ必要がある。東洋の家庭にはよい所もあるが夫婦間又は男女間の清潔に關しては基督教の講壇が之に任じなければならぬ。ところが實際は何うであるか。基督信徒の數を增すに從ひ實行を擧げて居るか。大に顧みなければならぬ。男女の教育は進んだが昔の教育あるものよりも失敗が多いかも知れぬ。基督信徒は眞面目に子弟を教育する責任がある。眞の平和清潔をつくるものは基督信徒である。

尙社會問題として禁煙にも論及したいが之を略し、更に大切なるは、社會の人に基督教の罪惡觀を說くことである。而して罪惡の意義の分るやうに說かねばならぬ。基督教の意味と在來の意味と意義を異にするに拘はらず、之を呼んで人を躓かせることがある。こゝらは常識の要るところである。紳士を罪人と呼ぶなどは大に注意を要する。罪を憎み罪を愧づる心を起らせ、罪の結果の怖るべきを說かねばならぬ。而して救拯とは罪の結果より救はるゝことである。又罪の勢力より救はれ、神の怒りより救はるゝ福音の目的である。之を忘れてはならぬ。

日本の信者は少數なれども他教の多數信徒に比すれば、事理の分つた信者である。獨り自らを救ふに滿足せず世界の傳道を自分の義務と感じ、大なる抱負を以て神の聖書を學び、基督の教を味ひ社會の狀況を見て之に適當する樣に力を盡したいものである。我々の戰は、淺川の戰にあらず。徒らに腹を切る場合ではない。一番鎗をして勝利の魁となる覺悟を要す。敗戰にあらずして、我既に世に勝てり天國近しといふ勝利の聲が聞えて居る。此の勝利を信じ討死の覺悟にて奮鬪したいものである。

新版圖の傳道

新版圖とは無論臺灣の事でございます。臺灣は殆ど三百萬の人口を有し、九州と大小伯仲するところなれば、一の傳道地となすには十分なるところでございます。

臺灣全體に普く傳道せんとすれば、第一の困難は言語でございます。三百萬中二百八十餘萬は臺灣本島人即ち漢人にして萬事萬端支那風の者でございますが、極々大別しても二種に分れて、言語全く異るさうであります。甲乙は一寸別け惡いけれ共、女子は頭髮服裝足の大小にて一見區別することを得るのでございます。之れに加ふるに僅かに十萬內外を見積らるゝ蕃人は大別して七族、小別しては幾何百社となる者にして、高山深谷を以て境となすが故に、言語の相違甚しきなり。且言語の數甚だ少くして直ちに論說や說教に應用すること六ヶ敷由なり。故に急に傳道をなし得べき部分は所謂二種の漢人と熟蕃と稱せらるゝ蕃人の漢化せられし者なるべし。而して尤も近づき易く尤も急なるは四萬計

の内地人なるべしと考へられます。

此の四萬計なる少數の内地人に傳道するはいかにして左程急なるやと云へば、其は左の數項なるべしと存じます。

一、少數なれども優等者である、少くも自ら優等者と信じて他の頭上に出て居るからでございます。然るに優等者たる筈である者が實際は優勝者の價値を懷いて居るではなく唯政權軍權を笠に着て居る計りではないかと疑はるゝ點の鮮からぬ故でございます。此の優勝者を覺醒せんとするものは新聞紙抔も無効にはあらざるべしと雖も、兎角手荒過ぎて、又は餘り商賣臭くして其の効を見惡きことは臺灣も内地も全くかはらぬ事と見えます。仍て慥かに隱然として沈着なる宗教の勢力を要することは勿論と存じます。所謂優勝者は官となく民となく兎角思慮反省同情を缺き、要なきことに本島人の感情を害し陰に輕悔厭嫌を招き居ること多きやうに聞えます。一例を擧げれば男女の別を重んずる漢人に公けに淫猥なる風情を示し、路上醉狂者を見る能はざる地方をも頓着せずして、未だ雨降らざるに朱龍の泥に塗れたる如き者を顯すこと稀ならざる等は決して一個人の弱點として恕し置きがたき反響を來し居る事と見えまする。斯る中に立ちて少數にても謙遜同情に富み清潔なる言動をなして所謂優勝者を警戒し、同時に輕悔嫌厭の念に充ちたる本島人をして腹中にも亦眞物あるを知らしめば、所謂文明に對し意を强うせしむるに足るものあるべしと存じまする。

二、何れにても殖民的の地方には善惡の兩端を現ずるものらしく見えます。臺地に於ける内地人の墮落せるものは金輪際の底に達せるかの如き者あるよしなれ共、此の有樣に警められてか或ひは此の場合を通り過ぎてか、頻りに安心の地を求めて休まざる者も亦寡からずと聞えます。左れば是れ實に傳道の好機會と云ふべきである。加ふるに親戚朋友等の束縛氣兼等の心配なく、全く己れの意思のまゝ立働くべき自由を得て居ることゆゑ、道を聽きて受け入るべき便利多しと見えます。去れば必要のみならず便利も具はりたれば、成るべく十分なる傳道をなしたきものと思ひます。

次に漢人即ち本島人に對する傳道は英國カナダの長老教會より南北兩部に分れて傳道をなすこと爰に三十餘年、其の結果としては北方のみにても六十の大小教會と約六千の教徒ある由なれば、中々の成功と云うてよき事と存じます。北方の本部は淡水港にあり、有名なるマカイ氏の創設にして、オクスフォルド、カレージと稱する神學校あり、生徒二十人計り、女學校もあり。傳道者の妻を始めとして聖書婦の類を教育し居れり。昨年六月マ氏病死せりといへども、遺德の輝くことは夕陽の美なるが如く、教勢決して衰ふるを憂へざるが如し。マ氏の後を繼ぐ者はゴールド氏にして、今は單身此の重鎭に當り居れり。南部の本部は臺南にあり。規模一層大にして中學部、女學部、神學部あり。ケヤムベル、ペアクレ、フハル、ガッソン、ジョンソン諸師、其の他男女數氏の宣教師あり。傳道地は北方に三倍し、隨て多數の教會信徒を有すと聞えたり。南北共教育ある者には漢文の聖書を與ふれども婦女子

並熟蕃等には、羅馬字の聖書讃美歌等を用ゐ居るは永年の經驗一軌軸を出したる者と云ふべし。さて斯樣に英米兩教會の傳道あるにも拘らず、猶日本教會の傳道を要する以所は

一、臺灣人と日本人との相違は隨分小ならざれども、歐米人と東洋人との相違に比すれば甚だ小なり又若し誠を推して之に接すれば同情を起すことも亦一層易かるべきは疑ふべからざることなり。故に日本人にして眞に基督の精神を有し、臺灣語に通ずる者傳道に任せば、大いに成功し得べきを信じまする。

二、國民の同化上より考へても臺灣人中基督信徒は此の民族の生命なり。人道に於ても正義に於ても文明の思想に於ても彼等は尤も進歩せる部分なり。然るに此の種族の者或は却て他の者よりも日本人に親しみて同情を熟するに至らざるの觀なきにあらず。さらば彼等にして日本の施政に對し又は日本人に對して意に滿たざる處あらんか、勢ひ外國宣教師の下に之を訴ふるに至る。外國宣教師も亦支那時代の如く侵すべからざるを知るが故に、容易に干渉せずして慢然之を海外新聞上に洩らすが如き事なしとせず、斯していよ／＼相互の感情を傷ふに至るの憂あるは火を見るがごとし。臺地にある日本人四萬計といへども、兵は民と親しむの機なく官吏は多く威を以て臨む。商賈は面容平和なれ共內實は互に敵なり。眞に平和にして同情を以て臨み得べきものは教員醫師傳道者の三類とす。就中善良なる傳道者尤も融和の途に於て効ありとす。而して今は教員並醫師は少數ながら兎も角各處に散在し居れ共、基督教傳道師は臺北に於て僅かに三名あるのみ。是れ其の急の急なる所以と思はれまする。此の方面に於て成功する所あり。兩民族中の正しきもの同情相熟し苦樂をも相語り相助くるの道開くるに至らば、眞に同化の効を奏することを得べしと思はる。由來臺灣は鞏固なる良政府に治められしこと少き土地なり。和蘭は三十四年、鄭氏は二十四五年、清朝は二百年計なりといへども、一朝にして日本の手に渡れる有樣なれば政府の賴みがたきは歷史的に實驗せるものにして、今日の日本政府も果して何ヶ年の生命あるべきか、有識者程愈疑を深ふすべきの理なきにあらず。されば政事の方面より如何にあせればとて容易に信用を受けがたし。況や政事家の癖として信ぜられがたき行爲のみ多きは通弊なるに於てをや。されば怨恨邪僻の妨げなき交際より兩民族の同情を養ふこと尤も捷徑にして教育醫療宗教の三方より詰め寄すること尤も其の要を得たるものなるべしと存じまする。

傳道必要の梗概斯の如しといへども、日本の各派大隊押しに臺灣に乘り込むべきかと云へば、予は太いに其の不可を唱へまする。臺灣には目下日基聖公會の二派既に着手せり。此の外に他派を送るには及ばぬ。且つ日基派は尤も彼の地長老派と協同することを得れば大いに力を致すべき便利と、義務と共に備はれることを感じまする。猥りに小派を多くして同地の覆轍を繰返すが如きは大いに戒しむべきことゝ存じまする。（明治三十五年三月）

朝鮮傳道所感

只今平岩君より有益なる御勸めを受け、小生の尤も滿足に感ずる所なり。予の如き敢て講壇の勢力を輕んずるにあらず、否大いに其の勢力を增進せしむべき必要を感じ居りながら、自ら滿足する能はざるの有樣なり。されど今後一層の精勵と注意とを加へて諸君と共に努力する所なかるべからず。

平岩君の御話を承りながらフト想ひ出したるは、朝鮮傳道上の有樣なり。朝鮮は其の事情全く我國と異なり、傳道の尤も盛んに行はれつゝある平安道等の地方に於てすら、其の宣ぶる所ろは極めて單純平易なる福音たるに過ぎず。朝鮮の信者に聖書一と通り讀むことを敎ふるすら已に大事業なり。故に未だ講壇の勢力を增進せざるべからざるの域に達せざるなり。予が旅行中その乘れる馬を引ける人夫あり。彼は中々熱心なるキリスト信者なりき。予に問うて曰く『敎育の進みたる處に傳道すると、將た敎育の乏しき處に傳道すると何れかよかるべきや』と。予は彼れは暗にその日本に於てすると朝鮮に於てすると何れがよきやとの意味の質問なるを悟り、『敎育の盛んなる處に傳道するや、其の始めは困難なれども其の結果よかるべく、之れに反して敎育の乏しき處に傳道するや、其の始め何等の困難なかるべきも其の結果割合によからざるべし。故にかゝる地方には傳道すると共に又大いに敎育せざるべからず』と答へたれば、彼れは貴意を領せりと大いに喜びたり。朝鮮に於ける傳道の進歩元より遲々たれども、然も外部の進歩に比すれば其の速力到底比すべきにあらず。彼國にて逢ひたる男女の宣敎師にその生活、その旅行、その困難なるに同情を表して彼等を慰めたるに、彼等は却て一點の不滿なくして衷心より喜びと望みとに充たされつゝ働き居らるゝを以て答へらる。實に朝鮮の傳道に當り居るものには內部の喜樂多きを以て外部の困難を左ほど感せざるによるなるべし。

驟つて我邦の有樣を見るに外部の進歩常に駿々として止まず、動もすればキリスト敎の勢力及び進歩社會の下風に立たざるべからざるの奇觀なきにあらざることあり。吾人傳道の任にあるもの奮勵一番せざるべけんや。吾人は日本に生れ且つ今日の如き時世に生活しつゝあるを頗る榮譽なることゝして之を感謝すると共に、今一層其の盡すべき責任義務を明かにして、協力同心大いに救世の事業に從ふべきにあらずや。（明治三十七年十月、講話筆記）

傳道者となるを勸む

文明の進歩に從ひ分業彌多く、青年者の擇んで身を委ぬべき業務の足らざるを憂ふることなきがごときも、誠實有爲の青年をして眞に滿足せしむべき位置に至りては決してゆたかなりと云ふべからず。故に大方の人には己が職務は眞に一種の苦役にして、自家の樂みは更らに此の內に含まず、全く他に歡樂を求むるもの甚だ多きは事實にして、其の職務上に成功多からざるも之に起因する者多きは氣の

毒の至りと云ふべし。而して其の職務中に人の知らざる樂みありて覺えず知らず難きも危きも通り過ぎて、吾ながら後に驚くがごとき實驗あるは、傳道に從事するものに例し多き事なり。且又傳道上の樂みは種類に於て尤も上品なるものにして、例へば信徒の靈性の見る〳〵發達しつゝあるを知ること道に入る者の時に眞實無妄なる改心をなして美麗なる心樣を見すること、又時には悲慘なる境遇にある者が信仰に因れる堅忍の樣を見すること、特に人の事ならで自家が責任を感じて神の前に慰藉を蒙り、死より蘇りて父の右に座し給へる救主が態々其の座を立ちて我を助け給ふが如く感じて心太く氣丈夫に職務を執ることを得るがごときは何とも云はれぬ樂しみなり。俚諺に乞食も三日すれば止められぬと云ふ、況してや施を三日行はゞ猶大なる喜びあらん。傳道者の立場は與ふる方なり。故に一度多少の成功を實驗せし人は、此の方面から考へても傳道は止められぬ者となるべし。況んや一層義勇奉公の精神眼を開きて社會の必要を達觀し、吾が功業心に問ふところあらば性質の高尚にして純粹なる、遠大にして永久なる、如何なる功業心をも滿足せしむるに足るものあらん。一丈夫として世に功業を立てんと欲せば、人爵なく富なく武力なく虛榮なき一匹夫にして、猶帝王をも敎訓すべき抱負を懷くこと之に增したるものあらざるべし。由來英雄數奇多し。凡夫にして英雄の心事を實地に窺はんと欲せば、正しき事業を執りて逆流に棹すを以て尤も便とす。然らば傳道事業こそ、尤も此の目的に合ふものなれ。青年の志士何ぞ一度振うて此の聖地を踏まざるや。最後に傳道は直接に人の永生に關する神の聖旨を傳へ、聖情を滿足せしめ奉らんことを勉むるものなり。匹夫の任じ得べき特權又光榮として宇宙間之に過ぐるものあるべしとも覺えず。三十年前の國士は、日本を三百分して各其の一を天下と思ひ、一方の榮枯を此の間に求めたり。近來は日本を一國として志士の馳場となすに至りしも世界と宇宙と永生とは未だ雲外別界の觀あるを免れず。古代の支那人猶ほ謂へり、天地の化育を贊成すと。神明の智識甚だ淺く天地の理甚だ暗き時代に於ても哲人は既に然か言へり。況んや現代東洋の青年志士にして天父を信じ神子に奉事する者をや。宜しく救世の業を分擔して宇宙の經綸を贊成するに勉むることを怠らざるべし。青年の志士其の生業を擇ぶに當りて、深く此の點に注意せられんことを渴望する所なり。（明治三十六年）

説教に就て

積極的に心得べきは

（一）解し易き事
（二）實驗的にして、自ら篤く信ずる事
（三）可成新しき眞理を見出す事
（四）聽衆に對して熱心に同情をおこす事

消極的に心得べきは

（一）他人の説を我が物顔にせざる事
（二）他人の聲色態度を眞似るを避くる事

第七編　夏期學校及青年會

夏期學校開校式演説

昨年の夏期學校の終りに於きまして、圖らずも第四回夏期學校の校長に選ばれました。爾來委員諸君に御手傳ひ申して色々盡力致すべき筈で御座いましたけれども、兎角不行屆でございまして委員諸君に御手傳ひ申すこともできませんでした。然し今日迄に、是れ丈けの運びに至りましたのは、段々委員諸君の申さるゝ如く委員諸君の御骨折と皆さんの御賛成下されしことが與つて大いに力あることゝ存じます。私は何もせずに此の校長の榮譽を帶びて、今日此の開校式に臨みますることは誠に過分の幸でございます。委員諸君を始め皆さんに深く謝しまする次第でございます。次に私が皆さんに申上げ度いと思ふことは、大いに夏期校長の爲に祝意を表すべきことで御座います。私共此の基督教を信じまする者共は、今日日本にありまして未だ甚だ盛んなるものでございませぬ、强大なる力を備へて居る者でもございませぬ。併しながら既に此の日本の社會にあつて一種の原動力となつて居るものでございます。今日迄の現狀を顯はしたる其の前から、既に早や幾分か日本國の建設に就いて成功して居るものと存じます。只今一々之を數ふる遑はございませぬけれども、今日迄日本國の有益なる新事

業にして基督教徒が社會に先立つて口を開きましたことは尠からぬことでございます。此の夏期學校は其の一でございます。皆さん御存じの如く昨年以來諸所に夏期講習會或は夏期學校といふ樣な者が或は宗教家に或は學術家に或は教育家によつて起つて參りました。畢竟之は誰が始めましたか、日本の基督教徒が夏期學校を發明したとは申しませぬけれども、之を日本に始めて開きました者は內外の基督教徒の企から起つたものでございます。此の夏期學校は日本に一番古い夏期學校で既に第四回の今日に至りましたることは私共深く賀すべき祝すべきことでございます。又此の學校の爲に祝すべきことは、元來此の日本に於きましては凡て政府の干涉を受け政府の世話を受けて物を始め物を維持することは致しますけれども、民間の有志者が物を始め物を維持するといふことは甚だ難いのでございます。長い間厄介主義で厄介になつた習慣が離れませぬ。どうも自分で始めて維持することは甚だ下手でございます。故に此の夏期學校に於きましても、昨年頃は大いに懸念がございまして種々に心配しましたことでございます。何うだらう、何う云ふことにしまするかと云ふことを心配致しました。併し昨年は無難に——無難と云ふよりは寧ろ世間の人の懸念したよりも餘程立派に出來ましたのでございます。今年も亦懸念の一でございます。併し今日は兎も角も此の開校式を見ることになりました。之に依て日本人殊に基督教徒又其の中の青年者が今迄此の國に於て習慣に乏しい一の新事業を起すことが出來維持することが出來ると云ふ經驗を持ちました。此の實際の成功によつて私共は之を證據立てることが出來る樣になりましたのは、實に我々は之を國家の爲に祝し、此の夏期學校の爲に祝し、基督教社會のために大いに祝すべきものであると存じます。此の成功を與へられたる神に、深く感謝致します。私共は斯く目出度い間に於て此の夏期學校を箱根の驛に開くことを得ました。そこで私は聊か諸君の御注意を願ひ度い。私共は今日から十二日の間此處に學校を續けまして、其の間私共は朝に夕に我々の目に觸れ我々の心に考ふべきことは澤山にございませう。第一に私は最も著しい幾つの事を皆さんに御注意ねがひたい。私共は今からして、度々此の富士山を眺めるのでございませう。又毎日々々此の湖水に對して淸らかなる鏡の如き水を鑒るでございませう。私共の只今居ります此の場所は、關東關西の界になつて居りまして、即ち箱根關所のあつた所でございます。人間には喰べる時もあり眠る時もある、働く時もあれば又其他に休む時もございます。世の人は此の眠る時と働く時と喰べる時とを取除いて、どうか長く休み度いと思ひ貪つて居ります。私共も亦其の休む時の欲しくないことはございませぬ。併し私共は唯休むと云ふばかりでは足りませぬ。私共の休む時の中には今一つの深いわけがございます。我々は自身只安んじて居る許りでなく、我々は神の御前に安んずるといふことを認めることでございます。神に祈禱を爲すといふ時が私共に必要でございます、神の事を考へると云ふことが私共に必要でございます。是は私共の休の中最も大切なる休みの仕方でございます。此の夏の時期に方りまして、夏期學校といふものは又特別に一年の間に私が一種の休みとして用ゐる

時があると存じます。私共此所に於て休むために參りました。一同休むために參りました。さうして此の休む間に毎日々々富士山に對し、此の湖水に對し關東關西の界なる土地を蹈んで居ります。諸君は明朝にも此の雲の端から富士山を御眺めなさる時、必ず大いに御心を娯ましむるでございませう。併し何故でございますか。富士山は甚だ高きが故でございますか。勿論さうではございませう。富士山は高く秀でゝ居りますから甚だ貴むべきものでございます。併し今一つのことがございませう。唯だ高く秀でゝ居る許りでなく、他の山より尙ほ立派である、即ち此の山の形は本當に完美なるものと言つて宜い。誠に善く釣合がとれて居ります。所謂シメトリカルで釣合が宜しい。山の形としては先づ完美なる形である。私共は此の富士山を見て尤も心を悅ばしむるものなりと思ひます所は、山の大いなる許りではない、又高い許りでもない、潔い許りでもない、箇々のどうも完美なる如何にも釣合が宜しいと云ふ所にある。夫で人の目を悅ばしめ人の心を娯ましむる所のものがある。私共は完美を求むる者でございます。私共が進んで行くべき所は完全でございます。我々の手本となすべきものは完全といふ完いものでございます。私共は今は完全でございませぬ。完美なるものではない。併し乍ら人間は完全を目的とし理想として進むものでございます。願くは諸君、富士山に對して此の高く秀でたる完美の山を見る時に常に我々は完全なる理想に進んで行くてふことを御考へなさつて下さる樣に願ひたい。私共は此の完全なる富士山を己の手本として見る。又私共は少しく顏を伏向けまするならば、玲瓏鏡の如く淨かなる、少しも汚るゝ所のない湖水に對して居る。此の湖水は又完美なる富士を水面に映して私共に見せます。何卒此の玲瓏鏡の如く淨かなる湖水に向つて我共の心を映して御覽なさい。御同樣の心を映して御覽なさい。富士山が映つて居る、その完美なる富士山と私共の心とを此の湖水とに映して御覽なさい。諸君、必ずや大いに得る所があるでございませう。大いに悟る所がございませう。又大いに勵み、大いに省る所があらうと存じまする。斯く己の理想を完全の方に向け己の心を淨かなる鏡に映じて省みまする。或時には此の關西關東の堺に立つて此の日本國を瞰下して見たならば如何でございませう。我が同胞兄弟の有樣を瞰下したならば如何でございませう。先に田川君が期せずして約束をしたる如く日本の狀態を申上げてあります。此の日本の狀態を見る時には我々の責任の大いなることを知りませう。我々の如く神の惠を感じ神の恩に感化することを知つて居ります者は、今此の日本の狀態を見まする時には決して平氣で過すことは出來ぬと存じまする。實に私共は今日は歡樂の時にあるか否かを疑はなければならない。悲愴慷慨の情は轉々胸に充ちて居ります。我々は小さい團體でございます。併しながら諸君、私共の任は甚だ重いのである。神は我々を護り給ひ我々を導いて此の如き機會を與へ、此の如き好地位を與へ、我々を訓へ給ふことを記憶しなければなりませぬ。願くは諸君、我々が只今見て居る所の山水、我々が蹈んで居る所の此の地に就いて深く思を凝らさるゝことを希望いたします。

終りに附加して申上たいことは、此の明媚なる山水に對して私共唯だ此の山水を見ることを致しませんで、此の山水を讀む事を致したいものでございます。世には山水を畫く人もございます。山水を見る人もございます。又山を堀り水を煮て唯だ經濟社會の用となす人もございます。或は此の山を解剖し水を分析して唯だ化學的の用に供する人もございます。私共はどうか此の山水を一種の書物として之を讀みたいものでございます。之を一種の天啓として讀みたいものでございます。先輩も申しました。『我々には二冊の聖書がある、二種の天啓がある。一種は即ち聖靈に示されて居る人達の手に成つた聖書、是は預言者の手に成つた聖書である。他の一種は即ち神の手で自ら天地間の法則に依つて御築きなされたる所の山水である』と。私共は只今聖靈に依つて預言者の手に成りましたる所の聖書も持つて居ります。併し今又私共直接に明媚なる山水に接して居る。唯見る許りでなく此の山水の文字の裏にある所のものを讀みたいものでございます。此の山水の奥にある所の山水の主人も知りたいものであります。啻に知る許りではございませぬ。山水の主人となり基となつて居る所の神に交りたいものでございます。神に仕へ度いものでございます。願くは諸君、此の箱根の夏期學校は僅かに十日内外の時間ではございますけれども、何卒諸君が此の山水の裏に在し給ふ所の神に交り神に仕へ奉りて、十分に聖靈の感化を被ることを得るように御勉めあんことを偏に希望致します。今開會の祈禱は實に適切なるものでございます。湯淺先生の御希望は實に此の夏期學校の希望であるべきものでございます。願くは私共平生教會におきまして或は日曜學校におきまして學びましたる所の其の教を、今日は此の山上に移しまして直接に神に交ることを致したいものでございます。耶蘇基督が山に入つて御禱りをなされたことを記憶し、預言者モーセがシナイ山に上つて神の御諚を受けたことを思ひまして、我々も世塵を遠ざかつて箱根の明媚なる山水の間に居つて親しく神に交り親しく神に事へ、大いなる感化を被ることを致したいものでございます。

御心得までに尚ほ副へて申します。過日プロフェッソル・ラッドが申されました。『私は出來る丈け此の教に就て色々の研究を語りませう。殊に聖書の事に就てはよく青年の助けになることを務めませう。併し乍ら私はそれ許りでは何うも滿足しませぬ。講義の外に屢々規則立たない本當の談話會を開きたい。さうして私共の信仰の經驗をも語りたい』。斯う云ふことを申されて居ります。流石先生だけあると存じます。どうか皆さんも此の夏期學校の間に、諸先生から種々學術上からして信仰の助けを得なざる許りでなく、又そのやうな先生の信仰上の實地の經驗をも御聽きなさいまして、皆さんも亦實地のことを深く御考へなさいまして、何うぞこの十日許りの間に大いなる靈の賜物を御受けなさるやうに希望致します。十日の間に諸君が苦心して學問をなさいましたつても、どれ程の學問が出來ますか。若し諸君が其の他に得る所のものがございませぬならば、私は餘り貴いことではございませぬと存じます。併ながら十日の間にさう云ふ實驗上のことに就て深く考へ、又實際に神に事へ靈の感化を受く

ることを御勤めなさいましたならば、十日は決して短い日ではございませぬ。實に是は長い日でございます。十日の間に本當に此の事が出來ますれば、私は十分な力を得ることが出來るでせうと信じます。願くは諸君、此の所に深く御注意あらんことを希望致します。

終りに一言御勸め申しますが、何卒諸君は、此の夏期學校の間に或は公けに或は私かに此の神に禱りをなさるといふことに十分力を御盡しなさる樣に願ひ度い。此の場所は定めの集會の外は何時でも何方でも御使ひなさることが出來ます。その集會の外は諸君御銘々に、或は此方の隅に銘々の御集會をなされ、彼方の隅には祈禱會をなさると云ふ樣に、銘々の御信仰に利益ある樣に御使ひなされたい。必ずしも此の場所に限つたことではございませぬ。或は御銘々の宿に小さい集會を御開きなされ、或は何れかの森の木蔭に集會を開く、皆然るべき事と存じます。併し唯だ共同一致の運動は私共の信仰の爲に大いに必要なことでございますから、きまつた時間には、どうぞ何方も缺けなく此の所に御集りなさることを希望致します。其の他の時間をもちましては、御銘々の信仰に利益のある樣に、又銘々に經驗の心の增長する樣に、時を利用し場所を利用して御盡力なさることを御勸め申すのでございます。

私は誠に殘念なることも申上げなければなりませぬ。私の敎會は丁度此の十四日からして年會を開きまして、夫れが爲に私は今日から續いて此の所に始終居つて、皆さんと共に信仰の養ひをしようと云ふことが出來ませぬのでございます。誠に殘念でございますが今日はこれから御免を被りまして、今四五日間に年會を濟ませまして又再び皆さんと御招伴をするために參る積りでございます。どうぞ皆さんが諸先生と共に委員の方々と共に、皆さんの御信仰の爲になる樣に此の信者の御集會を御開きに相成りまして、夏期學校の目的も遂げらるゝ樣に偏に希望致します。願くは神の御惠み、常に諸君と共にあらんことを。（明治二十五年七月箱根にて、演說筆記）

聖餐式說敎

子供が親の懷に在つて育てられまして他人と親の面を見別けまする時分から、其の聲を聞き別けまする時分から、毎日々々子供の樣子を見て居りますのに、日々夜々母を愛し慕ふ心の增して居ることを見ます。又父親や又は兄弟と段々交際が始りまして、之を愛し之を慕ふことの日々夜々に進歩致すことを見まする。併しながら未だ此の乳汁を慕ひ、旨い物を慕ひ、保母を慕うて之を愛して居ります間は、之を眞の孝行の心と名づけることは出來まいと存じます。未だ夫れ迄發達をして居らぬと思ひます。併し此の子供が三年にして父母の懷を離れ段々歩行むことも出來る、話すことも出來る、色々の境界を通りまして一人前の人になりました時には、初めて親の恩と云ふものを覺えまする。その時始めて本當に一の圓滿なる孝行の心といふものが起つて參ります。始の間は只親を慕ふと云ふばかり、

交際上から親を慕ひ親の愛に動かされて親を愛して居ります間には、親に從ふことは隨分窮屈なことでございます。親に誡められ親の威勢に依つて支配せられ、或は其の他の敎に依つて支配せられて親に從ひ居りますのは、幾何か束縛を免れませぬ。併し乍ら子供が一度親の恩を感じ親の恩を知りました以上は、自分よりも力の强い、自分よりも年の多い、自分よりも智識の進んだ親に支配せられました時とは違ひまして、今度は我が手を引いて歩まねばならぬ樣になつて、少しも老いの親を恐るゝ所もない、又其の親に誡められるゝこともない、親の世話になると云ふこともないけれども、親の恩に感ずると云ふ一つの心がある。此時は最早自由にして親に束縛を受くることなく、道德心の自由を得まして心から親を愛し心から親に從ひ、今は却つて自分は親の導者となり、親の守者となり少しも外からさせらるゝことなく只恩に感じて、涙を以て悅んで親の爲に力を盡します。是に至つて始めて孝行の心が圓滿になつたと申せませう。又主人を取れる家來たる者が、臣下たる者が主人の手下に附いて功名富貴を求むるといふ心から主人に事へる、或は兵馬の間に名を惜むと云ふ所から力を盡して居る、斯の如き者は決して之を忠臣といふことは出來ますまい。此の樣なる者は例令功名をなしましても、武功を立てましても、未だ忠臣と稱ふるに足らない。併し此の家來が一旦己の主君の恩と云ふものに感じ、主君の知遇に感じ、人は己を知る者の爲に死するで、己を知ると云ふことを以て一つの恩と思ふ時に至りましては、最早己の私慾己の私情を捨てゝ眞心から主君の君に生命を捨てることが出來ませう。是に至つて始めて忠臣の忠が圓滿に發達致したものでございます。我々が神の御恩惠を蒙り神の御道を信じ神に事へ奉ると云ふ時にも、亦斯の如くでございます。私共が人間の人間たる本分を知り、己の罪を悔いどうか人の人たる務を盡して人間の分限を全う致したい、神の御德を藉りて立派な者になりたいといふことは、是は人間に取つてあるべき心、又幸ひなる心でございます。けれども未だそれのみを以て私共本當の神の御子たり神の僕たるの心を全うしたるものではございませぬ。玆にパウロは『汝等恩惠に感ずべし』と敎へました。神の恩惠に感ずると云ふ事に至つて、始めて私共が神に本當に事へることが出來るでございませう。私共イエス・キリストの御敎を聞かない先でも、或人は天に在る神の榮光を見ることがあります。又自然の廣大なるを見て此の自然の中には大いなる有力者があると云ふことを尋ね出した人があると云ふのも不思議ではございますまい。自然の宇宙の美麗なることを見ても、神には圓滿の美德のあることを知り、之を學びたいと慕ふのも、亦不思議ではございますまい。併し私共は其の心を以て、我々が基督信徒たるの本當の務を全うするものと思へませうか。我々が此のキリストに依つて顯はされたる敎の信仰と申せませうか。否、何方も御承諾はなさいますまい。私共には尙別に深い、尙眞率なる、尙味ひの宜い者がなくてはならないと思ひます。即ち我等は神の恩寵に感じ神の恩惠に感ずると云ふ事でございます。抑もキリストの敎は愛を以て圓滿の德と致します。併し此の愛と云ふもの、基督信徒の神に對する愛と云ふものを分析して御覽な

さい。私共が未だ神を愛せざる先に神は我々を愛し給ひ、我々が神を尋ぬることを知らざる先に神は我々を尋ね、其の獨子を降して先づ我々を愛し給うた故に、我々が神を愛すると云ふことが始めて起つて來ます。されば此のキリストの信徒の愛と云ふものは、獨立の發達でなくして神より享けたるものを以て神に返し奉るのであります。どうしても基督信徒の神に對する愛と云ふものには、感謝する念を離れては愛と云ふものはございますまい。『汝等恩惠に感ずべし』、私は此の神の恩に感ずると云ふことゝ此の感情を以て私共が私共の總ての力を神の方に向けて神の御供を仕ることは最も貴い又最も無難なる事であると思ひます。神樣の與へられましたる力を持ちまして私共神の廣大なる御德を慕ふ時に、茲に尙ほ危ないことがございます。我々は神の高尙なる御德を慕うてどうかキリストのやうな高尙なる思想を持ちたいと云ふ時に、尙其所に誘惑が起つて參ります。私は屢々自ら之を實驗致します。私はどうぞキリストの如く潔い心を持ちたい、さういふ高い氣性を持ちたいと思うて、頻りにキリストを眺めて居ります。只斯うありたいと云ふは餘程高尙であるけれども、矢張り私に於ては一の私情でございます。何時の間にか茲に私を誑す者が出て參ります。此の心が深くなる時には何時か高慢の氣が起つて來る。或は恒に神に依賴することを忘れて仕舞ふ。不時に誘惑が起つて參ります。此の高尙なるキリストを目的としてさへ己が心情を動かして危ないことがあります。併し既に神の御前に於て神の恩を感ずるやうになります時には、決して誘惑を受けることはございませぬ。神の恩に感じて神の前に働いて居ります時には、決して傲慢の心が起ることはない。四面に起る所の事情に勝たるゝことはない。私共は實に献身の德を以て本當に神に習ひ神を學ぶことが出來ると思ひます。相當に己の品性を磨いて行くことは、私共朝夕務めねばならぬことであります。併しキリストを模範として己の品性を磨く間に、常に私共は誘惑のあることを思はなければなりませぬ。私はどうも宇宙の間何れの處にか誘惑なからんと云ふことを常に思ひます。併し私共の經驗は既に天國の路に於てある。併し又何れの處にか誘惑なからん。若し私共が少しく油斷を致しますならば、私共の心は高尙であればある丈けに誘惑があり、卑屈ならば卑屈丈けに誘惑が起つて參ります。併し乍ら我等が神に感謝し天の神の恩惠に感じて居ります時には、何の誘惑が我に勝ちませうや。決して是に勝たるゝものではないと信じます。私共神の恩惠に感ずると思ひましたならば、之に續いて起る念は何らいふ念でありませうか。誰でも人は他人の恩に感ずると云ふ考への下には、必ず之に報いたいと云ふ心が起りませう。恩に感ずるものは必ず恩に報いたいものであります。『士は己を知る者の爲に死す』てふことは、つまり其の知己に報いたいと云ふ情から生ずることであります。私共が今神の恩化に報いたい、どうして報いませうか。何を以て神の前に献げまするか。此の高大なる御恩惠、之を作り之を高くして續々キリストの前に連れ來り、キリストの御愛心を注ぎ給うて、今罪を悔改めて僕となつて以來屢々倒れ屢々躓き神の聖意を惱まし、キリストの御名を汚すに拘らず、尙ほ私共を恒に導き、恒に守つて下

さる。斯の如く今日の如き時に會はせ給ふ神の御恩惠を思ひますならば、いかでか我々は一片報恩の志を起さないことが御座いませうや。嗚呼諸君、私は諸君と共に、我が青年の過去の歴史を考へますならば、實に神の御恩惠が充ちて居ります。今若しキリストの御名の下に居ないならば、何れ程惡いことをしたかも知れません犯したか知れませぬ。若しキリストの御名の下に居ないならば、何れ程惡いことをしたかも知れませぬ。何年何月何日何處に於て我は斯樣な罪に陷るべきをキリストに示されて、其のことを記憶して神の恩惠を覺えて、其の誘惑に勝つた。又何年何月何處に於て何のやうな失敗をしましたけれども、神は尙ほ我を勵まして今日に至ることを得せしめ給ひ、或は身代の危きこと、或は道德の失敗、其の他の事から幾多の恩惠を蒙り今日あることを得、實に私は報恩の志を起して何うぞ神に報いたい、キリストに報いたいと思ひますが、どうして報いませう。何を以て報いませうか。思ふに私には自分のものは一つも御座りませぬ。神に献げたいと思いますけれども自分に物がない。私も少しは理義を學びましたけれども皆神の恩惠に依つて得たるもので御座います。唯だ彼の教を蒙らないで知つたものは何であるかといふならば罪であります。神に背いて獨りでやつたことは何であるかといふならば、大なる罪が殘つて居ることであります。其の他は皆神の恩惠聖靈の助けに依て致しましたもので、我々が人らしいことをしたのは皆神の恩惠に依るのであります。何を以て神に報いませうか。報ゆべきものはありませぬ。其處で私はパウロの前例に從ひ『此の身を潔き活ける供物として神に献げよ』、唯是より外にはない。此の身と靈とを神に献げる、せめては之を己の物としないで神の物であるとして神の前に献げる。神の心に此の請願を用ゐて下さることを願ふ外はありませぬ。何人も是より外には出來ない。神の恩に報ゆるには我身を献げて神に從ふと云ふ外は出來ないので御座います。兄弟姉妹、願くば今朝キリストの御前に此の賤しい人類の爲にキリストの爲し給へることは決して一席の説教に依つて語り盡すべきものではありませぬ。天の聖位を辭し此の人間の中に御出なさる事ばかりでも、實に何うも高大なる者では御座いませぬか。斯ういふ酷い人間の、斯ういふ瀆れたる人間の中に御出なさることは、恐らく十字架上に釘を打たれたときよりも尙ほ酷いことゝ思ひます。十字架に在つて御血を流し給ふことは是は私共に示し給ふ一の形で御座います。キリストが潔い聖意を以て汚穢い人間の中に居り、慈愛に富み給ふ御心を以て殘忍なる人間と共に御出なさる時は、どの樣に聖意を惱ましたことで御座いませうか。其の殘忍なる人間、汚穢い人間の仕業の結果は遂にキリストを十字架につける迄になりました。

キリストの御一生はつまり精神上、道德上、法律上、肉體上の十字架を兼ねたるもので御座います。私は今日キリストの恩惠を數へることは致しませぬ。數へるには及びませぬ。皆樣御分りでせう。どうもキリストに依て神の顯はし給ふ御恩惠を感じ平和の念を起して、此の身と靈とを神に献ぐる外はない。此處に神人一體の交りが起ります。其の身と靈とを献ぐるより外はない。此處に人と人との一

體が出來る。キリストと信徒との一體が此處に起ります。我々信者の感恩の念が深ければ、此の身を献ぐることが愈々純粹になるならば、キリストと我等は一體になるで御座いませう。愈々我々が神の聖靈の御力に依り我々が神の恩に感じ、キリストと一體になることを得るならば幸ひで御座います。私共は神の恩に感じ己の身と心を献げ、如何程献げても尙ほ足る事を知りますまい。是れ古人が常に神を讃美することを以て終身の業としたところであります。我身を献げ我靈を献げ乍ら尙ほ足らない時其の後はどう致しませうか。私共は全身を盡して神を讃美し『聖きかな、聖きかな、大いなるかな、大いなるかな神』と讃美するより外には御座いますまい。ダビデは何と申しました。『我が心既に定まれり、わが榮を以て神を崇めむ』、夫より外には仕方がない。我が榮を以て神を崇む、神より與へ給うた者を悉く献げて神を讃美致しませう。願くば我等をして一生涯の間感謝と讃美との心を以て終らしめ給へ。恩に感じて心の中に神を讃美して、尙ほパウロの讃美と感謝の念を以て、我々は今からして聖晩餐を享くることを致しませう。神の御恩惠はキリストに於て永遠に現はれて居ります。キリストの御恩惠はキリストの立て給へる聖餐に依て、永遠に之を我等に敎へ給ふので御座います。願くは諸君の心を啓いて、今日より十分に聖靈の感化を蒙り其の聖德の御助けに依つて、此の形ある聖餐式を守るやうに致したいものであります。（明治二十五年七月廿四日、箱根夏季學校にて）

雜感

過日來余が屬せる敎會の年會ありて多忙なりしが爲に、考を纏むる能はず。止むを得ず雜感を述べて之に充てんと欲す。作法正しき御馳走の後ゴモク鮓亦味なきにあらざるべし。幸ひに暫時の暇を與へよ。

第一、吾人基督信徒の日本に於ける地位

余は上中下の地位を云はず、唯基督信徒が他の日本人に於ける關係を意味するなり。吾等が四千萬の同胞中には僅々三萬許にして數ふるに足らざる程なれども、而も甚だ世に目立ち居れり。蓋し其の毛色變り其の服色異なればなり。

此に於て又他の同胞兄姉は餘り良く吾等を遇せず、吾等は彼等を以て兄姉の如く見れども彼等は吾等に親切ならず、吾等を虐待せり、此の憐れなる末子を慘待せり。吾等は　天皇陛下を奉戴し國の爲に盡すは敢て他に讓らざるに、彼等兄姉は吾等を冷遇せり。甚しきに至りては吾が基督敎主義の學校に於て他の諸學校の如く勅語を奉讀すれば、彼等は之を以て徒に外忠義を裝ひ中之に反する僞善者となして批難せんとし、益々吾等日本の末子をして辯心を生せしめんとす。此の時に當り吾等は如何なる考へを爲すべきか。吾等は恰も猶太建國の歷史に於ける十二子の如き感なきを得ず。末子ヨセフが美はしき衣服を着し無邪氣にして正直なるが爲に兄弟に嫉まれ、又正直なる性質なりしが爲に夢を語り日と月と十一の星は我を拜せり、又諸兄弟の禾束（タバ）はわが禾束を拜せり等の事を告げたりしが爲に、益

々兄弟の惡むところとなりたりしも、其の溫和なるは父の知るところにして、彼は父の愛を失はざりき。今日吾等日本の基督信徒は恰かも此のヨセフの地位に在るものなり。吾等は彼の如く多くの兄弟姉妹の爲に嫉惡せらる。而も見し夢は語らざるを得ざるなり。若し然らずんば眞に其の家族を愛するものと云ふべからず。兄姉怒るも止むを得ざるなり。此に於てか吾等の注意すべき心得を要す。若し彼等兄姉の意見にして益々行はるゝに至らば、國人は全く吾等を惡むに至らん。全體一人の弟にても家族より疎遠ならしむるは決して良きことに非ず、彼等兄姉のなすところ實に解すべからざるなり。吾等は此の際吾等の根性を曲げざる樣注意せざるべからす。如何に吾が兄姉は吾等を惡み吾等を冷遇するも、吾が家族の父なる　皇室に向ひて家族なる國家に對しては少しも根性を曲げざる樣なさゞるべからず。此等の事は神を知らざる輩にして運命を人の批評によりて定むる者にとりては、堪へ難き所なるべしと雖も、神を知り基督を知れる吾等信者にとりては忍ぶの甚だ易きもなり。若し之を忍ばずんば其の立場を失へるなり。兄姉如何に吾を嫉み吾を惡むも、吾等は斷じて之が爲に癖心を生ずべからざるなり。是れ彼等惡しき兄弟をして其の眼を開くを得せしむる唯一の方法なり。吾等は進んで大和民族の爲に正直に盡力せざるべからず。

第二、日本人物の眞相如何

人の眞相は種々あるなるべし。而も彼等が人物なりとせられ又自ら人物なりと信ぜる時の有樣如何。

余は日本屈指の少數人物をいはず一般に多くの人物につきて之をいはん。就ては余は自ら人物なりと思ひたる時のことを述べて、之を一般に推すに大抵誤りなかるべし。余が自ら人物とならんと思ひ又人物なりと思ひしは、二十歳より三十歳の間にてありき。當時に於ては少しも氣付かざりしが今より之を考ふれば、余が心中には三要素ありて存したるを見る。即ち第一不平、第二批評、第三功名心、善惡に拘らず大功を立て名譽を得むとするの心なり。余は廿五歳にして基督信者となりしを以て信仰なる一要素なきにあらざりしも、以上の三者は余が心中に强大なる要素なりしなり。余は親族兄弟朋友のなすところ皆不平にして、政府のなすところは勿論甚だ不平なりき。從つて批評を好み人の缺點に注目し、又從つて功名心は生じ來れり。諸君、若し世の人物若くは人物と信ずる人々を觀察せば、以上の三要素は必らず彼等の心に働けるを見ん。而して此の三要素をもてる人物のなすところ、單り失敗のみ。此に於てか疑ふ、此の如きは果して人物なりやと。余は今日如何にしても自ら人物なりと考ふること能はず。近來に至りては余は事をなすに甚だ畏れを抱けり。十五年前の事今より考ふれば實に怪しむべきものあり。當時にありては余は自らエラキものと思ひ非常なることをなすべしと思ひしに拘らず、失敗に失敗を重ねたるに過ぎず。蓋し以上三要素に固着したればなり。余は議論するところ善ならざるに非ず。而も其のよく用ゐられざりしは其の方法を得ざるを以てなりき。余は誤まりて彼の三要素を心中に有せしが故なり。苟くも眞人物とならんと欲するものは、此の上に更に大なる

要素を要す。吾等は彼の三要素の裏面に於て更に大いなる要素の存するを見る。即ち不平の裏には平和あり、批評の裏には寛容あり、功名の裏には義務あることなり。此の故に吾等は平和に知人を知りてよく之を容れ、義務責任を重んじて神、基督、人間の爲に盡すべきを最も大切なりとす。吾等は倫理的に吾等の方針をとり眞人物とならざるべからず。

第三、有用の人物

二三ヶ月前の『教育時論』に於て井上文部大臣の教育意見なるものを讀めり。其の中教育の大方針三點を擧ぐ。曰く第一善き人間を作ること、第二日本國民を作ること、第三時勢に相應せる有用の人物を作ること之なり。是れ余が大いに同意を表する所なり。第一第二に至りては余の考へによれば決して大中小の學校にのみなし得べきものにあらずして、吾等が建つる教會は之が爲に責任を有す。今此の點は暫らく措く。第三點は吾等が大いに考ふべき點にして、吾等も時勢に相應せる有用の人となる事に注意せざるべからず。動もすれば世人吾等を評して曰く、今日の耶蘇教徒は善良なる品行正しき人多けれども、有用の材少なしと。是れひとり吾等の罪のみにあらず、吾等世と合はざるが故に此の如き批評を受くることあるべしと雖も、亦退きて靜かに之を考ふれば、大いに注意すべきものなきにあらず。是迄教會に來れる人々は用なきの閑人多かりしなり。蓋し多忙多用の人々は來りて教會に聽くの暇時あらざりしが爲なり。而して此の閑人なるものは畢竟無用の人なりと云ふの意味なりとす。吾等は可成此の點に注目して有用の人物とならざるべからず。勿論宗教信者は品格ありて幾分の感化なしとせざるも、是のみにて滿足すべきにあらず。吾等は更に意地といふ者なかるべからず。牧師となるも教師となるも、政治家若くは商業家となるも、皆必らず職分を全うするの量なかるべからず。余は此にエソウ、ヤコブの事を思ひ起さゞるを得ず。ヤコブは惡しきものにして、エソウは善良なるものなりしが、之と共にエソウはお人よしにして唯獵をなして食し、食なき時は弟に向ひて頭を下ぐるを厭はざるが如き者にして、不生產的の人物にてありき。ヤコブは之に反して父を欺き兄の產を奪ひ伯父を馬鹿にして自己のみ羊を繁殖せしめしことなどありしも、彼は生產的の人物にして意地あるものなりき。彼が一度改悔するや有用の材を有するものにして、遂にイスラエル民族の祖先となれり。今日日本に於ては、此のヤコブを要求す。或人熊澤丁介に問うて曰く、『知りて惡を爲すと知らずして之をなすと、何れが善き』と。丁介之に答ふるに前者の後者に優るを以てして曰く、『惡を知る者は遂に其の惡を捨つるの時あり、惡をさへ知らざるの輩は之を如何すべき』と。蓋し惡を爲す者惡を知れば後必らず善を知て之をなすあるべきを以てなり。罪あるは人間なる所以なり。人間は罪を知りて罪を犯す故に又罪を改むるの時あり。獸類に至りては罪を知らず、故に又罪を改むるの時あらず。罪惡を知らざるものは獸と異るなきなり。吾等はお人よしにて進むのみにあらず、意地ある生產的の人物とならざるべからず。不生產的の人多きは日本の憂なり。吾等は遊民視せらるゝを耻づ。

第四、直接傳道に從事する人、反せんとする人々に一言す

通常の基督信者は自ら品格を培養し基督に從つて道を歩めば、先づ一人前の信者たる價値を失はず。然るに吾等傳道に從事する者に到りては、唯に此の如くなるに止らず、基督を人の前に示し顯はさゞるべからず。基督の大なる光、其の人物を人に顯はさゞるべからず。是れ吾等傳道事業に從ふ者の爲すべきところなり。然るに吾等は敎へずして戰ふとの誹りを免れ得るか。人は耳なしと吾等はいへども、吾人は果して眞に基督を人の前に示しつゝあるか。之を思ふ寧ろ恐なきを得んや。基督の淸高恩惠を人に示さずして人に耳なしと云ふ無理ならざるを得んや。今日諸方の敎會に、演說說敎なしとせず。而も多くの人々は之を解するに苦しめり。殊に基督の事に關しては甚だ解せざるが如し。基督は世界の人物なり。其の正義其の恩惠程人を導き人を降參せしむべきものなし、然るに此の事につき人に解せられず、人に容れられず、吾等は如何にして之を傳ふべきか。是れ實に大切なる問題なりとす。余は自ら足らざるを思ひて未だ得ず。而も充分考察すべき問題なり。吾等は如何に雄辯なる有神論哲學論を爲すも、基督の愛と義とを示し、人々の心に彼を宿らしむること能はずんば、何の益かあらんや。如何にせば基督を眞に人に解せしむるか、是れ一の問題なりとす。

第五、救は神より來る

神學的に云ふに非ず、余は余が實際に感じたる處を述ぶるのみ。過る日曜日余は青山英和學校に於て吾が敎會の年會に會せる人々と共に愛餐の宴に侍べりしが、余は其の暫らく以前に會堂に在りて聖書を繙き、此所彼所を見居たりしが『全かるべし』てふ一句に當れり。余は平素此の句を知らざりしにはあらざるも、此の時は余に非常の感動を與へたり。之によりて余は自ら足らざるを思ひ畏れを抱きて、思はず俯して首を上ぐる能はざりき。心にて己が顏色如何にと思ふに憂ひと畏れに覆はれたるが如く感じ、暫時煩悶の後忽然と一道の光明心裡に射込めり。首を擧げて己を見ず、唯基督を見たりと思へり。自己は實に見苦しき顏色なるに拘はらず基督は輝ける顏色を以て余に同情を表はし給へり。彼は吾なる罪人汚れたる者をも待ち給へるを思ひて、余は大いなる喜びを得たり。自己の足らざるを忘れて基督の愛を深く感せり。此より後余は全く救の神より來りて人間の自ら得る所にあらざるを感せり。余は今神の惠によりて、喜び勇みて進むを得。又得ると思ひ圓滿なる發達をなさんと期し居れり。吾等は七ッの燈の下に立つ基督のみを見ずして、ステパノが石にて打たるゝの時天より望み給ひし基督の御顏を常に拜せんことを望む。（明治二十六年、須磨の夏期學校にて）

更生の話

東都を出でゝより、自己の必要から種々更生に關して考ふる所ありき。願くは一層深く悟り易く手近に分明なる談話をせんと欲したりしが、考へ未だ熟せず、充分聖書より引照し組織を立てゝ述ぶる事

能はざれば、可成平易なる方法によりてお話致さん。

更生は基督教重大なる教理にて、他の眞理の如く神學者にのみ任かする能はず。吾人銘々適當なる實驗を要する者也。吾人の實驗未だ乏しくして、心中滿足したるが如く明かに己れの考へを書き出だすこと能はざるは遺憾なり。今是にヨハネ傳第三章を朗讀せん。（本文省略）

世の中に不思議なる珍らしき語多し。然れども最も珍らしきは死者蘇生と、生きたる者の更生なり。之れ吾人の實驗する能はざる者、實に世の中に此くも不思議なるものなかるべし。凡ての宗教には隨分此くの如き話あり。佛教の如きも此れと同樣の考へを有し、輪廻說を說き、靈魂は生れ代り種々交代するものなりといひ、彼等は之を教へ又之を信ず。基督教に於ても此の奇談を有す。而してこれ奇なるが如しと雖も、而かも他の宗教に有するよりも大いに卓越する者なるを見る。此の二奇談は福音的基督教に最も必要なる所にして、此の二點を基督教より去れば基督教は甚だ憐むべきものとならん是れを以てパウロは熱勢を以て之を說けり。吾人聖書を讀みて基督がニコデモの如き學者に向ひ、親切に靜寂なる所に熱心反覆說明せしことを見れば、是れ深く味ふべき所なり。此の信仰は基督教會の柱石となり居るものにして、若し之を去らば、基督教會も通常倫理道德を含有する只一の高尙なる教と云ふに止る。然れども此の事は事實として基督教會及び信徒の中にあり。基督の教ふる佛教の中に說く所よりも高尙なり。若し基督ニコデモに向ひて輪廻(Transmigration)を說きたりしならんには、彼或は之を了解したりしならん、然るに基督は現在其所にあるニコデモに向ひて、『人新たに生れずば天國を見る能はず』といへり。流石の法律學者ニコデモも此の新らしき教に躓き、『人早や老いぬれば如何にして更生するを得んや』と言へり。

更生は靈に屬する者なれども、宗教上の秘密として置かれたるに非ず。凡ての人々の爲さゞる可からざるものとして置かれたり。萬國の人民を救濟するは神の目的なり。されば萬民が悉く更生を實驗するを要するは故なきにあらず。更生の必要なる理由多しと雖も、今單に最も手近き者一を擧げん。

更生は神の子と唱へらるゝに甚だ必要なるなり。吾人は約束によりて神の子となるとは信じ且つ行ひつゝある所なり。然れども吾人の神の子となるは神の嫡子を主とし姉たり妹たり兄たり弟たりと云ふのみならば、神の子とは甚だ薄き意味なり。變化し易き人性の常として何時神の思惠より落つるやも知られざる也。是を以て若し吾人眞に神の子たらんと欲する者は、吾人の性質が神の血統を受け全く性質に於て變化せずば不可也。若し吾人性質上に於て父子の關係を有するに至らば、如何にしても離す可からざる所、吾人此に至つて始めて圓滿なる者となるべし。

基督曰く『肉に依りて生るゝものは肉なり、靈によりて生るゝものは靈なり』と。吾人は靈の血統を受けざる可からず。其の所謂神の國に入ることは天父に似たる性質を有したるものに非ずんば決して能はざるなり。假りに入りたりとするも樂しむ事能はざるなり。此の事たるや世俗の事に依つても之

を知るを得べし。父母の膝下に樂むは父母に似たる性質ある者のみとす。聖書に神を父なる語にて顯はすは蓋し深意のあるなり。甚だ好き例なりと謂つ可し。父を有するものは神の大切なる部分の幾分を悟りたるのなりと謂ふ可し。基督教は吾人が子と稱せらるゝに至つて、其の進歩の高點に達するものといふも可なり。此の子供なる實體を作るには新に生るゝことなかる可からず。

何故に基督は大いに變化す可し或は革新す可し、又は改良す可しと言はずして生れ變るべしと言ひ給ひしやと云ふに之は何處迄も父子の關係を斷たざらんが爲なり。抑も此の生れ變ると云ふは古きは消失して新らしきものゝ生出したるに非ず。古きものゝ新たに新らしく變ずるに在り。又古き材料を毀ちて新らしき物の生ずる物質的の思想にも非ず。生存し居るものゝ新しく生るゝことにして、其の味たるや甚だ深きものあり。只余の之を明かに云ふ能はざるを憾むのみ。又吾人は決して次の如き思想を忘却す可からず。既に生るゝと言ふ、決して自己自身にて生るゝ能はず。必ず我を生むと言ふ者のあることは確實なり。此の者たるや、自己よりも高尚なるものならざる可からず。基督も『新たに生れずば天國に入る能はず』、即ち進歩することなしと言ひ給へり。永遠の生命とは細長きと云ふに非ずして、圓滿なる德を意味するなり。故に神の恩寵の下に圓滿なる生活を得んが爲には生れ變るといふ大變化を經過せざる可からず。實際に立ち歸ればパウロの言基督の言及び各豫言者の言は千百世の後千百世と古と雖も、よく適當するものなる事を見る。『靈によりて生るゝ者は靈なり、肉によりて生るゝものは肉なりといふの言、吾人若し公平なる眼光を以て觀察すれば、其の意を明かにするを得るなり。ニコデモ曰く『人早や老いぬれば如何でか再び母の腹に入る事を得んや』と。此の思想たるや、實に小兒の如しと雖も、基督教に通せざるものは學者才子と雖も決して更生の理を了解するを得ざるなり。夫れ靈の事靈に非ざれば了解する事能はず。故に吾人は幾分か了解することを得るも、彼れは了解すること能はざるなり。我も人なり、彼亦人なり、神は凡て萬人に天國に入るを許せり。然れども吾人人類は靈の國を見るの眼なき者多し。パウロの『肉につくものは肉のことを思ふ』云々の誤なきを知るに足る可し。

エゼキエルの豫言書に曰く、『我は汝の石の心を取りて肉の心を與ふ』と。之れ肉に死して靈に生く可き必要を示せる者也。退いて考ふるに、吾人は此の經驗ありや無しや。若し之れなくんば益なき者なり社會の人は之を經驗に依らずして說明にのみ爲さんとする者多し。然れども如何に巧妙に說明を爲すも、實際何の益する事も無かるべし。基督教信徒中には之に就いて大いに談る者無きに非ず。試に思へ、吾人は生理學上に於て生命の何たるかを說明する能はず、況や永生解剖をや。斯く說明する能はざるを以て本文を曲解し、此は單に思想の一變化として輕々に看過し淺薄に說明せんと欲するに過ぎず。乍併斯の如くせば基督教中の深奥なる實驗的の柱を切り倒したると異るなし。例之ば吾人は未來の審判を始め其の他種々の教理を信ずるも、此の更生を深く實驗せずば神の光を見るを得ざるなり。

然らざれば所謂たゞ神學的又は信條的の信者にして、基督の所謂子に非ざるなり。例令ひ子と謂ふも歩むことも起つことも出來ざる赤子の如き者なり。パウロは不完全なる人間を代表して、『己が欲する所を行はずして却つて欲せざる者を行ふ』といへり。是れ深く神の内に生長せざるが故なり。吾人は勿論弱き者なれども更生なる實驗を得ば、弱き乍ら安心して進む可きの道を有する者なり。希くは更生の證を得んことを。然らば我は更生したるものなりや否やを如何にして知るを得可きやは、正當に諸君の心中に起る可き問題なり。是れ信者中に起るものにして諸君の中には之を欲するも未だ此の經驗を得ずして苦むものある可し。又經驗あるも未だ之を心に悟らざる者もある可し。吾人は如何して更生を得るや。之を得るの道や一言以て表はすこと能はずと雖も、大略を擧ぐれば先づ次の如きを見るゝ即ち悔改めて神前に伏し正直に神を信じ之に從ふことなり。果して吾人は罪を改めたる者たるのみに非ず、神の子となることを得たるやと云ふを知るは大切なり。是れ甚だ困難なる問題にして一般に說くこと能はざる所、是れ人々の性質により事情により、色々異る經驗を有する者なれば也。更生したる者が必ず目覺し得る者なるや否やも知る可からず。人の子の生るゝ時には其の子自ら生れたるてふことを語るものにあらず。此の如く精神上に於ても、更生したる者が直ちに自ら之を知る者と限るべからず。吾等は知り難きを徒らに研究することをせず、寧ろ結果の一方より考ふるを必要とすべし。

扨て更生は時により感情の高きに由りて知ることを得ることあるべしと雖も、感情の高きが必ずしも常に更生なりと云ふべからず。基督は風の例を引きて說明して曰く『汝其の音を聞げども何れより來り、何れに去るを知らず、凡て靈によりて生るゝ者も亦斯くの如し』と。此處に注意すべきは音といふことなり。音聲は風より起る結果にして、一般の人に聞ゆる聖靈の働きも、結果によりて一般の人に知らるべき點なしとせず。此の點に付ては吾等互に談ずることを得可しと信ず。或人は更生したる時愉快を感ずといふ、或は然らん。然れども凡て人皆愉快を感ずべしとは云ふべからず。愉快なる者は多くは外面の事情に由る者にして、如何に吾等が聖靈を受くるも、若し吾人の父母の疾病國家の敗亡等の出來事に會する時は、吾人は決して愉快を感せず。且つ又聖靈を中に受くるも誘惑が常に外に絶えざるが爲に不愉快を感ずることあり。然りと雖も兎に角聖靈を受けたる者は必ず一の響ありて心中に存すると感ずるならん。即ち心中に未曾有の力を得ること之なり。例へば日本の書生にして是迄少しも神佛を尊敬せざりし者が、一朝神の前に伏して父と叫び之が爲に心身を捧げ得るの力を生ず。之れ即ち聖靈の響に非ずして何ぞや。又先には善をなすに甘心せざるものが樂んで之を爲すに至り、嘗て止むるを得ざりし酒を喜んで止め、自己の爲にのみ事を爲せし者が全く神の爲兄弟のために全身を抛つに至るは、心に響く聖靈の風の音には非ざる乎。更に他の一例を擧げんに惡癖ある人の惡癖に勝つを得るは、確かに一の勢力の結果と云ふべし。例へば米人は金を拜し、日本人は虛言を常とす。

然るに是等の人々が其の惡癖に勝ち優美に誠實なる人となならば、之れ如何なる變化ぞや。此の一事は充分聖靈の響きしと見るを得べけん。全く自身の考へを以てするも人は一時に圓滿なる者となるを得ず。必ず根となり幹となり穗となりて實を結ぶに至るなり。然れども徹頭徹尾新なる力の其の中にあるを思へば、之れ大いなる聖靈の響きに非ずして何ぞや。諸君は常々神に深く祈りて是迄なき決斷をなし得たりと考へしことあるべし。然れども其の後善を爲すの力增加せるにあらざれば、果して先に聖靈を蒙りしと思ひし者或は怪しむべきなり。吾等は聖靈を蒙るに於て必ず實驗を有せざるべからず。如何にせば聖靈によりて更生するを得べき乎。

昨日のことなりき。余は老練なる兄弟と談せり。我等は聖書を讀み祈禱し若くは沈思默考するも可なり。又必要なりと雖も只之のみでは未だ足れりとすべからず。神前に一生懸命に其の命令を奉じ實行に於て神と親密に交りをなさゞるべからず。基督曰く『我が子なるを以て冷かなる水一杯にても飲ま する者は其の報酬を失はじ』と蓋し一杯の水を與ふるの時換言すれば基督の命に從うて一小事業を忠實に行ふ時は、其の際に於て基督と親密の交りをすべきを云ふなり。大に互ひに事を共にする時程其の人と親密なるはなし。基督に現在使役せられつゝあるを覺悟せば必ずよく基督を知るを得む。然れども以上の實驗は急に得らるべき者とは定め難し。人はよく教會の義務を盡して未だ充分に基督を知らず、彼と交るを得ずと言ふ者もあらん。然れども憂ふるを止めよ、斯の如きと雖も幾度となく重ねて其の務を盡さば、必ず遂に基督と親密の交りをなすを得可し。而して是等の事は吾等が口舌にて表はし得可き者に非ず。諸君自ら實驗して知らざるべからず。信仰進歩の順序に至りてはセオドル・モノー氏自ら其の經驗を歌うて之を表はせり。余は其全文を記憶せずと雖も四節の結句各々次の如し。

第一節の結句に於て彼はいへり。"All of self, none of Thee" と是れ氏が未だ基督に兜を脫せざりし先にして、萬事萬物は己が慾の爲にして神の關係を少しも思はずとなり。第二節の結句に於ては "Some of self, some of Thee" と。之れ普通信者の有樣にして、右手には天國左手に娑婆半分半分なり。半を神に半を我にと願ひ、純正の信仰を持つ事能はざるなり。第三節結句に於ては "Less of self, more of Thee" と。之れに入れば實に美はしき者なり。所謂慷慨死に就くの類にして忠勇義烈の心充滿し私を後にし公を先にするなり。吾人信徒今日三萬の少數なりと雖も、若し此の程度に達することを得ば實に有力の者となるべし。然れども之れ未だ圓滿なる者にては非ざるなり。第四節の結句に於て "None of self, all of Thee" と。之に至りて圓滿と稱すべし、全く私意を捨てゝ神の御心を行ふことを樂しむものなり。

諸君の中に今日ゲッセマネの寫眞を購求せる方多し。余は之を見て大いに喜ぶ。余自らも亦此の書を有す。此の書を見るのは第一に基督のゲッセマネの祈りにも『父よ、若し御意にかなはゞ此の盃を我より離し給へ。然れども我が意に非ず、御意のまゝにし給へ』との語を思ひ起すべし。我等若し此の心

を以て心とし、己の意志を捨てゝ全神の御心に委するの決心非ずんば眞の神の子となれりと云ふべからず。大凡神の子たる者は萬事を神に捧げざるべからざるなり。諸君夏季學校に於て得る所甚だ多し希くは此處に養ひたるところを以て各其の事業に發表し、萬事主のために勉められんことを。

（明治二十六年、須磨夏期學校にて）

夏期學校開校演說

だん〳〵繼續委員の歡迎の辭や來校者諸君中よりの答辭により、夏期學校の性質、經歷等は已に明かなり。昨年の夏期學校の際より、早く已に校長委員等相定まり居りたるが、時に余も亦校長の榮職に擧げられたり。爾來委員諸君と俱に大いに盡さざる可らざるに甚だ怠りし罪は深く謝する所なり。余は厚く委員諸君の勞を謝す。余は委員諸君の勞に對し一切の責任を負ふべし。余は今回の夏期學校によりて委員諸君の得らるべき一切の榮譽と共に、委員諸君に對する一切の批難も亦喜んで余の頭上に蒙らんことを期す。各教會の諸兄姉が同情を以て寄附金を役せられしを謝す。特に當地明石教會は非常なる好意を以て吾人の事業を助けられしを謝す。余は凡て感謝の念を以て開校の辭を初む。

余は第一に今回夏期學校の開校せられたる此の明石の場所に付いて、大いに滿足せしものなり。明石の地たるや、古より名にしをふ須磨明石とて我が國勝地の一なり。蓋し我國は風景に富むと雖も、須磨、明石沿岸の景は更に優美なるものあり。唯大いに天景の美なるのみならず歷史上に大なる關係を有し、又文學上には別つ可らざる關係あり。然れども我等基督教徒が神を信じ知るものとして此の天景に接す、蓋し風流家輩の眼光に映ずる所とは大いに趣を異にするものあり。基督信徒は皆文學者ならずと雖も、神の御手の妙なると高尙なると淸きとを感ずるものなり。我等基督教徒にして此の明石の風景を適當に利用せずば他に誰を待つべき。吾人は神より與へられし信仰の眼を以て此の天景に接するものなり。

次に吾人は此の錦江城なる要害なる地に構へ、心靈的軍議を凝らさんとするは、余の愉快とする所なり。德川氏大いに此の地に見るあり、心を用ゐて此の城を築けり。西南の諸侯此の要地を經ずしては上東する能はざりしなり。蓋し當時の築城法によれば、此の城の如き實に堅固至れるものと云ふべきなり。基督教徒の爲すべき事は石壁にて築き上げたる城を取らんとするに非ず、人の心を執へて以て之を擒にし、我等の主人なる神の下に降服せしむるに在り。諸君は已に我黨の士官下士官の地位に在るものなり。勿論教會の牧師諸君の如きは隊長とも云ふべきなり。今玆に此の城内に集會し共に十日の間軍議を凝らし士氣を養はんと欲す。實に愉快に堪へざる所なり。聖書に曰く『山の上に建てられたる城は隱るゝ事を得ず』、此の下を通過する幾多の旅客は、誰か此の城を見ずして過ぐるものあらんや。實に吾人は天下に注視せられつゝあるものなり。

此の夏期學校は其の齡已に九歳なり。人間の年齡としては小兒時代なれども、學校としては先づ一校を三年にて卒業するとせば已に三學校を卒業したる期なり。即ち尋常小學、高等小學、中學を卒業し將に高等中學に入らんとするものなり。其の小學校に在るの時は無邪氣にして好く師の命に從ひ、アイウエオを學ぶ實に愛すべきものなり。進んで高等小學校に入るや、追々ずるくなり始末のつかぬ事あり。然れども尚ほ御し易き所あり。然し尋常中學に入るや、或は賄方反對をなし、教員辭職勸告をなし、大いに當局者及び父兄をして困却せしむる事多し。夏期學校も其の初は大いに天下に愛せられ實に無邪氣なりしなり。中途に至りては初めに手を引き導き助けし宣教師などは、却つて相反目するに至り、大いに天下の信用を失ひたり。是れ丁度尋常中學の時代たりしなり。自身は餘程進歩したるものと思ふも、他は之を尚ほ幼者として取扱ふ故、不平は遂に漏らす所なく到る處に衝突を見るに至りしなり。是れ止むを得ざる事にして、成長發達の順序として經過せざる可らざる通路なり。扨て二十前後となり高等學校に入らんとするには、學資なし、已むを得ず世人の信用を買はざる可からざるに至れり。其の品行修まるに至らば外國の先輩も内國の先進も、大いに同情を表し助けらるゝに至る次に學校の成功と目的とに就いて一言せんに、學校の目的は他に求むるを要せず、吾人が社會に對して責任と抱負とを熟想せば自ら明かなるものあり。吾人基督教徒は未だ幼稚なれども、其の責任や甚だ重し。今日の社會は盲目の社會なり、基督教徒は公平なる判斷を要す。世の當局者は得意の人なり其の地位に滿足するものなり。得意の人は公平なる見解を下すを得ず。故に彼等は戰勝後政治にも宗教にも、實業にも眼眩み居るなり。吾人は社會の有樣に就き寧ろ甚だ不滿足なるものなり。立憲政體の政治界は當局者既に腐敗し居れり。試みに新聞紙を見るに少しも信ずべきものなし。自由黨の機關新聞を見れば、大隈伯とは全く智もなき學問もなき愚物にして外交などの局に當り得べきものにあらず、而して又進歩黨の新聞紙を見れば板垣伯の如きは實に取るに足らざるものゝ如く言ひなすなり。然れども彼等に接し其の語る所を聞くに、豈に新聞社の薄給記者の如き輩の比に非ざるなり。今日の宗教界を見るに又甚だ嘆ずべきもの多し。四千萬中の大多數は天理教を信じ、狐狸を拜しをるにあらずや。

近來眞理を攻究する事大いに流行し來れり。佛教家は大いに眞理を探るも、眞理を實行するを得ざるのみならず、實行を企てざるなり。近來の學者輩は凡ての方面に眞理を攻究せんと務むるも、一として之を實行するものなし。此の點に就ては昔の漢學者に大いに劣れるものあるなり。是れ日進文明の學術の一弊害と言ふべきなり。此の弊害を矯正せんとするは基督教徒の責任なり。然るに基督教會内にても眞理の攻究甚だ盛んにして、如何にして之を實行すべきやを思ふ者少なし。近來廣く外國と交際するに當り、むやみに四海兄弟の語を喋々するも、眞理此の博愛の道を實行するものは、基督教の思想以外に決して求む可らざるなり。世界の有樣は未だ野蠻を脱する能はずと雖も、其の趨く所は四

海兄弟の眞理に在り。基督教徒にあらずんば、此の眞理を得ず。夏期學校來校者は基督教界の大隊長下士官なり。社會に先ちて憂へ社會に後れて喜ぶ豫言者の地位に立つものなり。諸君よ、祈禱の時、講演の間、片時も此の主旨を忘るべからず。之を全うせんには又之に堪ふるの士氣を養はざる可らず。吾人は永遠に籠城すべきにあらず、進攻して以て多くの敵城を攻め取るの戰略を取らざる可らず。吾人は目に餘る大多數の敵に向ひ、信仰の刄を手にし、靈の武器をつけ戰鬪の準備をなさゞる可らず。幸に今年は平岩牧師あれば大いに師の勞を乞うて心靈的修養を爲されんことを望む。聊か學校の目的成功につき心づきし所を述ぶ。（明治三十年須磨にて）

一國の更生

夏期學校は今や終りを告げんとす。閉校の式を擧ぐるは余の大いに喜ぶところなり。此の時に當り諸君に告げんと欲するところ至つて多し。今は唯其の一事を述べて止まん。

吾等は昨夜迄信仰と智識とにつきて種々なる研究考査を爲し來れり。今や各地に散じて業務につくべきの時となれり。余が此の際に敢て一言せんと欲するは、一國の更生てふこと之なり。若し一個人にして更生を要すと知らば、個人の集合體なる一國につきても亦更生によるに非ずんば、眞正の進歩を爲す能はざるを知るべし。然るに昨夜も述べたる如く、更生は今迄ありしものが生れ變るにて、又其の生るゝは自己が生るゝにあらず、生む者ありて之を生むものなり。例せば日本國にして日本人民全く去り、而して外人此に入りて日本國を組織するとせば、是れ日本國の更生にはあらず。又若し日本の事物を改革し是迄ありたるものを破り、其の同じ原料にて新組織をなすとせば、是も亦更生といふ可からず。余は此の日本が改革に止らず全く更正せんことを望む。即ち今日の吾が日本が生れ變りて新らしき生命に入らんことを望む。日本の組織を變じ其の國體を變ずるが如きは不可也。此の如きは余の斷じて欲せざるところなり。

更生は如何にして得らるべきか。之を政事家教育家若しくは經濟家に望むべきものなるかといふに決して然らず。水の其の位置より上騰する能はざるが如く、彼等も尙今日の時勢より超越すること能はざるは、廿余年の經驗に徵して知るべきなり。人は日本を進歩せりと云ふ。而も其の實唯左右に動搖せるに過ぎず、此の故に若し日本をして一大進歩をなさしめんと欲せば、是非とも他に一大勢力ありて之を導かざるべからず。即ち日本の生命を革新して全く更生せしむるもの存せざるべからず。其の更生をなさしむるものは何ぞ。佛教、儒教、哲學、理學、皆到底能くする所にあらず。此に唯一の未だ試驗せられざる勢力あり。是れ則ち基督教にして其の働きや信徒たるものが神の聖靈に感じ之によりて發するものなり。諸君は過去十數日の間に養ひ得たるところを何處に之を用ゐんと欲するか。吾等は實に之を以て日本全體の更生に勉めざるべからざるを知らずや。此の一事は實に一大名譽の事業な

り。青年男女にして若し功名の心あらば起ちてこの事業を爲せ。一國を更生せしむる此の大事業を選べ。是れ又吾等をして誤なきの道を歩ましむるものなりとす。

一個人の更生に必ず形跡あり、結果あり。然らば一國更生の結果果して如何。日本は何によりて其の更生を覺り得るか。是れ日本將來の歴史に關係するものなるが故に今に於て明言すること能はざるも昨夜余が一個人が其の欺言を斷つを以て更生の結果となし得ると云ひしが如く、日本國民が男女の關係を論ずるに經濟衞生の考へを以てせずして、倫理道德的になり、又は神の御心如何と思考するに至らば、之れ神によりて更生を得たるの形跡なりと信ずるを得べし。方今日本男女の關係には殆ど其の良心を磨滅したるが如し。之を有志者に語るも彼一笑に附し去らんとす。蓄妾のこと唯に經濟若しくは一家平和の便否を以て權衡し、廢娼の如きも衞生の一事を以て最も强き論勢を張るが如し。此故に此狀態を排して日本人民が男女の關係を論ずる時に神の御心如何と察するに至らば、實に大なる更生にして日本が新らしき赤子となりたりと謂ふべきなり。余は此の時機の速に到達せん事を望む。而も吾人にして大いに勉勵するところあらずんば此處に到達するを永遠に期す可からざるなり。

（明治二十六年七月須磨にて）

萬國學生同盟に對する所感

『我が天の父の植ゑざる者は皆拔かるべし』（マイタ傳十五〇十三）、此の聖語を玩味すれば、凡そ世に存するを得るもの必ず用ふる所ありて存するの理を含むことを信ずるなり。學生同盟は各校より組織を翼め、一國を統一して遂に天下を總統す。其の現況に於ては彼處に强くして此處に弱く、西に優にして東に稚なるの嘆を免れずと雖も、其の性質と抱負とに於ては高雅俗世に超越し、雄氣天下を呑むの概あり。焉ぞ天の寵命を蒙る者なるを疑はんや。抑天下の事日に交錯親密の度を進め、坐して萬國山河の珍を樂しむの富人あれば、臥して天下の新報を讀むの政客あり。地球の幅員頓に收縮せるを感ずるなり。故に萬國共同の事業年々其の種類を增すに至るは、事實の證する所なり。然れども仔細に之を觀れば大概各國政府の干涉又は扶植する所に係らざるものなし。顧みて宗教界に臨めば、歐米二大洲の間には稀に基督各派の大集合あれ共皆一時の者なり。萬國福音同盟の如きものあれども、結合甚だ淡薄にして見るべきものなし。故に基督教の特性として自ら萬國的なるにも係らず、教會自身の運動に於て萬國統一の姿を裝ふことは未だ曾て試みざる所なり。況や世俗的の結合同盟の如きは世界の爲に世界的の結合をなすものにあらずして、其の自國の爲に世界の結合を利用するに過ぎざるなり。是に於て學生同盟の性質及抱負に於て彌甚だ貴重雄大なるを見るなり。其の性質は徹頭徹尾天國建立の爲にして、世界の爲に世界的組織を爲したるものなり。其の支持經維する所を答へば、教權の後援あるにあらず、利黨の助勢あるにあらず、政事の干涉あるにあらず、飽までも學生的青年的にして又平民的基

督教徒的なり。此の樹や必ず天父の植ゑて以て世界の樂園に一簇の蔭を成し、生命の果實を結ばしめて以て萬靈を養ふの用に供し給ふものなるを信せざるを得ざるなり。いでや此の神聖なる同盟に對する希望を略陳して學生諸君の參考に供せん。

一、學生同盟の運動を以て學生の資格に適合せる事業心を飽かしめ其の理想を確實にせよ。

廣くは世界の十四億狹くは日本の四千餘萬人、中に在りては其の智識德力（人類の最高貴なる部分）に於て學生同盟の諸氏は閥閲なり、精粹なり、況や青壯活潑の氣に充ち功名の念鬱勃禁ずべからざるものあるに於てをや。諸氏の事業心をば宜しく天下の廣きに驅るべし。然れども學生の身を以て直ちに世界の事業を執るは不便なり。宜しく此の同盟に盡粹し世界各國同盟者と共に祈り共に學ぶべし。蓋し是れ一生の好發途なり、又空想の動もすれば己を欺くことを知らば宜しく世界的團結に身を置き世界的の交權を耕鋤して以て其の理想を事實に近からしむべし。世界は閥閲者の成學を待つこと久しく且つ急なり。宜しく大いに省みて實用有爲の素を養ふべし。

二、世界を嚮導せよ

現世紀は世界的世紀なりと稱せらる。然れ共實際に現はるゝ處は僅かに世界的爭奪萬國的驕誇宇內的貪婪、强ひて美辭を用ゐんとするも功利名勢の競爭と云はんより他に假すべきの名辭なきは似たり。此の時に當り高く天國の理想を掲げて『神の國は飲食に非ず、唯義と和と聖靈に由れる歡樂にあり』と叫びつゝ、本國兵備の强弱財力の優劣等を狹まずして、眞に一致和合の提契を爲すは、今世をして其の現想を現實にせしむるものにて、是れ實に現世界の嚮導なり。盲者或は之に從ふ事能はざるべしといへども、天下豈に盲者のみならんや。而して此の世界嚮導の一分隊たる日本學生同盟は此の大役を勤める間に不知不識我至親の同胞には特に濃厚なる感化を及ぼし、島國根性の諸事に吝なるを醫し、勢の及ぶ處は國家の航路を平滑にする事を得べし。夫れ眞正の世界思想は驕傲偏頗と併立すること能はず、猜忌短慮と駢馳することを許さず。此の四病は島國士君子の通病なり。是と共に併發する瑣惡小醜枚擧すべからず。是れ國家の進路を遮妨するものなり。之を醫せんとするに局部施術の能くすべき處にあらず。宜しく大處方を以て空氣の萬物を包圍するが如く光明の四偶を遍照するが如くなるべし。宜しく言論の外實行を以て之を表章すべし。學生諸君よ、諸君は既に同盟の船に掉せり。惠風に乘じて以て彼岸に達し一世を導き且つ一國を救ふの偉勳を奏すべし。最後に再び發端の聖語に歸りて一省を加へられよ。同盟の樹は父の植うる所なるを信ずると共に、灌漑看護の責任は吾人自らの分なる事なり。吾人の同盟樹木の生活は超然たる天意整然たる自然法にのみ委すべ樹木には有せざる責任を擔ふものなり。同盟樹木の生活は超然たる天意整然たる自然法にのみ委すべからず。其の榮古盛衰は吾人自ら任せざるべからざるなり。宜しく信じて之を謝し畏れて之を愼むべきなり。（明治三十一年）

萬國學生青年會

我れたゞ彼等の爲にのみ祈らず、彼らの教によりて我を信ずるものゝ爲にも祈るなり。此はみな一にならん爲めなり。父よ、汝われにをり、我れまた汝にをる。かくの如く彼らも我らにをりて一にならん爲、且つ世をして汝の我を遣はしゝ事を信ぜしめん爲なり。（ヨハネ傳十七〇二十、廿一）

そも萬國學生青年同盟會の立てられたる目的はと問はゞ、此の主の祈禱の中に籠れりと答へん。即ち主の民草をあげて一ならしむるに在り。我徒は既に此の事業を初めたり。主は必ずや天に在り祈り給ふなるべし。さればこそ主は十二使徒七十弟子の爲にのみならず、彼らの教によりて主を信ずるものゝ爲めにも祈ると仰せられしなれ。主われと共に在し、世界の諸民また我と共に之に當らんとす。此の會の性質こそ貴けれ。

それ青年會の起りしはさまでの昔にあらず、今日こそ政治界にも佛教界にも此の種の會合を見れ、其の基因を質さば單なる青年會ならで基督教徒青年會に溯らざるを得ず。蓋し文運の日に月に進むに際し、青年の德を建て道を修むる任をたゞさへ忙はしき教會にのみ委ねんこと物足らぬ感なきにあらずとて、この會は企てられたるもの、正さにこれ教會の別動隊なり。かくして設けられたる青年會は益々榮え、殊に米國に於ては一箇の市街、役所あり學校ある地には必ず青年會の建設あるに至れり。されば將に業を卒へんとする學生が向來とるべき職務を夢みるうちに、青年會の書記たらんこと教授牧師のつとめと共に數へらるゝなり。神田の青年會館の如きも正に義俠なるかの地の人々が本邦青年の爲よかれかしとて、かくは見事に建築せしにこそ。

青年會はかくの如く新なり。されど尙更に新なる一會の必要いたく有志の人々に感ぜられたり。これ即ち學校殊に高等學校内に青年會を設くることなりけり。こゝを以て明治廿二年のはじめ、米國よりウイシャード氏來り、こゝ青山學院にても同志社にても熊本英學校にても、數次の演說會を催して幾多の悔改者を得、歡喜に充ちてそれより支那、印度、シリヤ、濠太利亞及び歐洲の諸國を周遊し、四年にして故國にかへれり。ウイシャード氏歸來此らの青年を嚮導すべきを述べて、各青年會に宣教師を送らんとする氣運を起しぬ。人は十九世紀を宣教世紀と稱す。傳道の盛んなる古來今日の如きを見ざればなり。諸君記憶せらるゝならん、西南役のころ鎭臺兵の外に劍をうつに長じたる巡査の拔刀隊ありしを。此の隊は師團に入らず獨立の運動をなしゝなり。教會は鎭臺兵の如く、青年會は拔刀隊にも譬へつべし。かくして各學校に青年會あるのみならず、之を一にして世界中に聯絡をつけんとて、一昨年米人モット氏先づ歐洲にゆきて萬國學生青年會の基礎を定めぬ。英國中の諸會は之を英國の一に結び獨は獨に結び、而してこの諸國は更に萬國學生青年會の一大旗の下に結ばれたり。昨年六月米國に於て萬國聯合大會を開くことゝなり、我國同盟より井深梶之助君總代として之に臨みしが、有名なるムーデー氏の居村否寧ろ其の後園なるイースフイールドの女學校内に開かれたる青年大會に於て

其の端緒を開き、それより正式にウイリアムス、タウンに催し、さて其の議會にて毎年二月第二の日曜を以て福音の傳はれる隨處に於て學生基督青年會の爲に祈禱せん事を決したりし也。

主は、これみな一にならん爲なりと仰せられぬ。されど實際に於て我が徒は一なりや。我等の教會は數派に分れて一つならず。毎週の聖日は世界中の信徒は神の前に一なるべし、クリスマスにも一なるべし。されど慣れて注意も薄らぎゆくなり。然るに今日こそ我らは祈禱を一にして學生青年會の一致聯合の爲に、殊に神の御國を建て我國青年の中に世界の一致を强うせんとて、聖前に額づくべけれ。何故に祈るべきやと問ふ人もやあらん。それ學生青年會の種を蒔きたるウイシャード氏の最も希望をおきしは日本なり。こは榮譽なれども責任亦從つて輕からず。ウイシャード氏はそのかみクラーク氏が札幌農學校に教授たりし時、當時の政府が基督教を傳ふ可からずと氏に命せしをもて一度歸國せんとしたること、政府のやがて之を默許したること僅に二年許りにして、有數の信徒の同校に起りしことなどを審に聞けり。而して自ら同志社に至るや、米國にて思ひも及ばざる議論もありしに、程經て大リバイバルあり、百名ほどの悔改者を得、熊本にてもまた効を奏しき。ウイシャード氏は太く此の民をたゝへ、此の土に福音の傳へざる可からざるを說きぬ。かく稱せられたる日本にして一朝過まらんか、禍はこゝに止まらじ。

モット氏の意をとめたるも我國なり。氏英國に至るや、英の青年中々に米人の言を聞くべくも非ず。

獨にいたればこゝも亦文化を誇れるなり。しかも遂には氏に服しぬ。歐洲にていたく力を勞したる氏も一度蘇士運河をこゆれば、事の難易同一の論にあらず。印度にても支那にても萬國學生青年會は宣教師の相談さへ纏まれば大概事なりぬ。日本また然るべしと思ひしならん。然るに事豫期に反し代表者を集むるさへ難く、集めてのちも憲法論に花を咲かせて三四時間に議定すべしと見積られしものを定むるに二日を費しぬ。而して信仰箇條に至れば議論紛々氏が畢生の力もてやうやく收まりたるほどなり。氏こゝに於いて謂へらく、まこと此の土にこそ傳道せざる可らず、この六かしき所たやすく服從せざる所こそ、生氣の下に横はるを證するなれと。ウイシャード氏は成功しモット氏は難儀しつゝ共に此の土に隨一の希望をおけり。されば世界の民は我れを見るなり。日本は果していかに進むらんしかも此の國のみ勝手をいひはりて大事を破るごとき事なきやと。既に此の如し、我ら豈に祈らざるを得んや。

諸君、また此の事業の大なるを思ひて祈られよ。世界の中主の名によりて一になりをるもの果して幾何かある。主の一になれとの聖旨を服膺するは何々ぞ。いかにも傳道會社は澤山にあり、されど澤山にあるなり、一にはあらず。あゝ世界の邦家が同胞の如くならんはそも何れの日ぞ。歐洲の民之をなすか。他國は知らず亞細亞人なる余輩はしか思ふを得ず。露は旅順をとり獨は膠州を收む。悉く取りて一にするとの謂か。さはめて見物ならん。さながら小兒の喧嘩に似たり。小兒らの墻を破りて柿を

盗むや、見張するものあらん、木登りするもあらん、下にて之を拾ふもあらん。隊伍整へりと云ふべし。然も分配に至れば喧嘩なり。歐洲人士分割の際喧嘩せずんば幸なり。

福音同盟會の初週祈禱は、萬國民が主の名に頼りてなす所しかも淡泊(あつさり)したるものゝみ。赤十字社は基督教の精神に出でたれども、之を眞向に振りかざしをるにあらず。かく世界を一にしたる事業の罕なる中に、此の青年會は其の一なりとす。二年の後には伯林にて大會の催さるゝならん。面白きかな、萬國の老人は相爭へるに、青年は互ひに握手せんとす。かかる事の傳道會社によりてなされず、青年會の先鞭をつけたるもまた妙なり。既にしかり、我らの祈るは當を得たるならずや。

また思へ、この青年會は之を組織する會員各自立派なる資格を有す。これは高等學校の青年なり。中以上の教育をうけたるもの社會に出でゝ他を感化する力あるものなり。他日の人才これより出でん。

爲政家、大教師の萠芽こゝに在り。此の人々にして神に交り聖靈を受けをらんか、よしや講壇上に口を開かずとも、無言の傳道は行はれん。かくして傳道軍の別動隊は恰好なる士官を得ん。影響の及ぶ所少しとせんや。我等の祈るはまたこれが爲なり。

最後にまた此の青春の士の弱きをも省りみよ、學生とて血肉を有する人間なり。他人と同じき弱點あるのみならず、社會の好遇ある故殊に危し。高等教育を受けたる人の基督教に入り難き一原因は、社會が其の人々の道を行ふを妨ぐれはなり。いかに人々のたしなみあればとて衣服、飲食、男女の慾の如きは、何人も異ることなし。然るに自ら迷ふのみならず、他人も之を迷はす也。初は尺をまげて丈を直うする積りなるも、實は尺をも丈をも曲ぐるに終るなり。匹夫ならんには平凡の善人として安らかに送らるべき一生も、信仰のみか思想をも他人の爲に失はせらるゝこと往々にして然り。學士號を帶べる人が官吏となり會社員となつて、請負師などに身を過らせらるゝこと氣の毒の至りなり。人或はいふ、箱入娘の如くあらき風に當てられざるより然るなり。少しは蕩樂もさすがよからんと。決し、てさるものにあらず、一度惡事に指を染むればいよ〳〵惡に強くなるものなり。余の如く二十四五歳までつながれぬ馬の如くに狂ひしものは、今なほ當時の傷の痛を感ずるなり。人は無疵にをるほど樂しきはなし。かく惡魔のくらはんとする人々に對し、十分なる同情を以て祈ること公私に對する務めにあらずや。願くは兄姉、此の青年の爲にいのれ。(明治三十一年二月)

雜感

日本は發展せざるべからず。
然れども無人の地を略するの時期は既に去れり。
萬國人の歡心を得て、平和の中に利せざるべからず。智と德と共に要する也。
米國目下各州にて敗德破產の源なる飲酒を政治的に禁ずるの運動盛んなり。
日本に於てもせめて教育宗教の關係者が此の風を主張し、兒童の頭腦を救はんことを欲す。

第八編　青　年　訓

青年に對する勸め

汝の若き日に汝の造物主を憶えよ（傳道書十二一）

傳道者ソロモン王は、幼にして王位に即きたる人なり。青年にして才名世界に轟き、壯年にして富貴利達を極め其の生涯の末に至りて大いに省る所あり、傳道の書を著せり。故にソロモンは青年の困難と歡樂とに於て世に稀なる經驗をなしたる人なり。ソロモン曾て單純、潔白、謙遜なる少年なりき。父の餘光を以て王位に即きし時には、戰々兢々として其の任を盡さゞらんことを恐れたり。ソロモン曾て奢侈、驕傲、淫佚を極めたり。然れども此の世の榮華は人心を滿足せしむるに足らざるを悟りて、大いに痛悔して罪惡の勢力、罪惡の苦惱を知れり。遂ひに歌つて『空の空、空の空なるかな、凡て空なり』と言へり。天下の師たるのみならず、特に青年有爲の人の爲に師たるべき者なり。今聊かソロモンの傳道の書を根據として青年者の爲めに一言せん。

一、本を知るべき事　人は萬事に付けて自分の立場を知ること最も緊要なり。立場明かならざれば義務の取柄も定まらず。權利主張の方針も究らず、茫々たる曠野に道を失ひたるが如し。近隣朋友より

廣き世間に對して適當に應對交際をなし、無禮をせず無禮を加へられまじと思へば、己が家柄は如何なるものと尋ね、世界に漫遊して異邦に入り異人に交はり身の安全を保たんには、自分の國柄を知りて夫れ相當の用意と振舞とをなさゞるべからず。是れ其の時處位の關係する本を知る事なり。一個の人類として一生旅路を迷ふことなく危きことなく行き著く都へ安全に達せんと欲せば、人として出で來る本を知らざるべからず。其の本によりて末を尋ぬるは自然の法なり。末より溯りて本を知るも亦天法の一なれども、本と末とを切り離すこと能はざるは一なるなり。若き日は旅の初めなり、東西南北の方向は此の時第一歩にあるなり。されば人の造物主を知る事一日も早きを尊ぶなり。年長じ日高くして俄に身の岐路にあるを知るがごとき甚だ不幸の事なり。人は萬事に付き修養を要するものなれば、善惡共に若き時に始まれるものは其の慣習の力甚大なるものなり。道理を探りて神を認むることに知れるものと、其の感格の程度に於て非常の差異あるを免れず。本をば早く知り神をば若き日に憶ゆべきものなり。

二、如何にして世に處せんか　己れの本を知れる青年は平生如何なる生活を爲すべきや。世には心の勢力の一方をのみ高くし、世のあぢきなき有樣許りを考へて少年をも老年者の如くし、あらゆる人間を皆一樣の毛色に生活せしめんとするものありて、果ては世を厭ふ樣になり甚だ淋しく活氣なきものあり。吾人をして經驗に富めるソロモンに問はしめよ、彼果して何を答へんか。曰く

若きものよ、汝の若き時たのしみをなせ、汝の若き日に汝の心を喜ばしめ、汝の心の道に歩み、汝の日に見る處をなせよ。但しそのもろ〳〵の行爲のために、神汝を鞫きたまはんと知るべし。

（傳道書十一〇九）

右の敎を考ふれば、强ちに天性の快樂をば厭抑せずとも善しとなり。身體の容子により、氣分の模樣により、隨分活潑に樂しみ歡びて遊ぶは罪とはせず。寧ろ青年の常態なるべし。然はあれども人は唯情慾の活物にあらずして寧ろ理性の動物なれば、一切の言行、動作、憂苦、歡樂みな己に責任を負ふべきものなり。此の事をば努々忘るべからずとなり。此の責任の記憶は言行の要めとなりて能く萬事を中庸に導くことを得べし。此の記憶を保ちて身を省みれば、

三、青年者自らの弱點を知るべし　エホバの御言葉に曰く『人の心の計る所は幼き時よりして惡しかればなり』（創世記八〇二一）さればわが心は決してわが爲めに安全なる導師にはあらず。深く注意して誤を免るゝ事を勉めざるべからず。ヨブの書に曰く『僞善者は年少くして死亡す』（三六〇十四）又今一種の原文には『僞善者の靈は幼き時に死す』と讀めり。

此の二種の讀方を參酌して見れば、僞善者も俄然に僞善者となるにはあらずして、幼き時より惡しき根に惡しき肥料を培ひ、僞善の生命を生長せしめて天良の善性をば死なしめたりと云ふの心にして、

人の幼時人の青年期の大切なると、軟弱にして破れ易きを知らしむるなり。抑蕩々たる天下青年の時に身體と心性とを傷ひ又は自殺する者實に多し。大凡善人の壯にして猶ほ苦むものは青年の惡習慣を脱せんと勉むるに非ざるなし。青年の自ら危險の機器を抱きて世の險崖を跋渉するものなり。深く戒めざるべけんや。

四、青年は戰場なり　少年の時に畏服せる人には長年の後矢張抗し難きの勢あるは世の常慣なり。嗚呼是れ豈に人と人との上のみならんや。人と罪惡との間にも亦此の類の關係あるを見るなり。少年の時より使役せられたる惡事は主權を心性の上に振ひて、其の命令を拒み難く知りつゝ其の軛の下に罪を犯すもの多し。青年未だ畏服の程度を高うせざる中に羈束を絶ちて獨行し、却て罪惡の媒介たらんとする情慾を使役して本心の命令に從はしむべし。是れ初陣の先登なり。初陣に臆病なるものは大概終身武功を立つること難かるべし。青年の戰場に苦戰を爲すものは、壯年にして苦戰を厭はざるものとなるべし。蓋し其の苦を感ずること深からざるなり。

人わかき時に軛を負ふはよし。（哀歌三〇廿七）

汝幼き時は慾を避けて義と信と愛とを追ひ求め、又清き心にて主を呼ぶものと和ぐことを追ひ求むべし。（テモテ後書二〇廿三）

熟々吾人の性質習慣と周圍の勢力、即ち風俗、政事、法律等を察すれば、今の青年は新しき家屋を建造するの易きを爲すものにあらずして、大厦の既に傾きて將さに倒れんとするものを支へ、且つ之を元位に復せしめんとするものゝ如し。文人は云ふ、狂瀾を既に倒るゝに回らすと。吾人果して之を爲し得べきや、否やを知らず。然れども吾人青年の德性を建立して完全の社會を築かんことは決して絶望すること能はず。是れは個人の心にあらずして宇宙の心なり、億兆綜合の望みなり。

それ受造物の深き望は神の子たちの顯はれんことを俟てるなり。（ローマ書八〇十九）

扨て青年德育の方法に就き、嘉言美辭を求めば千百山を爲すべしと雖も、物統貫する所なければ散逸して勢をなすこと難し。いざ再び傳道者の云ふ所を聽かん。

多く書を作れば極なし。多く學べば體疲る。事の全體の歸する所を聽くべし。曰く神を畏れ其の誡を守れ、是は凡ての人の本分なり。（傳道書十二〇十二、十三）

若き時より覺えたる神を畏れて終に人の本分を全うせは青年の始ありて老年の終を成せるなり。是れ即ち眞の人の成功なり。神の人の凱旋なり、永生の冠冕必ず其の頭に加へらるべし。

十一月（二十四年）の第二週は萬國青年會の特に祈禱と運動と共にせる一週なりければ、青年會の求めに應じ該週日曜日に演說せる概要なり。

日本に要する達觀者

偶諺に明者千人、盲者千人と云ふことあれど、是は世の賢者、愚者の割合を述べたるものにてはある

べからず。若し賢愚半分なりと云ふ意ならんにはこは大に比例を過ちしものなり。柿の花多けれど實になるものは少きが如く、人多き人の中にも人は少きものなり。實に人物は容易く得難きものにて愚者の千人に賢者の一人すら覺束なく思ふ所なり。されど世は到底明者なくては協はぬ者なれば、盲者萬人に明者一人にても欲しき者にこそ。

扨て吾々は日本と云ふ大なる船の船客なり。船中の客四千萬人此の船を世界の青海原に乗り出して、扨て暗礁にも觸れず暴風にも遇はず美事に此所を乗り切らんには無論一人の明者なくては叶はず。此の明者をば日本に要する達觀者とは曰ふなり。達觀者とは人に先だちて早く事理を悟る者也。世の中を觀察して國の行末を見定め、夢中にて暮らす人々を醒まし警しめて國運の繁昌を圖るものなり。斯る人を猶大にては預言者と曰ひき。預言者とは未來の事を豫言すると云ふのみにてはなし。「見る人」(シーア)なり、現在の國運を見て之を世人に告ぐる人なり。昔し猶太にては國家危急勢ひ旦夕に迫る時は數々此の如き達識達觀の人出で、國人を警め大厦の傾くを支へ、狂瀾の覆ひかゝるを防ぎ止めたりき。

我等は今の日本にも斯る人物の出で來らんことを望む者なり。政黨騒ぎなどに奔走する人の多くあらんよりも、唯一人にても斯る達觀者の出で來らんことこそ日本の幸福なるべけれ。ユダヤ預言者の事蹟は舊約聖書に著しき事にて、其の人物の如何なる者なるか、如何に高尚なるか、如何に神を畏れ人を愛し、國人の爲めに肝膽を碎きしかは、歴吏の紙上に躍り出でゞ何れも慕はしからぬはなけれど、殊に我國の今日に於て斯る人こそ出でゝほしと思ふは、イザヤとエレミヤの二人にてありけり。此の二人の精神こそ日本現時の國民に必要なる者なれ。いでや二人の性格を述べて之れを我國に要する理由をも曰はん。

イザヤは希望の預言者なりき。當時ユダヤの國運危殆にして所謂一髪千鈞を繫ぐ折なりしかども、彼れ危難に臨み非運に遇ひても恐るゝ所なく、未來の希望火よりも明なり。天罰を受け禍害に苦しむ同胞に、猶回天の運あることを信じ、遠き未來に於て神の國の同胞の中より起り來るべきを預言したりき。そは左に引く所を見て知りね。

ユダヤ王ヒゼキエルの治世にアッシリヤの大軍エルサレムを圍める時、イザヤ王に答へて曰く、エホバ斯く言ひ給へり、アッシリヤ王のしもべら我をのゝしりけがせり、なんじらその聞きし言葉によりて懼るゝなかれ。視よ、われ彼が心をうごかすべければ、一の風聲をきゝて己が國にかへらん。かれをその國にて劍にたふれしむべし。(イザヤ書三十七〇六七)

シオンに住める我民よ、アッシリヤ人エジプトの例になひらて笞をもて汝をうち、杖をあげて汝を責むるとも懼るゝなかれ。たゞ頃刻(しばらく)にして忿恚(いきどほり)はやまん、我がいかりは彼等をほろぼしてやまん。(同十〇廿四)

エホバ地の極にまで告げ宣はく、汝等シオンの女に告げていへ、視よ汝の救の來るを見よ、主の手

にその恩賜あり、はたらきの價はその前にあり、而して彼れきよき民またエホバにあがなはれたる者と稱へられん。なんぢらは人にもとめ尋ねらるゝもの、棄てられざる道と唱へらるべし。

我國は今國民に希望を與ふるイザヤの如き人物の出でんことを待望む者なり。保守家は國の前途を憂慮の中に埋沒していたづらに悲歌慷慨し、改進家は唯世潮に乘じ其日々々の風にまかする柳の如くなる今日に於ては、國民に大希望を與ふる人物の出でんことこそ願はしけれ。國際の事漸く多く國運を試むるの機次第に劇くなり來れる今日に於て、國民に要する所は未來の望を失はざるに在り。正理は必らず天の祐を受くることを信ずるに在り。途に虎狼は横はるとも義しきものは終に榮ゆてふ確信を有するに在り。言ふまでもなきことながら日本は三千年來天に惠まれたる國民なり。日本の歴史は神の手が其の上に在りしことを證する者なり。されば我等は常に希望を歌つて進むべきなり。イザヤの有せし精神をば日本國民に吹き込みて洋々たる國家の前途を祝したき者なり。

イザヤが希望の預言者なりし如く、エレミヤは涕泣せる預言者なりき。彼れ擧國の道德腐敗し君民ともに菲薄の行に泥みて信仰悉く亂れ、天命既に盡きて亡國眼前に近づけるを見、耽々たる丹心國の斯の如きを見るに忍びず、泣いて國人の罪を責め、天罰近きを預言したりき。左に引く所を以て之れを察せよ。

あゝ我れわが首を水となし、我が目を涙の泉となすことを得んことを。我が民の殺されたる者の爲めに晝夜哭かん。嗚呼我が曠野に旅人の寓を得んことを。我れ民を離れて去り行かん。彼等はみな奸淫するもの悖れる者の族なればなり……汝等各其の隣に心せよ、何れの兄弟をも信ずる勿れ。兄弟はみな欺きをなし、隣はみな讒りまはればなり……汝の住居は詭譎の中に在り、彼等の舌は殺す矢の如し……其の口を以て隣におだやかに語れども、其の心の中には害をはかるなり。エホバ言ひ給ふ、我これらの事の爲めに彼らを罰せざらんや、わが心はかくのごとき民に仇を復さゞらんや。

エレミヤが國民の不德をなげき悲しみしが如く、我等は我國に於て國民の爲めに嘆き悲しむ人物の出でんことを望む。日本人民は風流の人なり。春は花に秋は月に洒々落々天地を笑つて暮す人民なり。我等は此の笑へる民を驚かす爲めに泣かざるべからず。國民の品位卑しく國是定まらず、上下信なく公私の道德修らず、一家の作法明ならざる國民の爲めに、情慾を節せずして人情日に下り薄志弱行の徒漸く多からんとする國民の爲めに、大いに泣き長息痛歎せざるべからず。

以上の趣意を一言にして約すれば、日本に大希望を與ふる達觀者と國民の罪惡に泣く達觀者とを要すと云ふに在り。されど神なしとする人いかで希望あるを得んや。神なしとする人如何で罪を悲しむを得んや。されば事の順序として此等の人物の出づる前に先づ眞神の信仰なかるべからざるは明瞭なることならん。されば我等はイザヤ、エレミヤの精神は必ず我が基督教徒青年諸君の中にのみ宿り得べ

きものなりと信ずるなり。予は是故に諸君の自ら重んじ自ら勉められんことを切望する者なり。

（明治二十六年二月）

業を卒へたる諸君に呈す

明治三十二年三月二十七日青山學院三個學部卒業證書授與式を擧ぐるに際し、庸一不幸にして母の喪に服し身を山川二百里の外に置くを以て、其の盛典に與り此の榮任を執ること能はず。遺憾何ぞ之に過ぎん。然りと雖も卒業生諸君の試業を完うし職員諸君の盡瘁によりて式典の準備具さに至れるを聞くに及び、遙に慶祝の情を禁ずる能はざるものあり。玆に謹んで一言を呈せんとす。

青山學院三個學部卒業生諸君、往事を追懷すれば、諸君勤學の田園には屢霜雪颶震の襲來せるを知らん。而して諸君今は其の自ら播く所を穫る。是れ所謂粒々皆辛苦より來れるもの、諸君の欣喜知るべきなり。之を見るもの豈に祝せざるを得んや。謹んで諸君の成功を祝す。望むらくは又之を記せよ。即ち諸君の播種をして成功ならしめたるものを。曰く天賚の德光恩露惠風、曰く父兄の愛護、曰く職員諸氏の灌漑培養、曰く朋友の切瑳琢磨、諸君之を包ねて粒々愈貴し。冀くは諸君益其の穫る所を重んじ其の積む所を貴び之を護り之を長じ、更に大いに穫る所あらんを期せよ。諸君は四千萬人中の英才なり、然れども英資ひとり自ら人をして飽かしむる者にあらざるなり。必ずや眞人ならんか、天に對し人に對し且つ己れに對して眞實なるべし。"True to God, true to men, and true to self." 始めて能く境遇の上に超越し形骸の外に放浪して以て自ら飽き自ら安ずる所あり。莘棗所に從ひ明暗時と位とに適し其の英資を利して以て其の天職を全うする事を得ん。諸君は今艱なるに似たりと雖も、失望の世にあらざるなるなり。諸君の前程は凡て好望ならざるなし。眞實正大の士は幸に希望を有し天命を樂しむ。諸君、勉旃矣、謹んで祝意を表す。（明治三十二年三月）

國士の門出

汝等は世の光なり、山の上に建てられたる城は隱るゝことを得ず。（マタイ傳五〇十四）

數年螢雪の勞を積まれ、今や玆に卒業の賀節に際せらる。是れ諸君の爲に祝すべく又歌ふべき時なり。於是如何なる祝辭をもて喜びを共にすべきかと考ふる折柄或る宗教新聞にて『紳士の定義』てふ一文を見出せり。これぞ將に社會に出でんとする兄弟姉妹にとりて屈强なる教ならずやと思ひ、更に考ふること再三に及びて何分物足らざるものあるを覺ゆ。蓋し餘りに平和に餘りに平凡にして、時勢の感に吻合せざればなり。是に於て余は寧ろ『國士の門出』を撰むに至れり。思ふに智識あり品格ありて一社會の紳士淑女たるを失はずと雖も、未だ必ずしも國士と稱するに足らざるべし。況んや正直律義一家和睦し、能く四隣に親善して天命を樂しむ善男善女と云ふまでにては尙ほ以て足らざるなり。今

や明治の三十四年、國會の開設せられてより歳を重ぬる茲に十年、諸君を迓るに當り、之に望むに惟紳士淑女を以てしては滿足するを得ず。一層の大抱負と大希望とをなかる可からず。これ歡喜の中になほ悲壯慷慨止む能はざるなり。

吾人は十九世紀の始め蓬萊島中太平を歌ふ日本に生れしにあらずして、過渡變遷國家盛衰の機に當れる日本に生れ來りしなり。國家の盛衰興亡は一にかゝりて諸君の雙肩にあり。されば諸君の生涯は趣味津々たると同時に又甚だ大事なり。かくの如き機に際して將に世に出でんとす。即ち我國運を任すべき榮譽を荷ふべく定められたるなり。何れの國にても社會にても、之を組織する人々は皆之に對し權利あり責任あるべし。さあれ事實はいづれも其の社會の先達者によりて措置せらるゝものにして、人々悉く先達者たるべきにあらざれば自ら階級を生ずるなり。我國四千餘萬の國民中先達者たるべきものは二三百萬によも過ぎまじ。適當なる智識あり、品格あり、思想ある者は是れ即ち先達者なり。されば適當なる先達者の多き社會は榮え、否らざるものは衰ふ。諸君の受けたる教育と鼓吹せられ又修養したる思想とは、此の任を辭すべきにあらず。諸君は單に一個の紳士淑女として自ら滿足すべからず、國家の中堅として立ち國士として盡さゞるべからず。故に其の責任は重且つ大にして又甚だ難し。是れ悲壯の感ある所以なり。唐の名士魏徵歌ひて曰く『豈に艱險を憚からざらんや、深く國士の恩を懷ふ』と。諸君、若し萬一にも此の志なからんか、是れ眞に諸君の一大缺點にして、決して輕々に看過すべきにあらざるなり。否これ即ち天道人道に對して又國家に對して一の罪なり。而して今や諸君は其の準備の時を卒へたり、若しくは其の大部分を卒へたり。而して此に大注意を要すべきもの三あり、曰く

(一)時勢を達觀せざるべからず。換言すれば、我國は國運の旅程に於て如何なる點にあるやを察せざるべからず。主イエス曾て時勢に通せざる僞國士と僞政治家とを責めて曰く、『僞善者よ、空の景色を別つことを知りて時の休徵を別ち能はざる乎』(マタイ傳十六〇三)と。是れ只パリサイ、サドカイの徒のみを叱したる御言葉にあらずして、正に吾人頂門の一針なり。吾人苟も國士の一人として起たんと欲せば、又此の時勢を觀る明なくして可ならんや。今は實に惠の時なり、又救の日なり。然れども未だ之を得たるにあらず。取れば存し、棄つれば亡ぶ日なり。危機一髮とは蓋し我國今日の時勢をいふならん。往時封建の時代は何事も不自由なりしかど、交を天下に結びたる今日も、爲に世より重せらるゝ德と力となく、文明の組織新に成りて開化の要素なし。曩に北清の野にありて能く軍律を守りたる我軍は多少世界の尊敬を受くる助とはなりたりとも、內に顧みれば又冷汗背を濕さゞるを得ず。人は驕奢を好みて、富をなすの法を知らず、自由を貪りて自由を重んずるの精神なし。徒らに眼前の幻影に誑らかされて更に遠大の思慮あるなし。東には强大駸々たる歐米を負ひ、西には暗黑紛亂せる淸韓を控へて、禍機の盡くる所を知らず。吾人は東面して歐米と共に起たんか、或は西面して韓淸と共に衰へん

か。東洋の英國たらんか、伊太利たらんか、將た西班牙か。是れ吾人の選む所に從ふべきのみ。

(二)形勢斯の如くにして而して諸君は又傍觀者にあらざるなり。二十世紀の日本は諸君の舞臺なり、各其の役割のまにまに踊らざるべからず。是に至て一の困難を感ずるは、諸君の修養ぜし思想と社會のそれと一致すべき哉否哉也。殊に婦人に於て著しきを見る。高き思想を以て濁れる世に出づ、互の衝突火を見るよりも明なり。是れ余が只に祝聲のみを發する能はずして、却つて主の其の使徒を警戒し給へる御言葉を想起する所以なり。曰く『地に泰平を出さん爲に我來れりと思ふ勿れ、泰平を出さんとに非ず刄を出さん爲に來れり』と、是れ即ち新思想と舊思想との衝突なり。警醒者と夢醉者との牴牾なり。眞正の國士と世俗者との干格なり。避くべからざる戰爭なり。主なほ語を次いで『我が來るは子を其の父に背かせ、女を其の母に背かせ、媳を其の姑に背かせんが爲なり』と、宣ひたるは、此の衝突を盡けるものなり。キリスト豈に猥りに親子分離を喜ぶ者ならんや。是に至つて諸君の卒業は祝は則ち祝ひなれども、婚姻のそれの如きにはあらずして、水杯をもて初陣の武者の門出を祝ふ類なり。其の高潔なるは論を俟たざれども其の裏面には命を賭して戰ふてふ慘然亦凄然たるものあり。深慮もなく徒に血氣にはやる若武者は、勇ましきことのみ是れ好めども、思慮ある士は又悲壯を感ずるなり。慶長の頃なりけん、佐野の城主天德寺了伯琵琶法師を招きて悲しき曲を聞かせよといひければ、法師かしこまりて佐々木高綱が宇治川の先陣を語り出でたるに、彼流涕頻りなりき。なほ一曲を望まれけるに那須與一が扇の的を射るの段を語りけるに流涕亦前の如かりしかば、近侍怪みてかくばかり勇ましきことげに面白かるべきに泣かせ給ふこと心得申さずといひければ、天德寺端然として叱して曰く、『汝等は無下のことを申すものかな、兩人が心底を汲みて見よ、若し萬一仕損じたらんには生き歸る心あらざりしなるべきに』と、ガサツなる若武者等を誡めけること美談として今尚賞讃せらる。諸君社會の活動場裡に臨むに當り、また佐々木、那須が志なかるべからず。是れ又余が私に涙ある所以なり。イエス又曰く『我汝等を遣はすは羊を狼の中に入るゝが如し。故に蛇の如く敏く、鳩の如くおとなしかれ』と。注意警醒一刻も怠るべからざるを敎ふるなり。思想上德義上よりすれば、今日の社會こそ實に狐狼の群なるべけれ。三十年前より見れば何事も餘程自由となれり。婦人社會殊に然り。さあれ思想、德義の上よりすれば未だ全く自由なりといふを得ず。諸君の任は誠に大なり。諸君の立場は甚だ危險なり。故に膽は大にして心は小ならざるべからず。

(三)眞正の國士は天下に先ちて憂ひ天下に後れて樂しむべし。人の樂しむ時に襟を正して憂へよ。時ならざる時に樂しむべからず。主イエスの生涯は實に斯くの如き者にして、吾人の取つて以て學ぶべき者なり。よく時勢を達觀して先づ憂ひ時弊を救はんとして常に勞す、而して其の成功は永く社會を祝福す。かくして後始めて樂しむ、故に其の樂みは永遠盡くる時なし。天に寶を貯ふるとは此の邊の消息をば云ふならん。されば眞正の國士は達觀者にして、救濟者なり。而して又祝福者たるなり。然

り而して右の三大資格を實現するには如何にせば可ならんか、是れ大切なる問題なり。余之に答へて曰はん、『最大なる達觀者に從ひ、完全なる救濟者の心を行ひ、永遠の祝福者を頼みとして、之と共に泣き、之れと共に笑ひ、之と共に歌ふべし』と。是れ高尚にして深厚なる宗教の實驗なりとす。吾人は時としては、父母も兄弟も、若しくは妻子も吾人を慰むる能はざるを感ずることあらん。かゝる時に及びて能く吾人の心を滿たすに足るものは、只一片の信仰のみ。吾人能く困難に當らんとせば、神なくしては叶はざるなり。諸君、此の信仰なく又神なくして萬事困難なる世に處せんと欲せば、危險を免かれざるべし。又信ある者と雖も、親交なき者は未だし。かゝる人は勉めて眞面目に自己の本分を守るべし。必ずや困難至る。かくして後父母妻子の力能く吾人を助くる能はざるを悟り、玆に始めてイエスを主と仰ぐを得べし。宗教の大切なる道實に此に存す。悲喜相交りて幸福限りなかるべし。『誰か能く世に勝たん、イエスを神の子と信ずる者にあらずや』（ヨハネ第壹書五〇五）國士の任は世に勝つにあり。探れ諸君、世に勝つの道を探りて以て力ある者の手を取り、而して彼の愛を受けよ。

（明治三十四年三月、青山學院卒業式訓戒筆記）

卒業生諸君に告ぐ

一、卒業生諸君、數年間の學藝品行を査察し教授會の推薦を以て、商議會の決議を經、來賓諸君の前に卒業證書を附與するを以て光榮とす。

一、諸君は人生比較的高等なる行路を進み今や其の一關門を通過せられしことを祝す。——諸君は人生の競爭なるものを稍解せられたるを信ず——或人は學術のみならず生活競爭の眞味をも既に嘗められたり——予諸氏の過去に於ける經驗を貴重し、將來に對する志望を尊敬す。

一、人生の行路に横はれる幾多の慘事は生活の高等なる（智識あり道德ある生活）程深く强きものなるを、略實驗せられしなるべし。人生は夢にも戯にもあらざることを知られたるを信ず。願くば自他に對する責任を明記しつゝ、進行せられんことを希望す。

一、社會の現狀時勢の要求は、諸君の明知するところなり。深く自重して諸氏の爲すべき所を擇ばれんことを勸告す。

一、最後に諸君の最も深く記憶せられんことを欲する一事は、諸君は惟五十年の行路を辿るものにあらずして、永遠の行路に一歩を進めつゝあることなり。諸君の榮辱究達は永遠の間にあることなり。救主耶蘇基督訓を垂れて曰く『人若し自己を失はゞ全世界を得るとも何の益あらんや』。蓋し完全なる人格に達し、永遠圓滿の光榮に入らんことを期するなり。謹んで諸君の最大成功を祈る。

（明治三十五年三月廿七日、青山學院卒業式告辭草稿）

本多庸一先生遺稿

自修

汝起きて汝の足にて立てよ。（使徒行傳廿六〇十六）

今日私が此の意味ある講壇より諸君に呈せんとする說教の本文は、パウロがダマスコの門に於て主イエスより聞きたる言葉で御座います。即ち使徒行傳二十六章十六節の言葉で日本譯には『汝起きて汝の足にて立てよ』てよ』と御座いますが、英譯では一層意味が強いやうであります。即ち『汝起きて汝の足にて立てよ』とございます。抑も人生に差等があるとすれば、精神を以て立つものと身體を用ゐて立つものとは一つの區別であつて、又前者は高く後者は低しといふも差支ありますまい。今日私が聊か言辭を呈せんとする諸君は、我日本に於て否世界より考へても高等なる生活をなす者に屬する者というて宜しい。今日我國に於て中學校二百五十八、高等女學校八十五、外に我學校の如き者を加へても尙ほ四百に滿たない位でございます。今一般の生徒平均四百人としも尙ほ十五六萬人でございませう。此の內年々五分の一乃至六分の一のものが卒業して、社會有數の高等生活を送るものに屬するのであります。尙一種の一層精しき區別があるとすれば、智識のみならず德を以て生活すると、只自然的生活（仮令精神にもせよ）をなすとでございます。中學以上の學生は多い。然し其の大多數は皆智に由つて起ち、道義を以て立つものは甚だ少ない。諸君は此の區別に一考を煩はされたい。此の區別に於て高尙なる方面を選みしものが最も高尙なる生活を成し遂ぐるものであります。今朝尊敬を以て對する諸君は、第一に於ては慥かに之を得たのであります。けれども第二に於ては之れ全く終生の業であつて、日々差等を制しつゝ進むものでございます。

又人生は行旅の如しとも申します。中等教育を終へ志を懷いて世に立たんとする紳士淑女諸子は、將に行李を整へて高尙なる生活の旅程に上る者でございます。一日の閑を費やす散策遊山の如きものではございません。目的を高い所に定め之に達せんとする勤勞でございます。之を遂ぐるの實務であるけれども結局ではなくして準備である、修養である、より大なる勤務に當るべき準備である、より高き生活に入りたる修養でございます。吾人は一日も此の修養中にあることを忘れてはなりません。青年紳士淑女諸君、諸君は新たに此の壯なる征途に上るのであれば、私は諸君を祝し又成功の一階段を上れる諸君に對し尊敬を拂ふものでございます。

今朝考へんとすること專ら自修の點にあるのであつて最も大切なる事でございます。選みし本文はパウロかダマスコ門にて倒れた時イエスより承まはりし聲であります。パウロはヘブライ人の血統を受け羅馬國士の家格を有し、時の碩學ガブリエルの門下に學びて學士の肩書を有し、パリサイ宗派の勢力と信用を負ひたる大人物でございました。彼今や祭司の長の委任を受けダマスコの敎會を一擊の下に破らんとの決心を持ち、意氣揚々當るべからざるの勢にて將にダマスコの門に入らんとするや、忽

然として正午の日光よりも尙輝きたる電光によつて倒れたのでございます。時にイエスは彼に向つて何と言ひ給ひしか。主は汝の血統に由つて立てと仰せられませんでした。汝の家格を以て立てとも申されません、汝の學問汝の宗派と其勢力とを以て立てとも申しません。曰く『汝の足にて立て』と。是れ主の御言葉で御座いました。

卒業生諸君、諸君は祖先より、國家より、學閥より、宗派より、官爵より、其の他凡ての外圍より來れるものに賴まずして自家によりて立たれよ。世界傳道の創業を任せんとする者には此の種の修業は最も先だつべきものでございます。私は諸君を尊敬します、否諸君が天より任せられて國家と社會とに對する任務の大なるを尊敬します。敢て諸君を以てパウロに擬し其の修養を全うせられんことを希望して止まぬ次第でございます。

諸君、從來は父母兄弟師友の扶助を利して進み來たのでありますが、今より以後は一層留意して自ら勤むることを學ばなければなりません。自ら修め自ら任じ自ら起たざれば何事も成るものではない、自助の精神が無くんば神明も尙ほ如何ともすることが出來ません。神は自ら助くるものを助くとは千古の眞理にして、諸君のよく知る處である。諸君は宜しく神の前に獨立して修養を勉めなければならぬ。而して其修養といふことの中には諸種の技藝才能の修養もあるべけれど、最も大切にして自家に屬する一事は品性の修養でございます。語を換へて之をいへば自家製造である、一個の人格を作るのである、意識のある自由ある一個の人格を立派に製造するのでございます。是れ決して父母兄弟と雖も之を任ずることは出來ぬ。否自ら任じ自ら當らざるに於ては、神明と雖も之を與ふることは出來ない。聖靈の感動周圍の勢力は間接に吾人を興奮せしむることはございませう。然しながら自家自ら任じ自ら進んで其の感化を迎ふるにあらずんば、いかでか其の益を受くることが出來ませうか。聖書の訓ふる所を見るにサムエル前書七章の三節には『汝等の心をエホバに定め、之にのみ事へなば、エホバ汝等をペリシテ人の手より救ひ出さん』とある。ガラテヤ書五章の一節には『イエスキリスト我等を釋きて自由を得させたり、是故に汝等堅く立ちて復び奴隷の軛に繫がる勿れ』とある。尙ほ又コリント前書十六章の十三節を見れば『汝等目を醒まし、堅く信仰に立ちて丈夫の如く剛かれ』とございます。是れ何れも自ら任じて當るの意味であつて、傲慢自ら用ふるの意義ではない。諸君、青年の任は重く且つ大なり。大いに自ら起つを學ばざるべからず。此の如きは決して一朝一夕に得らるべきものではない。時々刻々事大となく小となく之に注意し、之を勉め、自らを謙遜して神の惠を待つべきである。

品性修養に於て次に留意すべきことは、善を行ふのみにあらずして、自ら善人となるといふことである。嘉言善行は、固より善き人となることを勉むる者の善をなすは極めて自然の事である。ウエブスターの辭典を檢すれば斯の如きことを發見致します。即ち "Character is used to express what he is;

reputation what he is thought to; record is the total of his known action or inaction."とふ事でございます。人は動もすれば何をなせしやとの記錄若しくは評判に心を寄せて其の人は如何なる者なりやといふことを忽せに致します。吾人は屢々 What to do とふことを考へますが、What to be といふ事を思ふことは甚だ少ない。嘉言善行は今日ありとも明日必ずしもあるものではない。然しながら善き品性に至つては永生盡くることがないのであります。

マタイ傳十二章の三十三節には『或は樹を善きものとし、其の果をも善きものとせよ、或は其の樹を惡しきものとし其の果をも惡しきものとせよ』と訓へてあります。吾人が善き果實を得んと欲せば先づ其の樹を善くすべきは自然の道理である。故にキリストは先づ汝の品性を善くせよと敎へ給ひました。然るに吾人は動もすれば漫然として善果をのみ求めて樹木を善くすることを忘る、此の如きは本末を誤つたものといはねばならぬ。精神上のことは物質上のことよりも餘裕があるらしい。人は全く惡しくなりきらぬ中は善きに向ふことが出來る。吾人は過が多いけれど善い部分もあつて、我子に卵を與ふることを知り、時に善果の如きものを結ぶことがないこともない。故に遂には自ら欺かれて樹を善くすることを忘れるやうになるのであります。惡しき果實の中にも百に一つ二つは食ふべきものもあります。されどキリストは先づ樹の善惡に重きを置かれました。吾人は須らく樹を善くすることに力を盡さねばならぬ、是れ自家改良品性修養でございます。

偖て此の改良修養といふことは、實務を離れて得らるべきものではない。是が爲めに毎日大小の諸事に意を用ゐなければならぬ。見よ敎育界の人物を、人の功は品性を如何ともすることが出來ぬではありませんか。有名なるヘンリー・ワード・ビーチャーは『品性は魂にあらず、寧ろ織り上げられたるものなりと』申しました。誠に千古の名言であります。吾人は朝な夕なの諸事萬般に心を留め意を用ゐて己が品性を織り上げねばならぬ。又博士ペアカルストは『予が今日の品性は、多くは從來予が有せる思想、樂しみたる感情、實行せる言行の結果なり。即ち先年より只今まで積み上げ結晶したるものなり』と申しました。

最後に考ふべきは事前述の如くであれば、吾人がわが足にて立つて勉むるときは眞に吾人と離るべからざる光輝ある衣を織るを得ると雖も、苟も怠るときは必ずや粗惡見るに堪へざる弊衣が我身に密着して脱ぐことの出來ぬやうに至ることである。吾人は此の衣を如何にして製するかといふに、吾人の足自ら立ちわが手自ら之を織らねばなぬ。人爵的通常の衣冠は容易に脱ぎ捨てらるゝものであつて、最後には是非とも脱がねばならぬものである。無意識に醜惡なる衣を織りなして遂に換へがたきに至らば、如何に哀しいことではございませんか。さあれ吾人は到底裸體にて居らるゝものではない。善美なる衣を着ざれば醜惡なるものを着けねばならぬ。吾人は到底何等かの品性を織り出さねばなりません。故に、宜しく立派なるものを織り出すべきである。此に於てか私は、又言葉を繰り返して申し

ます。曰く、起きて汝の足にて立て、汝の手にて織れよと。吾人が修養の前途には希望がある。『愛するものよ、我等今神の子たり、後いかん未だ露はれず、其の現はれん時には必ず神に肖んことを知る。そは我等その眞狀を見るべければなり』（ヨハネ第壹書三〇二）吾人が足にて立ち手自ら我が品性を織る間に、バウロの如く神の光を見、その御聲を聞きて善き品性を織ることが出來ませう。故に今より一切下界周圍の賴みを離れて純粹なる個人として立つて責任を負ひ、神の壇の前に近づき仰ぎて主の光明を見、俯して其の恩寵に浴するときは、日に月に神に肖たる品性を織出し、又結晶せしむることが出來ませう。諸君、乞ふ自愛せよ、又自重せよ、神は諸君を助くるでございませう。

（明治三十六年三月、青山學院卒業說敎筆記）

自重

愛する者よ、我等今神の子たり。後いかん未だ顯はれず。其の顯はれん時には、必ず神に似んことを知る。そは我等其の眞の狀を見るべければなり。（ヨハネ第壹書三〇二）

此の聖句は恰も鑛山の如くして幾多の寶石は探るに從つて出で來るべし。さあれ悉く之を探らんとするは今日の趣意に非ず。『我等今神の子たり』といふ聖句を取りて、少しく自重の感を述べんとす。卒業生諸君、諸君は今や人生々活の一段を經たり。宜しく自ら重んじ自ら敬するの念厚からざるべからず。世の宗敎は何れも謙遜を敎へ、又必要あるに於ては反覆繰返しても之を說くことあり。然りとて雖も吾人は必ずしも常に自ら下つてのみ居るべき者にあらず、時に首を上げて大いに自重し、大いに自敬するの要あり。謙遜と自重一見矛盾せるものゝ如し。之をしも矛盾と云はゞ是れ必要なる矛盾にして、亦甚だ結構なる矛盾なり。宇宙には矛盾せること甚だ多し。而して其の最も顯著なる者は人に於て之を見る。パスカル曰く『人は一莖の芦の如きものにして、天地間最も脆弱なるものなり。されど此の芦は思考するものなり。宇宙の大なるや人を亡ぼさんと欲せば手を下す迄もなく、一呼の毒氣一滴の藥水も容易く人を殺すを得べし。然れども人は尙ほ宇宙よりも貴し。蓋し人は自己の死するを知る。宇宙は自家の力をだに知らざるなり』と。是れ即ち人の甚だ賤しきが如くして而かも甚だ貴きを謂へるなり。

人は慥かに動物なり、然れども人には動物以上の心性あり。上らば天の使ともなり、下らば陰府の惡魔ともなるべし。是も亦一つの矛盾とやいはん。兎まれ人は惟尋常の動物として止まる能はざるなり。吾人の脩養工夫に於けるも亦時に矛盾せるが如きを免れず。德川家康大黑の贊あり、曰く『大黑の頭巾は上を見ぬ爲めの頭巾なり。されどこは時に脫するを得るものなるを忘るべからず』と。彼が一生の行動は此の一言に盡せり。彼は謹愼にして容易に出でず、而かも其の一起するに於ては必ず其の志を貫徹せずんば止まず。彼れ始めは今川氏に屈し織田氏に仕へ、更に豐臣氏に腰を折りて終に天下を一統せり。

吾人は大いに謙遜を學び小心翼々として内に反省すること肝要なり。宗教家常に人に勸めて曰く『悔い改めよ、謙遜なれ、己を頼む勿れ、汝自らを棄てよ』と。是れ豈に荒唐無稽の言ならんや。實は吾人は罪人にして自ら救ふの德もなく、自ら潔むるの能もなきものなり。然れども是と同時に吾人は亦自己の貴きをも忘るべからず。我等今神の子たり、吾人五尺の身を以て此の天地に處す、强しといふべけんや。さあれ翻つて其の靈界に於ける吾人の立場を見れば、吾人は神の子にして救世主の弟たるなり。其の貴き血を以て贖はれし程に天父の恩寵を辱うする者なり。諸君、上より恩護を受くる此の如く、周圍には父母師友の養育教訓あり。又自家の加勞と脩養とありて以て今日卒業の光榮に接す。焉んぞ世の邪魔者の如く、罪惡の奴隷の如く世を渡つて可ならんや。更に我が國家社會の現勢と必要とを察し、卿等が脩養したる種類と其の保持せる信操とを考ふるときは、諸君は如何に尊貴なる地位に立ち如何に重要なる任務を希望せらるゝものなるやを知り得べし。

今や世は物質的文明を謳歌すと雖も、精神上の眞文明を求むることを知らず。今や我國は大難に當りて國家的精神の勃興盛なりと雖も、其の根本なる家庭に至つては僅かに新聞紙の材料となるのみ。世の實際は未だ何れより手を下すべきかを知らざるなり。日露戰爭の終局は今俄に預言し難けれども、假りに希望の如く大勝利を得たりとせよ。勝誇りたる國民をして勝つて兜の緒をしめ、眞に大國民として東洋の進歩平和を司らしむるには果して如何になすべきや。其の先導者となり椽の下の力持となるべきもの果して何處にかある。嗚呼是れ卿等の任ならずや。

諸君よ、予輩は青年なり、未だ任ずべきの時至らずといふ勿れ。青年にして任ずるの志なくんば愚老を以て終らんのみ。青年を救ふは青年なり。時將に至らんとす。天下の青年爭うて武勳を慕ひ、威望功名を崇みて、精神を養ひ實德を脩むることを忘却し了らん。此の時に當りて誰か其の空虛を塡め、預言者となりて世の醉夢を醒さんとはする。嗚呼是れ諸君の任ならずや。

卒業生諸君、吾人が罪人の子たるを思へば悔改謙遜奴隷の如く屈せざるべからずと雖も、許されて神の子たり救はれて天國の臣民たるを考ふれば、欣喜雀躍己を忘れて奮發し、地の鹽たり世の光たるの職分を盡さゞるべからざるなり。然るに或は僅なる情慾を禁ずる能はず、或は些少の自由に飽かんことを求めて世人と浮沈し豫言者たるの性格を失ふに至らば、自らを辱しめ主を辱しめ道を辱しめて愛する邦家の必要を缺くに至るべし。是れ豈に志士仁人のなすべき所ならんや。

諸君は或は進みて更に高き教育を受け、或は傳道に從ひ或は實業につくもあるべし。其の往く道は何れにまれ須らく自ら重んじ自ら敬し抱負を大にし、人の師表となり椽の下の力持となりて其の責任を全うせられんことを希望す。『凡そ神に由る此の望を懷く者は、其の潔さが如く自らを潔くす』（ヨハネ第壹書三〇三）之を實行せん事決して易きに非ず、さあれ主は今も尙ほ宣ふ『懼るゝ勿れ、我れ既に世に勝てり』と。

（明治三十七年四月四日、青山學院及び同女學院卒業生に對する說教筆記）

本多庸一先生遺稿

競走の秘訣

是故に我等かく多くの見証人に雲の如く圍まれたればもろ〳〵の重きものとまとへる罪を除き、耐へ忍びて我等の前に置かれたる馳場を走り、イエス即ち信仰の先導となりて之を全うする者を望むべし。（ヘブル書十二〇一、二）

此の本文により『競走の秘訣』と題してお話をしようと思ひます。本文に就ては何も言ふ事もないが、然し字句の排列の順序は日本譯の方は餘り明瞭ではない。英譯の方が餘程こゝの處が意味明瞭になつて居る。即ち之を直譯して見ると、『イエス即ち信仰の先導にして且つ之を全うする者を望み、耐へ忍びて我らの前に置かれたる馳場を走るべし』云々となる。日本文の方は『キリストを望むべし』で言を結んであるが、其れよりは英文の『イエスを望みつゝ(Looking Jesus) 馳場を走るべし』と言つた方が適當の樣に思はれる。

其處で此の本文によりて考へて見るに、先づ第一、此の舞臺は競走場である。日本でもさうであるが世界各國でも、隨分昔から競走は流行つたものである。第二、其の馳場には雲霞の如く見物の人が多く集つて居る。『多くの見證人に雲の如く圍まれ』とは能く實際を寫したものである。第三、馳場にある競走者は何もかも打ち捨てゝ即ち重き物邪魔物うるさき物を脱ぎ捨てゝ、成る可く身輕になつて走る。『もろ〳〵の重きものと纏へる罪を除き』とは、之も矢張寫實的である。第四、競走には忍耐が必要である。所謂『耐へ忍び』て怠慢なく、不變の歩調を以て馳り、能く久しきに耐ふる樣に心懸けねばならぬ。而して第五に何より大切なる事は最もよく走る處の人—先導者に倣ふ事である。一途に完全なる先導者を望みつゝ、眞直に他を顧みずして走ることが最緊要の事である。

各學校の卒業生諸君は競走のチャムピオンであつて、一生の馳場に於ては既に或る區域に達せられたるものと言つてよからう。誠に御目出度い次第である。或は今一里塚の處に來られた人もあらうし、又は最早二里三里塚迄達せられた人もあらう。何れにしても御目出度い事であるが、然し決勝點はまだ仲々遠いことを覺悟せねばならぬ。人は皆此の長き〳〵競走場裡に放たれるものである。我等は尙ほ奮勵一番を要する。如何にせば最も完全に此の馳場を走ることが出來やうか。之に注意すべきことは、先づ

第一、吾れ自身が馳場にあるといふことを自覺することである。社會の多數は殆んど之を覺知して居ない。彼等は只盲目的に走つて居る。少しも方向も知らず足並も揃はず、無茶苦茶に走つて居る。これを醉生夢死とはいふ。諸君の如き智育の程度にある人々には、此の醉生夢死の狀態を以ては勿論不都合である。我等は何よりも先きに人生の意義を覺知せねばならない。

第二、馳場にあるものは寸刻も徒然に止まつてはならぬ。必ず日々一定の方向に向つて進行せねばならぬ。而して我等の馳場は無人ではない。『多くの見證人雲の如く』集まつて居る。それも素人の見物人なら左程迄意に介するに足るまいが、人生靈界の馳場に見物人となれる者はヘブル書第十一章に列

擧せられてある樣な經驗に富める黒人である、競走の成功者である。斯かる多くの經驗家成功家に立合はるゝ事は勿論身にとりて名譽であるが、其れと共に氣苦しくも感ぜられるであらう。然し概して曰へば、之は走る者のために甚だ奬勵となる事である。例へば古來東洋に於ても己れを英雄豪傑に比べて見て、これではならぬと感ずる一念は非常に人を激勵したものである。其の如く我等の周圍には成功せる先輩等が刮目して我らをながめて居ると思ふ一念は、ひどく我等を激勵するに相違ない。

第三、體育的の競走には成るべく身を輕くするといふ事が必要である。我等の青年時代には隨分山川も跋渉して見たが、急ぐ時には裸にもなりたい樣であつた。少しでも出來る丈け身を輕くしたい。精神的の事も矢張同じである。可成枝葉の嗜好や願望を少なくして、尤も主なる尤も高尚なる願望に志さねばならぬ。富貴名譽も若し我が心身を迂鈍ならしむる憂があるならば振り捨てゝ往かねばならぬ。況や我を罪惡に陷るゝ樣な罪惡をや。須く斷然之を抛擲するの決心と勇氣とが必要である。俗人のやうに徒らに嗜慾の心を逞うして居ては靈界の馳場に成功は不可能である。

第四、我らの前に置かれたる馳場は五百ヤードや一千メートルの短距離ではなく、一生涯を通して走らねばならぬ長き馳場であるから、間絶なく不變の歩調を以て進むといふことが肝要である。一分間に千メートルを走つても次の分時には動く事も出來ないといふやうでは、何の益にも立つまい。靈界の競走には一時はあせりすぎて遂に息切れして中途に倒れるやうであつてはならぬ。諸君の感情時に或は冷却する事もあらう。そんな時には須らく意志を鼓して進行すべしだ。諸君の智識時に或は痛快なる理解を能ふるに足らぬこともあらう。然る場合には、宜しく神人人格の感應を以て神秘なる理解を得ねばならぬ。勿論一生涯の間には艱難辛苦踵を接して來ることもあらう。唯屈せず撓まず耐へ忍びて進むことが必要である。卒業生諸君の中には尚ほ更に進んで高等なる學校に入らるゝ方もあらうが、其の時には間絶なく不變の歩調で平均に勉强する事を心懸けねばならぬ。いつもは懈怠勝になつて居て試驗に差迫つてから色を青くして勉勵しても、得たる結果は直ちに又一週間の後には飛んで仕舞ふ。又諸君の中には神學校を卒業して之から實地の傳道に從事せらるゝ方々もあらう。其等の諸君は殊に此の事を記憶して居て貰ひたい。勿論或特別なる場合に於ては疾風迅雷の勢を以てやる可き場合もあらうが、然し一氣呵成で出來た信者は其の失くなることにも矢張一氣呵成である（こんな言の使ひ方があるとすれば）。三十日にして出來たものを三十日に失うてしまつては何の役にも立たぬではないか。間斷なく不變の歩調で着々やるといふことは傳道の秘訣であらうと思ふ。

第五、最後に最も重大なる秘訣は常に『イエス・キリストを望みつゝ』進むといふ事である。シングル、アイ即ち單一なる目標を定むるといふ事は、何事をなすにも緊要であるが殊に我が靈界の馳場を走る者には尤も必要である。我らの馳場では人に勝つといふことは餘り大切ではない。大切なのは常に其の方向を誤ることなく、將に走るべき道程を盡す事である。又此の馳場は速かに走るよりも正し

く走る事が大切である。前後左右の評判などは心を措くに及ばぬ。或は傍輩が横着に我を驅拔けたとて、左迄羨むにも當るまい。唯我らは我らの向ふ所に歩み給ふ先導者完全者を望みつゝ、一瞬時でも彼を見失はぬ樣にして、出來る丈け近く彼に歩む事を勉むべきである。若しも我らの向ふに走り給ふ大將の影が見えない樣にでもなつたならば、其れは己れが何處かへ晝寢をして居たのであらう。早く目を醒まして追付かなければならぬ。大將の影を認めないでも、左まで心に懸けないで十字軍の兵が頻々として魔軍の伏兵に斃れ、否寧ろ魔軍に降伏する者の多いのは、正に近時の實際である。誠に痛嘆の至りではないか。是と云ふも畢竟大將を見失ふからのことである。どんな不心得な弱卒でも大將の目の前では決てし敵に降參するものでない。敵に降參する時は概ね大將の居らぬ時である。其故に我らは常に〳〵注意して大將を見失はない樣に警戒せねばならぬ。思ふに我が國における信教の自由は歐洲諸國にても比ひ稀なる程である。歐洲の文明國ですら未だに宗教上の迫害があつて、實際上信仰の自由を許されない國も少くないのに、基督教に就いて惡しき歴史を有して居る我日本に於て、斯くも宗教の自由を得て居るのは實に感謝すべき次第ではないか。然るに一利一害は數の免れない處とは云へ、つまりは此の信仰の自由を濫用してやゝもすれば神を離れキリストを遠ざかり、遂に全く其の信仰を抛つものあるは悲しむべきことである。要するにあまり自由なるが爲に、一方では却つて油斷の心を生ぜしむる。而して我らが油斷をして居る時心の帶がゆるんで居る時、大丈夫といつて自分一人で立つて居る時に、忽ちサタンの伏兵は襲うて來る。何はともあれ、先導者を見失はないやうにして一町よりは十間、十間よりは一間と出來得る限り彼に接近して歩み、又其の歩き方其の姿勢までも學んで、尚は能ふべくんば彼の踏むだ足の跡に我が足を入れつゝ、我らの前に置かれたる馳場を走りたいものであります。（明治卅七年四月、明治院卒業説教筆記）

理想に達するの旅程

愛する者よ、我ら今神の子たり、後いかん未だ現はれず。その現れん時には、必ず神に肖んことを知る。其は我らの眞狀を見るべければなり。（ヨハネ第一書三〇一）

我れこれらの望を既に得たりといふに非ず、亦すでに全うせられたりと云ふに非ず、或は取ることあらんとて、我たゞ之を求む。キリスト之を得させんと我を捕へ給へるなり。兄弟よ、我れ自ら之を取れりと云ふにあらず、惟この一事を務む。即ち後ろに在る者を忘れ、前に在る者を望み、神キリストによりて上に召して賜ふ所の褒美を得んと標準に向ひて進むなり。（ピリピ書三〇十二、三、四）

右はヨハネとパウロとが理想に向つて進行する思想を明言したる者なり。我が青年兄弟姉妹も亦理想の旅をなす者にして、今や旅程中の或峠を越え又は津を渡り、又は關門を通過するに逢へり。焉ぞ一種異常の感なきを得んや。日暮れて道遠しとは老年の嘆なれども、青年は早晩駿馬を驅るとでも云ふべし。誰も彼も皆旅の世を渡る者なれども、地球と共に唯物理的の旅程を辿る者と、遙かに理想の發達を望みて意識的に倫理的に進行する者とあり。

一定の計畫なき事業到着點の定まらぬ旅行程怪かる者はあらじ。我卒業生諸氏はヨハネ、パウロに劣らぬ高尚完全なる理想を懷かるゝ事として、偖て如何なる注意と覺悟とを以て此の旅程を進むべきやは、吾人の今朝考へんと欲する所なり。

（一）如何なる旅裝をなし何の護身具を帶ぶるやを記憶し、應分に身を處せざるべからず。

天路歷程のクリスチャンなる旅人は、義の護胸を當て信仰の盾を取り、救の冑を着て、聖靈の劍を提げたりと云ふ。左れどより古き青年ダビデは一枝の杖と石投とを携へて戰場にまで出でたりと云ふ。基督は其の使徒に履や杖までも携ふることを禁じたり。いかにも單純なる旅裝と云ふべし。旅裝の繁閑は其の代其の時其の身分の事情による事として爰に記憶すべきは自己は如何なる旅裝をなし居るやにあり。即ち自己を知ることなり。知りて能く之を制することなり。理想に向つて進まん趣旨に適する樣に自らを制せざるべからず。自制必ずしも消極的の傾向のみに留まるべからず。氣を鼓し勢を作るも又自制なり。而して過分の自制に陷らずして、適宜に到來せる機會あらば可成一度相應の難事に當り見ることを心懸くべし。當難練磨謙虛誠實にして之に處するときは如何に己れの弱きを知るのみならず、同時に幾分か己は取るところあり、自ら信ずるに足るべきものあるを看出さん。是れ實に快心の事にして進取敢行の意義を助長すること寡からざるなり。

（二）周圍を擇ぶことを愼むべし—良友の必要。

常に鄭聲を聞き常に殘忍なることを見、常に輕佻浮薄の交際を重ぬる等、必ず人心を腐敗せしむる事疑ふべからず。去れば善き境遇に善き感化あるは疑ふべからずと雖も、安全なる周圍必ずしも安全にあらざることを期せざるべからず。埃田の古話之を證し、後代の實歷史亦之を繰返して餘りあり。要は凶賊裏に住居すれば如何なる堅城も一旦に陷るべし。

（三）長途の興奮力——功名心。

長時日の旅行には興奮力を要す。其の有効なる一動力は功名心なりとす。惟其の眞僞を判知して選擇を正しうせざるべからず。倫敦のジチーラムプルのキアムベル氏曰く『今時の最大危險は人々の功名心に過ぐるに非らずして、功名心の不良なる形式を用ふるにあり』と。聖詩に曰く『われなんぢに感謝す。我は畏るべく奇しくつくられたり』（詩篇百三十九〇十四）此の奇しき性を稟けたる人間其の賦與者の爲めに賦與せられたる天性の全幅を發展して理想に到達せんと欲するが如きは功名心の聖なる者大なる者高き者といふべし。カーライル曰く『功名心に二種あり。甲は全然非難すべき者にして、乙は賞讃すべき又免れ難き者なり。單に己を他人の上に輝かさんとする私慾より來る者は下劣卑陋の者と見做すべく、『汝己れの爲めに大いなることを求むるや、之を求むるなかれ』（エレミヤ書四十五〇五）而して予猶ほ謂ふ、各自天賦の量に準ひ自家を發展するは妨壓する能はざるの傾斜なり。是れ適當にして避くべからざる者なり。人間の義務にして義務中の義務なり。地上に於ける人生の意義を略叙すれば當に斯の如くな

るべし。『自家を開展し其の能力を活用すべし』と。是れ各人の爲めに必要避くべからざるものにして吾人存在の第一法なり。『天命之謂性率性之謂道』も亦此の謂乎。

（五）熟考と速決の慣習を作るべし。

熟考と速決とは偏配すべからざる者なり。物事は熟考せざれば其の精に至る能はざれども人生の行事は他に連關すること多し。己れ自らの勝手に任せがたし。是れ速決實行の要ある所以なり。而して猶豫の時間ある日には勿論熟考を加ふべし。苟旦に附するの陋習を避けざるを得ず。又既に決して實行しつゝあるものにも、能く省察熟考を加へて改むべき者あらば之を改むべきなり、此の二者相待ちて成功をなすべし。然らざれば常に悔い多し。諺に曰く『毫厘の差千里の謬』、是れ熟考の要と速決の要とを含有するものなり。

（六）沈勇を養ふべし。

人生の旅行を偏に動物的に考へても、有形無形の敵に對する勇を解するなるが、倫理的に理想的には尤も大なる勇氣を要するなり。利害の外に義不義を判じ、人の見ざる處に獨を慎むこと極めて陰匿せる者ながら、自ら欺くこと甚だ易くして、之に對して良心の指示に服すること沈勇を用ふるの大機會なりとす。

旅程の初めは將來の爲めに勇氣を養ふの便利あるのみならず、現に其の要甚だ多し。ヨシアのモットーは『心を強くして且つ勇め』なり。尋常の徒歩旅行には三日めを最も難儀とする如く、初めの打出しには困難多し。尚ほ引續き風雨山川の難行が行く程顯れ來る。勇往邁進不撓不屈を以て自重するに非ざれば半途墮落の例指屈するに遑あらず。

（七）旅程の初期には屢ば奇道をなすも益あるべく、半ば已後は可成變化を慎むべし。

三十五六までは職業を換へて試驗をなすも善からんなれども、四十に近づきては可成一定して其の方針を變せざるをよしとす。時の模樣により、地位には變化ありとも、業體は可成經驗の有る者を固持するを成功の便利とす。

（八）常に理想を見失はぬことを勤むべし。

北斗の位地は四季毎に變ずるも、其の手が北極を指すこと常に變ずることなし。人事變化多し。火を以て火を救ふことあり、平和の爲めに戰ふ事あり、若痛を治するが爲めに苦痛を與することあり。一旦反對の方向に向ふがごときも、其の目的は常に見失ふことなきを要す。後ろにある物を忘れ前にある者を望みて、常に目を放さざるを要するなり。

吾人の理想を完全するは遠きを期せざるべからず。理想に接するは現在時々刻々に及ぶべき丈の力を以て取り得べき丈の程度に於て絶えずこれを行ふべし。而して各人品性の理想必ずしも同一なること能はざるべしと雖も、最も要するところは其の完全なること活潑なる感化を與ふるものにあり、慰藉

奬勵を與ふる者にあり。是れ古今の人所謂知性上の理想に滿足せずして、深く宗教の信操に入り、神的靈的本尊を信奉して始めて滿足する所以にあらずや。（明治三十九年三月廿五日、青山學院卒業說敎筆記）

青年の開拓すべき領分

青年者はよくいふ、老人は青年の心を知らぬと。之は實際である。實際分らない。平生傳道する際にも困ることは商業家の心が分からぬ、町人の血統を受けて來た商業家の考が分らぬ、何處らを押してゆけば呼吸に中るか、ドウも分らぬ。青年者の心も亦然りで此處らであらうと思ふと、二三日經てば左樣でない。煩悶々々と云ふが煩悶と云ふことは氣の毒である、可哀相であると思ふが私共には能く分らぬ。

青年者は仕事が出來る、委員になつてもやれる、運動もやる、學問は良し事務が出來る。ッンナラ何の方面でも成功するかと云ふと左樣でない。

彼等は物は識つて居る、仕事が出來るが成功せぬ。人柄も好い勉強もするが試驗に落第すると失望する。轉校又轉校物に飽き易い。

我輩の青年時代には煩悶もあつたが、今の青年者の如くに容易く死なねばならぬ抔と思つた事は無かつた。兎に角今日の青年の心は我輩には分らぬのである。

併し青年者を知るものは青年者である。此處を押せばかうなると云ふことは分つて居る。それならば青年者を救ふものは青年である。青年の傳道は青年がやらねばならぬ。

此の程信州へ往つた時、彼地の高等女學校で話したことである。小學兒童の子守は女子の仕事である今日は臺所にばかり居る時でない、子守ばかりして居る時代ではない、敎育事業を負擔するは女子の責任であると。

今の小學校敎員には男の若い先生が多い。中學校を終つたか終らぬか位の青年が敎員をして居る。兒童の子守をして居る。然し今日は青年者が小學校の敎員をして居る時でないと思ふ。青年は遠征的（厭世的にあらず）でなくてはならぬ。危險にして腦力の要る仕事に青年が當らねばならぬ。

日本には男子の耕すべき山野が澤山ある。電信技手や鐵道郵便の事務には婦人が適當である。男子はモー少し頭腦の要る手荒いムッヽリとした處を擇ぶが好い。

故勝伯が横井小楠を評して『鉈の如し』と言つたことがある。小楠は大きなものが斫れる。剃刀はよく切れるが薪は割れぬ。

青年は剃刀となつて切れるよりも、薪を割るものになつてもらひたい。腦の要る腕の要る意志の要る仕事は男子の引受くべき方面である。感情の方面は女子に任かせて置いて宜しい。

意地我慢の要る事は男子之に當るるべし。宗敎も青年の宗敎は感情的に流れては不可。意志のない宗

敎は傳道の場合役に立たぬ。開拓の時代は血あり涙あるべし。併し意氣地なく泣いてたまるものか。涙出るとも泣かず、意志の修養を重んずべし。之が男子の任ずべき所であらうと思ふ。敎育ある青年の任ずべき所であらうと思ふ。

女子の任ずべき所を考へ、女子に地位を與ふると共に、青年の開拓すべき領分を見出さんことを今日の青年者に望む次第である。

（明治四十一年五月廿三日、青山における青年會同盟關東部會演說會の談話筆記）

夏休みに際して

（一）誘惑は變化より來る　夏休みは書生として一番大なる變化である。凡そ我等が一定の生活を續けて居る間は身體上道德上種々なる誘惑に遭ふ危險はないが、併し一つ變る時分には能く注意しないと大いに危いのである。道德上の誘惑は大抵變化から來る。變化の時には誰でも氣が弛む。變つた境遇に慣れぬ時分に誘惑が起り易い。身體も變化せなければならぬが變つた時に病を得るのである。

（二）パンの問題　マタイ傳四章にある基督の誘惑は第一パンの問題であつた。パンの問題は職業の問題である。如何なる職業をなして生活するか、如何なる方法を以て衣食を得るかと云ふ問題は必要の問題である。此の程度の學校では未だ心配は要らないが、併し之は早晩來る問題である。學資の問題卒業後の方針問題は必ず來るに違ひない。其の時『人はパンのみにて生くるものにあらず』との聖語を憶ひ出し道を守る事は大切である。パンの問題と道の問題とは往々衝突することがある。併し『神の口より出づる凡ての言に因る』と錄されたる如く、卑しきものを貴きものに從はせなければならぬ。

（三）宗敎熱　基督は聖書によつて勝たれた。其の時惡魔は基督の熱心に乘じた。信仰によりて勝利を得た時分に、我は信仰があると云ふ所から誘惑が來る。性質を選ばず何んでも出來ると云ふ時に驕慢が出る。之は宗敎家の大いに愼むべき所であると思ふ。神の敎に弊害のある筈はないが、人が其の弊害を作る。信仰も又然りで驕慢となり、冒險となり、遂に失敗に了ることが往々ある。

（四）權道は危し　第二の誘惑に勝てなかつた惡魔は、今度は世界の富貴權勢を以て誘うた。惡魔は基督に迫つて、我を拜せよ、我に降參せよ、我と和睦せよ、さすれば富貴權勢は自由に任すると言つた之は權道を學んで勝利を得よと云ふのである。かの日糖事件には立派な人も善い人も連座して居る。つまらない者は惡魔も相手にしない。立派な人、大きな事も出來る樣な人に誘惑がある。眞面目ばかりではゆかぬ。權道にてやるも可し、尺を枉げて尋を直すと云ふ事もある。餘り潔癖である、一寸はよからうと云ふのが惡魔の慣用手段で危い所である。基督は之に對して、主なる汝の神を拜せよ、拜すべからざる者を拜せない、取るべからざるものを取らない、此の腰は不義の爲に屈せないのであると斷言して惡魔を退けられた。

（五）注意に注意せよ　此の夏休みにこんな大問題に逢ふ事はないと思ふが、事の大小はさておき同じ

種類の事は起るであらう。其處で諸君に注意したいのは、第一に『注意』と云ふ事を怠らない樣にする事である。此れ迄は注意を自由に用ふる事は出來なかつた。然るに定まつた學校の課業を止めて自由の身となり、不規則の生活を送るのであるから自由に注意を用ゐなければならぬ。餘儀なく注意せなければならぬ樣に出來て居たのが自由になつた時に要るものは『注意』である。而して其の『注意』とは實際の世の中に注意する事である。學校にも實際的の事はあるが其は型である。諸君は此の學校の人理論の人、型の人であつた。今度は世の中の實際の人となつて家の事、親類の事、世の中の事に注意してもらひたい。而して成るべく親類朋友の間で家庭の生活をしてもらひたい。家庭の工合、親類の交際抔に氣を付けて世態人情を知ることは必要である。夏期休暇中仕事をすることもあらうが實際の事に注意して貰ひたい。

(六)旅行抔は贅澤　日本の樣な貧乏な國では家内五六人あつても三十圓あれば生活が出來る。然るに高等の學生は月に二十圓要る。其の學生が夏休みに歸省するも徒手で歸る。其の上此の頃は文明的に夏休みに旅行すると云つて餘計の金を要する。之は甚だ都合が惡るい。此の程も青森の一商人から此の夏を利用して北海道サガレン露領沿岸を汽船にて巡航探險の爲め書生を乘組ませたいから、斡旋を賴むと云つて來たので、余は今日の書生は親の厄介になつて居るに夏休みに又四五十圓の金が要るとは以ての外の事である。探險の爲ならば相當の實業家にでも賴むが可いと云つて遣つた事がある。之は頑固なる話の樣であるけれども、夏休みの間たりとも實地の事を能く見て自分の注意を練る樣にして貰ひたいと思ふのである。

(七)宗教の詮義　次に余の希望は此の夏休みの間を出來る丈宗教の詮義に用ゐてもらひたい。書生は一日たりとも書物を讀まずに居る事は出事ぬ。そこで休暇中には宗教的の書物を多く讀んでもらひたい。第一は勿論聖書である。近頃の書生の物を識つて居る事はとても舊時代の人間の及ぶ所でないが併し直面目に自分の身を修むと云ふものは無いやうである。基督教の話も一通り知らないものはないが、どれだけ聖書を讀んで居るかと云へば、一向讀んで居らぬ。多くは空論である。余は深く聖書を讀むことを勸める。其れから玩味して思想を要する書物を讀んでもらひたい。輕い讀書、たとへば小說に耽る習慣抔は甚だ好ましくない。

(八)神の思想を養ふべし　尙一の注意は聖書を讀んで基督教の眞髓を捉へるに當り、日本人に適切なる本當の神を捉へる事である。基督が父として紹介せられた神を聖書の中に見出すは甚だ大切である基督教の知識は存外我國に傳はつて居る。神の觀念も古くからあるけれども其の觀念は昔から進步しない。日本の思想界に佛教の貢献は甚大であつたけれども、神の思想を助成するには寧ろ有害無益であつた。佛教は凡神論で神の有無は漠然として居る。日本へ佛教は渡來して日本の神と調和する必要があつたが、神の思想の上には何の進步もなかつた。儒教には罪の觀念がない。神のことも未來のこ

ともいはぬ。それで日本の神の思想は甚だ淺い。智識ある人は宗教に冷淡で無學の人は迷信が甚だしい。日本人に宗教を輕んずる風あるは神の觀念淺きが故だと思ふ。之では國粹を失ふのみならず進歩を害する。否生命を失ふ。信仰は遺傳血統による。父母祖先の勢力は信仰に大關係がある。信仰は先づ個人的に養ひ、其から段々親類朋友に廣がつて行かなければならぬ。長く基督教の行はるゝ處には神を愛し神を敬ふ空氣がある。之は實に羨やましい。知識は授受出來る、併し信德すなはち靈性上の德は以心傳心である。深く神の前に養ふやうにしたい。

(九)神國建設の責任者　信徒の青年男女諸君、諸君が神を信ずるは結構である。併し學校と世間とは境遇が違ふ。諸君が獨りで不信者の中に入れば自然に周圍に同化して、宗教上の感情を失ふかも知れぬ。諸君は學校を出て後も神を敬愛する修養が要る。諸君は皆日本に神國を建設する基礎である、責任者である。五千萬の日本人中基督信者は七萬人の少數に過ぎぬ。此の少數者を以て帝國を教化するは實に鴻大なる事業で、從つて又光榮ある事業である。余は諸君が此の事に心を用ゐ出來るだけ修養の深からん事を願ふ。(明治四十二年六月二十七日、青山男女兩學院聯合禮拜說教筆記)

女訓小言

婦女は恥を知り、よく慎みて宜しきに合ふ衣にて自ら飾り、髮を編むことと金と眞珠と價貴き衣を以て裝飾とせず、善き行爲を以て裝飾とせんことを願ふ。神を敬ふ女は斯くの如くすべき事なり。婦女は凡のこと順ひて靜かに道を學ぶべし、われ婦女の教を施すこと、男の上に權を執ることを許さず、婦女は只靜かにすべし。(テモテ前書二〇九―十三)

青山女學院の今昔を思ひ一小學校より漸次發達して今日の盛大を見るは感謝すべき事である。三十五年の當初はじめて教育を受けた婦人は既に母となり、今日は其の子を女學校に送る程に年所を經て居る。又當時學校に從事せし教員も今日は相應の年齡になつて居る。多くの困難と星霜とを經て今日に至りしは感謝せなければならぬ。又米國より此の學校の後援をなしたる人々に對しては厚き感謝を拂はなければならぬ。

青山女學院が社會に用をなしたることは如何程であるか、又日本の教育に如何程の貢献をなしたるかは今日に云ふべきでない。併し一言にして申せば女學院の如きは教育機關の數より見ても、教育主義より見ても必要であつたのみならず、今後とても必要であらうと思ふ。今や教育は進歩して居るけれども女子教育は男子と程度を異にして居る。此の時に一つでも高等教育を授くる女學校は必要である。女子高等教育は問題である。然るも本校の如き女子の高等教育を標榜する學校はなければならぬ。今日は用の濟んだ祝典でなく、用をなし、又大いになさなければならぬ時と思ふ。

教育を受くる女子は、一面に於て二十世紀の世界的女子である。斯く思うて教育しまた教育を受けねばならぬ。又明治時代の大和女子である事を思はなければならぬ。最後に一層深く考ふべきは永遠天

國の女子と云ふことである。

パウロの教は何れの時代にも應用が出來る。本文の精神は萬古不易であると思ふ。併し必ずしも文字に拘泥する必要はない。何故なれば此處に『髮を編むこと』と云ふ如きは適用の出來る處と出來ぬ處がある。『金と眞球』云々とあるも二千年前と今日とは價が大いに違ふ。其故に文字に拘泥せずして精神を採らなければならぬ。女子の職業も文字通りに解すれば究屈となるが、其の精神は今日に應用して差支ないと思ふ。

二十世紀の女子の教育を受くるに當り注意をすべきは今日の世界を知ることである。二十世紀は地球上知れざる處がない。北極へも二人行きて功を爭うて居る。近き將來には南極へも行く人があるであらう。極東の一人娘も早晩世界中に關係を及ぼすのである。私は此頃東海道に居り海岸で新鮮の空氣を吸ふを日課として居るが、毎日同じ波を見て思ひは遠く亞米利加にまで及ぶのである。如何に遠く隔つて居るも人は世界に關係すると思うて教育せなければならぬ。婦人は内に居るものであるけれど世界の大勢を忘れてはならぬ。『女ですから、』『女ですけれども』と云ふことを婦人より聞くが、併し世界の婦人なるを如何せん。

兎角婦人は學窓を去り家を持つと世界の人でなくなる。之は教育するものは考へなければならぬ。蓋し婦人は一家の柱石である。二十世紀の教育がなければ其子を教育するにも矢張り昔通りにする。世界の婦人は世界の母である。此の思想を根本として二三の事を述べて見たい。

婦人でなければ出事ない事をするは當然の話である。人の妻となり母となるは婦人當然の務めである男が人の妻となり母となる事は出來ない。併し男でも出來るけれども女の方がより能く出來る仕事がある。其の中に就いて小學校の普通教育は婦人のなすべき職業であると思ふ。之は志さへあれば男子より能く出來る。自ら任ずれば男子に優る成績があがる。斯くいへば反對論者ありて婦人失敗すると云ふものがあるかも知れぬが、其は性質でなくして志の如何に由ることゝ思ふ。男に優りて出來る事は何でも奮つてやるべしである。官廳會社抔では事務員又は會計に女子を使用する。任じて此の方面に働けば必ず出來る。我々も之を奬勵せなければならぬ。

次には明治の大和女子たることで、天を戴き地を踏み世界を股にかける世界的女子たるだけでは足らぬ。二十世紀程國家的發達の時代はない。今日の如く政體國防其の他のものゝ完備して居る立派な國家は開闢以來ないのである。此の頃ロマ史の一端を繙いたが、ロマ帝國如何に盛んなりと雖も、今日の歐米の盛んに及ばないと感じた。世界博覽會は其の縮圖である。世界博覽會は世界の物を一處に見ると云ふ點に於ては世界的であるけれども、國家的にも英米獨露と各々國旗を揭げて大いに競爭をして居る。此の國々の特色を異にして居るのは面白い處である。各國の美術工業も各々其特徴を異にして發達して居る。

日本の女子は日本の特徴を能く辨へなければならぬ。歴史政體、家族の制度の如きも餘程外國とは違うて居る。日本は一種の家族制度である。歐米の家族風を吹込んでも行はれない。是非其の特色に從はなければならぬ。而してパウロの『すべてのこと順ひて靜かに道を學ぶべし』との名教は、日本の美風と一致して居る。日本の女子は柔順忍耐して夫の爲め子の爲めに犧牲となる美質を持つて居る。昔貞女は九寸五分の短刀を懷にせしが、今日は之に代ふるに智識學藝を持ち、淸い感情と自重の見識を以て貞操を守ると云ふ樣に國粹に進歩さしたい。又母妻としては明治國家が世界に立つて如何なる形勢にあるかを察せねばならぬ。少くも朝鮮、支那、露西亞との國際關係位は知り居らねばならぬ。土地が狹くして人が多い處は人を立派にしなければならぬ。之は母と學校とに待つ所がある。世の中は追々困難になる。日本は土地が小さい、人が立派になるより外は仕方がない。男子の立派になるは女子に關係する。人の德と力とを養うて國力の基を造らなければならぬ。此の德と力とを養ふには男女の道を正しくしなければならぬ。男も女も居る處で男女の道を正しくしなければならぬ。之は必ずしも婦人のみの責任にあらず男子共に任ずべき所である。

世界の女子たり日本の女子たるも、尙ほ一の資格を全うしなければ物足らぬ。其は永遠天國の女子と云ふ確信である。人の子、人の女子としての資格は貴い。國の成敗の分るゝ所である。世界的女子たり日本女子たるも、天國の女子たることを失へば無意味となり、世界的たり日本的たる事が出來ぬ。

二十世紀の世界の女子として大和女子としては批評眼を以て見て居るものが多い。又隨つて注文も多い。理想を求めても得難いのである。況んや現代の日本には婦人の誘惑困難甚だ多く、其の中に成功するには大なる力と慰藉とがなければならぬ。世に女の道を全うし成功せんと欲せば是れ一の戰場である。道を守る方面より云へば道場である。修業場である。此の場合に當り本當に同情を以て慰むる天の父が甚だ必要である。之なければ戰に成功することが出來ぬ。此の父の前に出づることが無ければ、戰も無意味となり修道も目的がなくなつて仕舞ふ。

天父と其の遣はし給へる基督の御裾に縋り膝下に出て始めて戰場は普通の戰でない。父に事ふる爲め罪惡に勝ち善を行うて神の旨をなすためと云ふ理由が判る。この困難は天父に歸る途中の山河風雨で先きに立派な目的がある。此の大なる關係を敎ふることは女子敎育に必要である。之は靑山女學院の大目的で、基督の妹となり、天父の膝下に樂しむ天國の女子を養成するにある。此の關係は深くして神祕的である。けれども自由が多い。之がなければ世界の女子又は日本の女子として認めらるゝことは出來ぬ。

女子は兎角隱德を以て立つて居る。椽の下の力持である。併し天の父があれば深夜人靜まりて父の前に訴へることが出來る。何處に居つても神と交はることが出來る。基督に由つて示されたる神の同情を得ることは大切である。

今日過渡期の青年男女に教を信ぜしめて後に困ることがある。世間に出てどうする、日本の制度の中でよく神を信ずるか、社會に立つてどんなに心配するかと思ふと傳道したのを悔ゆることがある。併し天の父が見て居られる。社會の中に入れば我々の思ふやうにならぬ。よろしい、神は御存知である。神に訴へよ、さらば涙を拭はれる。心に束縛あるとも天の父に縋り信仰を以て神に從ふ事を勸める。大和女子の教育には學問を教へなければならぬが、神を紹介して天父の女子とすることは大切にして利益と幸福のある事である。この心をもて教育を受ける樣にしたいものである。

（明治四十二年十一月十四日、青山女學院創立三十五年記念說教筆記）

第九編　同時代人物觀

新島襄

追思故新島襄君

人物を觀察するに二方面あり、曰く先天の性、曰く後天の德。

故新島襄君、志望高遠、意氣俊勵、碌々として市井の間に朽つること能はざるものは其の先天の性なり。君の境遇、教育、時勢等は、必ず何等か拔群の姿を以て君を世に紹介せしならむ。

新島君辭禮慇懃、接人倦怠の色なし。人をして一見胸襟を吐露することを惜まざらしむ。談笑の際克己献身の精神をして他の衷心に通徹せしめ、覺えず同情を表せしむるものあり。是れ君が後天の德なり。

此の性此の德、其の傾向に於て或は相矛盾せざるやの疑を免れずと雖も、寔に是れ事實なり。先天の性に就ては讃美を天に歸すべし、是れ天の專にする所なり。後天の德に就ては吾人先づ新島君を嘆稱して終に之を基督に謝すべし。蓋し新島君の特別の人豪にして又特別の功業を建てしは、此の後天の德實に之を定限し之を支配したればなり。

先天の性は相移すべからずと雖も、後天の德は相助け相達することを得べし。新島君を敬慕する者宜しく其の後天の德を學ぶべし。自己の別異なる天性と境遇とより生ずる無數の別異なる新島を得るに至らば、是に於て新島君の德化始めて大いに天地の化育を賛すと云ふべし。若し夫れ類似の小塑像を造らんとするが如きは、是れ先輩の光榮を枯死せしむるものなり。

故新島襄君の性は美なり、故新島襄君の德は高し。性は以て讃すべし、德は以て學ぶべし矣。

（明治廿七年一月二十三日、青山學院青年會の新島氏記念會に寄せられたるもの）

新島襄君とムーデー君と

今こゝに逝きにし我らの兩先輩を偲ばんか。新島襄君眠られてより早や十年を經たり。かの時は余紐育にありしかば、凶報は翌日即ち一月廿四日電信にて來りぬ。想ふに新島君の臨終は恰も武士が勝負未だ決せざる陣中に歿したらんが如し。最期よと覺りし時、近親の人々來るとも女々しく泣く勿れと豫め戒められきとぞ。そが枕許には地圖懸けられ、こゝは斯く彼處はかくと計畫立てらる。君が任じて肩にかけつる國の事情は、殊に君をしてかくならしめしならん。志を立てゝより死に至るまで計りに計りける事未だ全からず、よし我身は神に任せ奉りて安しと雖も、事業の上には心許なき感あり。かくても惡びれたる狀を見せざらんとせられぬ。

ムーデー君の臨終は之と趣を異にす。君は十二月の中頃よりカンサス市に於て大運動に從事してをられき。君の運動は一週間より永きは一箇月に亘りて日毎に大說敎を試みらるゝなり。新聞の報ずる所によれば此の度の會はムーデー君に取りても空前の大會なりしとぞ。君が英國に赴きけるをりには一萬七千人の聽衆に演說し、フィラデルヒヤにては一萬一千の人々に道を說きし事あり。されば此の度のは少くも一萬以上の人々を集めて日夜盡しをられしならんか。君かねてより心臟を病めり。日本へ來らるゝを果さゞりしも此が爲とかや。此の度の會央にして胃に痛みを覺え、醫師のいふまゝに運動を中止してノースフイールドなる家に歸られしに、十二月廿二日溘焉として逝かれぬと聞く。

此の日の朝家族等君の病床に侍りをりしに、君俄に眠より醒めたらん如くに『何事ぞ』といふ。君の女父に縋りて『父上、妾は御身と別れ難きに』といへば、君は徐かに『神もし余に爲させ給ふべき事業あらば余はいかでわが生命を棄つべき』と、君はかへりて健かなる人を慰めらるゝなりけり。かくて二人の子息と一人の女婿とに『余は此れまで熱心に努めたり、されどこは貢金を追はんとてにあらず卿等は余の創めつる諸學校を繼續せよ』といひ、さて後『世は退きて天開けたり』と唱へぬ。之を最後の語として、あとは祈れる狀なりしも聞えず、いと穩かにかの世に移りぬ。

ムーデー君の學校三あり。一はノースフイールドの女學校にて、構内六萬坪もやあらん。二百人の女生こゝに寄宿するを得べし。夏季學校奚に開かる。四五千人を容るべき講堂は、コンネクチカットの谷を見下ろして山腹にあり。ムーデー君の家は此の校に隣りす。男子の學校はマウント、ハルモンに

ありて學生少からず。シカゴには有名なる傳道學校あり。大福音士が子孫に託したる學校とは是等をいふなり。

悠々として迫らず落附き拂ひたるムーデー君の臨終と、我新島襄君の末期との異なれるは境遇によるならん。ムーデー君は英語を語る民の間に生れて、多數の人々に所信を語り、合衆國といはず英國といはず、到る處相應に成功したりき。而して新島君が日本を思ふとムーデー君が米國を思ふことは情も同じからず。新島君は神が己に任じたる事を果さずして死すとの感を免れず。かつ基督教徒とはなりたれとも、少時より武士の教育を受けたる事とて其の面影自ら殘りをりき。ムーデー君と廿七年間も共に傳道したるサンキー氏、故ジョンホールの教會にてムーデー君が生前氏に語られしといふを述べて曰く『君よ、ムーデー死になりとのこと新聞に現はれたりとも、其れに欺かれ給ふな。天の父は余に不死の靈を與へたまひたれば』と。いかにも面白く優しき心ばえならずや。これ實にムーデー君の信仰なりとす。

諸名家がムーデー君を評する語に常識に富むといふもあり、勉强家なりといふもあれど、正直なり、蔭日向なく忠實なりといふ語最も多し。ムーデー君はまことにムーデー君なりけり。ムーデー博士にもムーデー校長にもあらざりき。物知り顔の大學生も君が俗辯にて語るをば涙流してぞきく。ムーデー君が英國大學にて語りしをりなど、初は學生目くばせして相笑ひぬ。君は風采揚らず、學者らしくも說教者らしくもあらず、よく見ても船長位なるべし。丈高からずして腹飽くまで太ければ、姿のをかしき蝦蟇に似たり。紺の羅紗の背廣を著して、此の人の語る狀を初見の人は誰も笑ふならん。大學生笑ひつゝも、翌日もゆきて聽きぬ。何とやら眞面目なる所あり。其の翌日もゆきぬ。此の度は先に笑へるものゝ中より涙を垂るゝものありき。かくて全會衆遂に動かされ了りぬ。

『願くば正しき人の如くに我れ死なん』（民數紀略廿三〇十）、『エホバの聖徒の死は、その御前に尊し』（詩篇百十六〇五）

フレーベルはいふ、『聖書は、我らに最もよき生涯を教へ、また最もよく死に處するの道を教ふ』と。

神道家は歌ふなり、『ちれやちれ散りてぞ花は根にかへる實を結ぶぞと人はいふなり』、げに正しき者には死ぬる時にも望あり。願くば神よ、我らをして正しき僕の如く死なしめ給へ。（明治三十三年一月）

片岡健吉

片岡健吉君を追念して其の教訓を索む

わが生けるはキリストの爲め死ぬるもまた益なり。（ピリピ書一〇廿一）

日本譯の聖書には、死ぬるも我が益なりとあり。英語を見れば、我の字は寧ろ意譯なり。今英譯に從て之れを除けり。其の意は此の益は勿論パウロの益なるべきも、其の他に對して損とのみ思ふべからず、生前未だ發揚せざりし教訓を死によりて明になせる者も多かるべし。されば他人にとりて